栗駒町文化財調査報告書第３集

長者原遺跡

平成７年３月

栗駒町教育委員会

長者原遺跡

序　　文

栗駒山の裾野に開けた栗駒町は豊かな自然に恵まれ、その土地には多くの埋蔵文化財を包蔵しています。これらの埋蔵文化財は、私達の祖先がどのような生活を送っていたのかを現代に伝えてくれる貴重な遺産であり、新しい文化を創造する基盤となるものです。このかけがえのない先人の文化遺産を保存、活用するとともに、後世に伝えていくことは現代に生きる私達の大きな責務と考えます。

長者原遺跡は、早くから館跡として知られており、昭和41年には開田作業中の畑で多量の古銭が発見されて話題となっています。また、昭和48年には町を主体とし宮城県教育庁文化財保護室、栗原郷土研究会の協力を得て発掘調査が行われており、古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡などが発見されています。

二回目となる平成５・６年度の調査は、遺跡の南寄りを東西方向に横切る町道長者原線の拡幅工事に伴うもので、多数の竪穴住居跡や溝跡、土壙などが発見され、当時の人々の生活の様子を知る上で貴重な資料を得ることができました。

今回、その成果が宮城県教育委員会文化財保護課をはじめ、関係者の皆様方のご指導とご協力により刊行される運びとなりましたこと大変うれしく思うとともに、心から感謝申し上げます。

平成７年３月

栗駒町教育委員会

教育長　千葉信一郎

例　　言

1．本書は栗駒町町道長者原線の拡幅工事に伴う宮城県栗原郡栗駒町長者原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

2．調査、報告書の作成は栗駒町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書における土色の記述は『新版標準土色帳』（小山・佐竹：1973）に基づく。

4．本書の第１図は国土地理院発行の１/25,000「金成」「築館」を複製して使用した。

5．報告書の作成に際して、発掘調査時に登録した遺構番号に欠番が出たが、原図の番号をそのまま本書に使用した。また、遺構番号は通し番号である。

6．報告書における遺構、遺物の実測図・写真図版の縮尺は原則として以下の通りである。

遺構…１/60　　土器、丸瓦、土製品、第18・21図の砥石…１/３

土玉、鉄製品、第13図の砥石…１/２　　石製模造品、石器…２/３

7．住居跡平面図の表記については以下の通りである。

外形の表記…壁が残存していない場合には掘り方の形状もしくは住居の範囲を破線で示した。

住居内の遺構の表記…掘り方をもつ遺構は掘り方を掘り上げた状態の上場・下場を実線で示し、柱・壁材・材の痕跡、焼け面・炭化物・貼り床の範囲については、それぞれスクリーントーンで示した。

8．本書の整理、遺物・遺構の実測・トレースは、山田晃弘・三好秀樹・笠原俊哉が行なった。

9．本書の執筆は、調査員全員の協議を経て三好秀樹が行なった。なお、昭和48年度分（付編）については佐藤信行氏に執筆を担当して頂いた。

10．発掘調査及び資料の整理に際し、佐藤信行氏、手塚均氏、栗駒町建設課から多大なご指導、ご協力を賜った。この場を借りて感謝申し上げたい。

11．発掘調査の記録や整理に関する資料及び出土遺物は、栗駒町教育委員会が一括して保管している。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1
第Ⅱ章　遺跡の概要……3
第Ⅲ章　調査の方法と経過……3
第Ⅳ章　発見された遺構と出土遺物
　1．竪穴住居跡とその出土遺物……8
　2．溝跡とその出土遺物……45
　3．土壙とその出土遺物……47
　4．その他の出土遺物……54
第Ⅴ章　考察
　(1)　古墳時代の竪穴住居跡と出土遺物……55
　(2)　古代の竪穴住居跡と出土遺物……57

調　査　要　項

遺 跡 名：長者原遺跡（ちょうじゃはらいせき）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：43004
遺跡記号：TM
所 在 地：宮城県栗原郡栗駒町泉沢長者原
調査原因：町道長者原線の拡幅工事に伴う事前調査
調査面積：約2000㎡（調査Ⅰ区…約500㎡・調査Ⅱ区…約1500㎡）
調査期間：確認調査……平成5（1993）年7月12日～16日
　　Ⅰ区事前調査…平成5（1993）年10月4日～15日
　　Ⅱ区事前調査…平成6（1994）年4月11日～6月17日
調査主体：栗駒町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：
　確認調査…阿部　恵・斎藤吉弘
　事前調査…三好秀樹・窪田　忍・笠原俊哉・藤村博之

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境（第1図）

長者原遺跡は栗原郡栗駒町泉沢長者原に所在する。この場所は栗駒町と築館町の町境にあたり、遺跡の一部は築館町字黒瀬にまで及ぶ。

遺跡の所在する栗駒町は宮城県の北西端に位置しており、北を岩手県西磐井郡に接している。この周辺を中心に宮城県北西部の地形を概観すると、西部では奥羽山脈が南北に縦走し、そこから派生した数多くの丘陵は緩やかな起伏をもって東へ延びる。これらの丘陵は陸前丘陵と呼ばれ、奥羽山脈に源を発する一迫川や二迫川、三迫川などによって複雑に解析されて樹枝状を呈する。また、その麓には扇状地性低地（迫川低地）が開けている。

栗駒町南東部の二迫川南岸をみると、陸前丘陵の一部である築館丘陵が東西に延び、標高30～60mのなだらかな丘陵地帯を形成している。この丘陵地帯の北東部に渡丸地区から黒瀬地区にかけて東へ延びる小丘陵がある。長者原遺跡はこの小丘陵のほぼ東端、標高30～40mの地点に立地している。

本遺跡の周辺には縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が数多く分布しており、これらの多くは一迫川や二迫川などの河川流域の河岸段丘や丘陵上に認められる。

縄文時代の遺跡としては、二迫川を挟んで対岸の丘陵上に新山神社跡遺跡や陣場遺跡、すぐ南側の丘陵上に掘切長根遺跡などの包含地がある。

弥生時代の遺跡には清水田遺跡があり、大泉式土器（伊東：1957）を出土している。

古墳時代になると、前期の豪族居館が発見されている伊治城跡がある。この居館を区画する溝からは北大式土器が塩釜式土器と共伴して出土しており、続縄文文化との接触の在り方が注目される(佐藤：1992)。また、二迫川の対岸にあたる北側の丘陵上には33基の小円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群があり、昭和46(1971)年に調査された2基の円墳からは青銅製の誇帯金具や蕨手刀などが発見されている（東北学院大学考古学研究部：1971)。なお、この同一丘陵の南斜面には大沢横穴古墳群や姉歯横穴古墳群などの横穴墓も認められ、内陸部における横穴墓の北限線とされている。

奈良・平安時代の遺跡としては、東方2kmの河岸段丘上に位置する伊治城跡が有名である。『伊治城』は古代陸奥国経営のために設置された城柵の一つで、その創建年代は神護景雲元(767)年とされている。時代的・距離的に極めて本遺跡と近接していることから、その関連性は看過しがたい。また、一迫川流域の小丘陵や河岸段丘上には佐内屋敷遺跡、御駒堂遺跡、佐野遺跡、糠塚遺跡などの集落遺跡もみられる。

中・近世には岩ヶ崎地区や鳥矢崎地区の丘陵上を中心に黒岩館跡、鶴丸館跡、八幡館跡、

No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	長者原遺跡	丘陵	集落跡、城館	縄文、古墳中、古代、中世
2	泉沢A遺跡	丘陵	包含地	古代
3	中島遺跡	丘陵	包含地	古代
4	掘切長根遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古代
5	鳥矢ヶ崎古墳群	丘陵	円墳	古墳後、古代
6	猿飛来館跡	丘陵端	城館	中世
7	陣場遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文中
8	栗原寺跡	丘陵	寺院跡、包含地	古代
9	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
10	栗原館跡	丘陵	城館、包含地	縄文、中世
11	新山神社跡遺跡	丘陵	包含地	縄文
12	大沢横穴古墳群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後、古代
13	伊治城跡	段丘	城柵跡	古墳前・中、古代
14	姉歯横穴古墳群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
15	鶴ノ丸館遺跡	段丘	城館、集落跡	縄文晩、弥生～近世
16	宇南遺跡	段丘	集落跡、城館	縄文前・晩、弥生～近世
17	御駒堂遺跡	段丘	集落跡	縄文、弥生～近世
18	山ノ上遺跡	段丘	集落跡	縄文、古代
19	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落跡	縄文中、弥生、古代
20	佐野遺跡	丘陵	集落跡	弥生、古代
21	糠塚遺跡	段丘	集落跡	弥生、古代
22	狐塚遺跡	段丘	窯跡	古代

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

猿飛来館跡、臥牛館跡など多くの館跡の存在が知られている。この地は旧上街道沿いにあたり、交通上要衝の地であったことも館跡が多い理由の一つであろう。

第II章　遺跡の概要

本遺跡では古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡と中世の館跡が重複するとみられている。

館跡は江戸時代の安永年間（1770年代）に書かれた風土記御用書出の桜田村の書出（「栗原郡桜田村風土記御用書出」）の中で『長者館』として見受けられ、館の範囲は南北30間、東西28間であったと記されている。

その後、昭和48(1973)年頃の開田以前までは畑の中に堀跡と土塁が残存していたと言われているが、現在ではその痕跡は認められない。

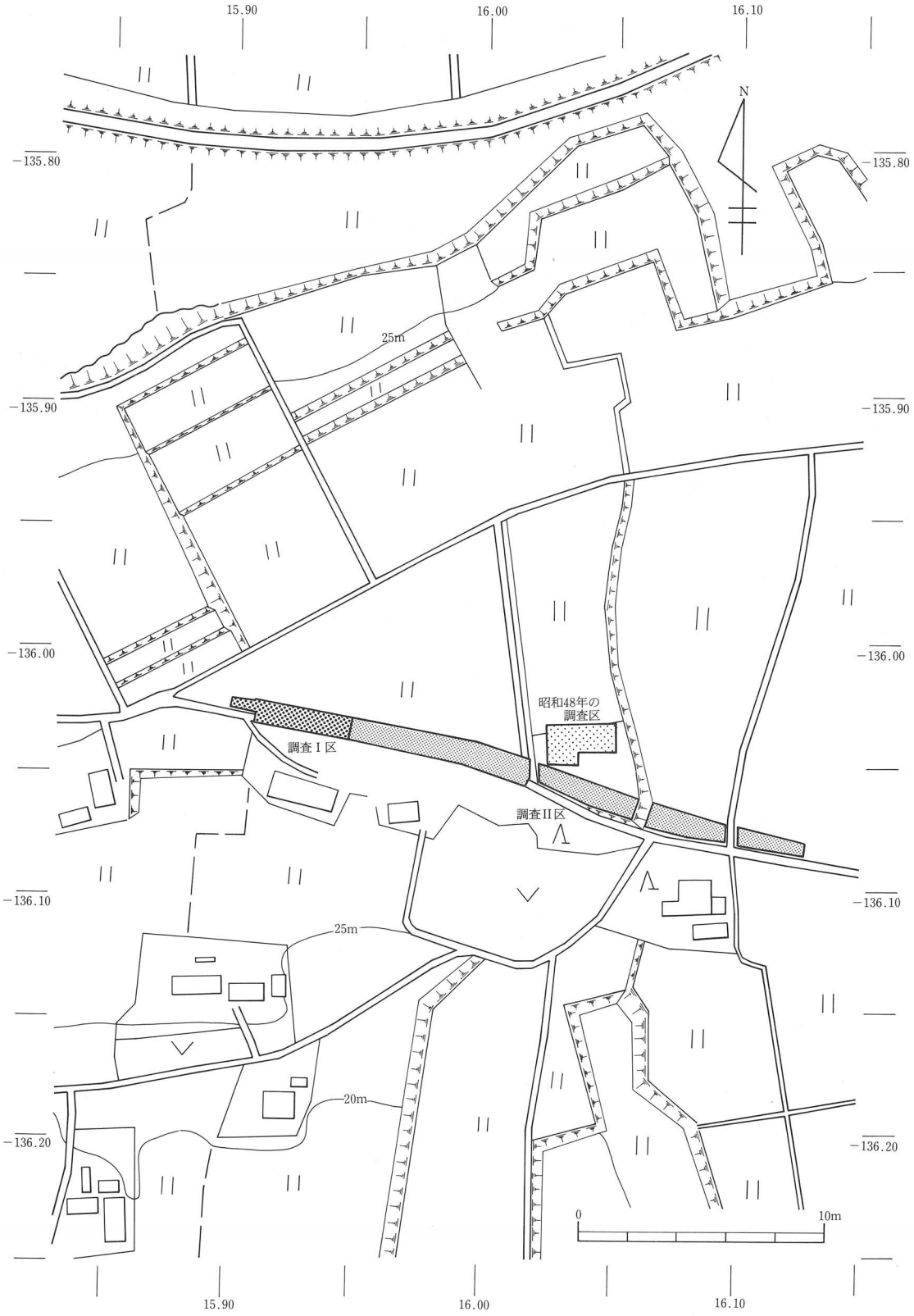
また、昭和41(1966)年に開田作業中の畑で多量の古銭が発見されて話題となっている。これらの古銭は銭名で56種類、合わせて4,325枚あり、最も新しい貨幣が元の「至大通宝」（初鋳年1310年）であることから、14世紀後半には埋蔵されていたものと考えられている（藤沼・神宮寺：1992)。

昭和48年には栗駒町教育委員会によって今回の調査地点のすぐ北側にあたる水田部分の発掘調査が行なわれており(第2図)、古墳時代中期の竪穴住居跡2軒、小竪穴遺構1基などが検出されている（金野・佐藤：1973)。出土遺物の中心は土師器や須恵器の土器類で、その中には奈良・平安時代のものも含まれていた。他には土製品や鉄製品などが出土しており、石製模造品の集中出土地点が認められることや、少量ではあるが黒曜石製の石器が住居跡から出土していることも見逃せない。しかし、この調査では館跡や古銭との関係については明らかにされなかった。

第III章　調査の方法と経過（第2図）

本遺跡の調査は、町道長者原線の拡幅工事に係わるものである。

平成5(1993)年になって、この長者原遺跡の南寄りを東西方向に横切る町道長者原線が拡幅されることが決まった。栗駒町建設課・社会教育課と宮城県教育庁文化財保護課とが対応について協議を行なった結果、工事に先立ち、丘陵の南斜面から東斜面にかけてを横



第２図　調査区の位置と周辺の地形

切る現道と拡幅部分合わせて約2000㎡の範囲を対象に発掘調査を実施することとした。まず、平成５年７月12日から16日にかけ確認調査を行なった。調査区内の道路拡幅部分の表土を除去したところ、竪穴住居跡、溝跡、土壙などの遺構が検出され、確認面から土師器、須恵器などの遺物が出土した。その後、Ⅰ期工事分にあたる約500㎡（調査Ⅰ区）については平成５年10月４日から15日にかけ、残りのII期工事分約1500㎡（調査II区）は平成６(1994)年４月11日から６月17日にかけて、全面を発掘する事前調査を行なった。

遺構の実測に際しては、調査Ⅰ区では任意に設定した基準杭１と基準杭２を結ぶ線分を基準線とし、基準杭２を原点とする直角座標を組んで行なった。また、調査II区では任意の点（基準杭３）を原点とし、南北軸を座標北に合わせて組んだ直角座標をもとにして行なった。なお、Ⅰ期工事部分の基準線と直交する線分は座標北より東へ６°56′44″偏している。基準杭１・２・３の国家座標は次の通りである。

基準杭１　X＝－136020.288　Y＝15919.595

基準杭２　X＝－136022.731　Y＝15939.654

基準杭３　X＝－136027.637　Y＝15981.364

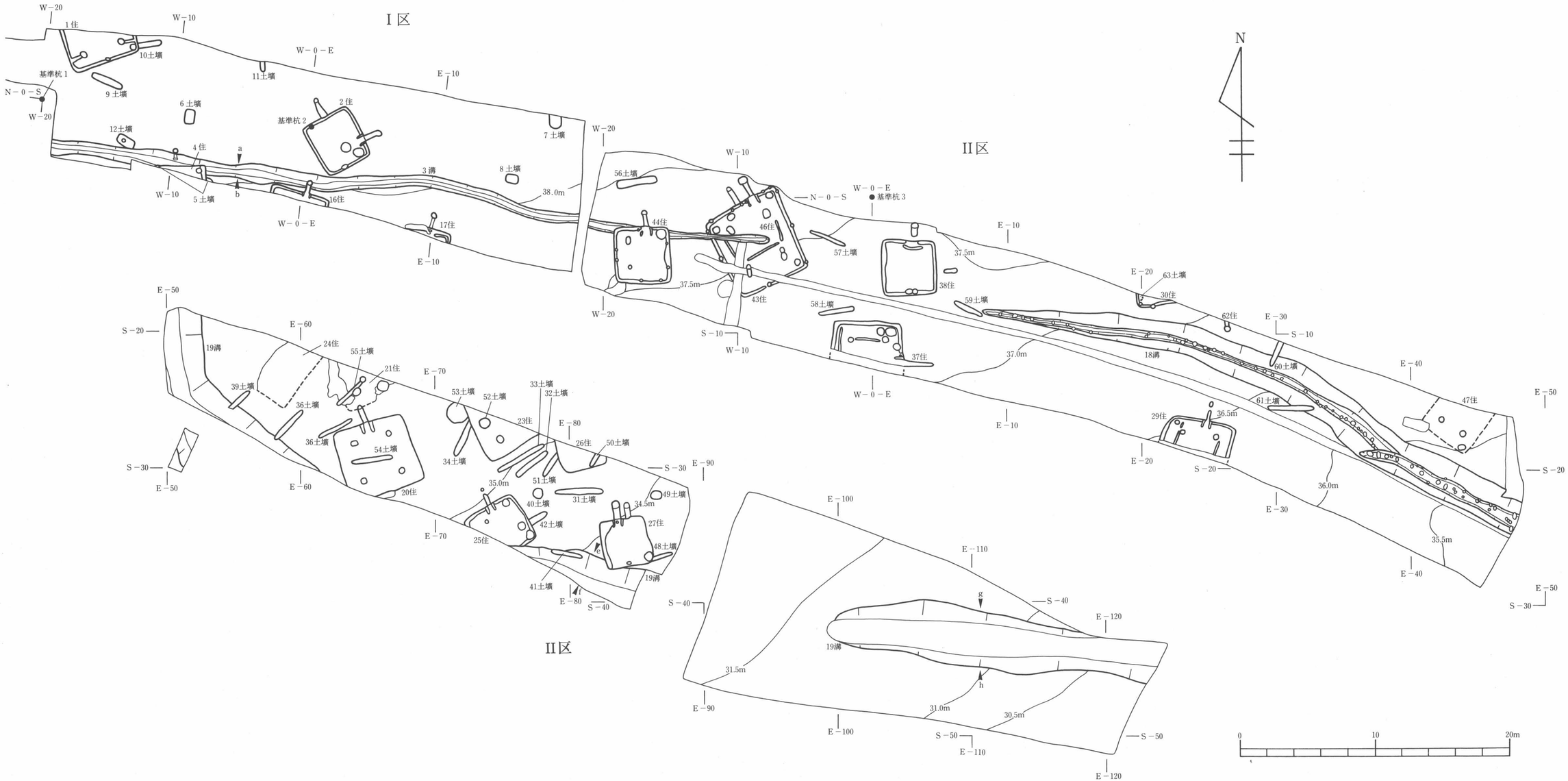
検出された遺構については20分の１簡易の遣り方測量によって平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。また、35㎜カラースライドおよび60㎜白黒・カラー写真による記録も併せて行なった。

平成６年６月２日には空中写真撮影を行ない、６月17日で調査を全て終了した。なお、同年６月４日には現地説明会を行ない、地元の方々を中心に約100名の参加を得た。さらに、町内の岩ヶ崎小学校、栗駒小学校、鳥矢崎小学校、宝来小学校、文字小学校の生徒も来跡し、遺跡見学を行なっている。

第IV章　発見された遺構と出土遺物（第３図）

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡21軒、溝跡３条、土壙33基である。また、各遺構や表土層からは土師器、須恵器、かわらけ、丸瓦、土製品、鉄製品、石製模造品、石器などが出土している。

以下、順に記していく。


I区
II区
II区
N
基準杭 1
基準杭 2
基準杭 3
1住
2住
4住
6土壙
7土壙
8土壙
9土壙
10土壙
11土壙
12土壙
3溝
5土壙
16住
17住
38.0m
44住
46住
56土壙
57土壙
37.5m
38住
43住
58土壙
59土壙
37住
37.0m
63土壙
30住
62住
18溝
60土壙
61土壙
29住
36.5m
47住
36.0m
35.5m
19溝
24住
55土壙
21住
39土壙
36土壙
53土壙
52土壙
33土壙
32土壙
23住
26住
50土壙
54土壙
34土壙
35.0m
51土壙
31土壙
34.5m
49土壙
40土壙
42土壙
27住
48土壙
25住
20住
41土壙
31.5m
31.0m
30.5m
0
10
20m

第 3 図　遺構配置図

1．竪穴住居跡とその出土遺物

【第１号住居跡】（第４図）

［位置・確認面］Ｉ区西寄りの緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第10号土壙と重複しており、これより新しい。

［平面形・規模］住居の北半以上が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、現状から東西5.2m×南北3.3m以上で方形を基調とする。

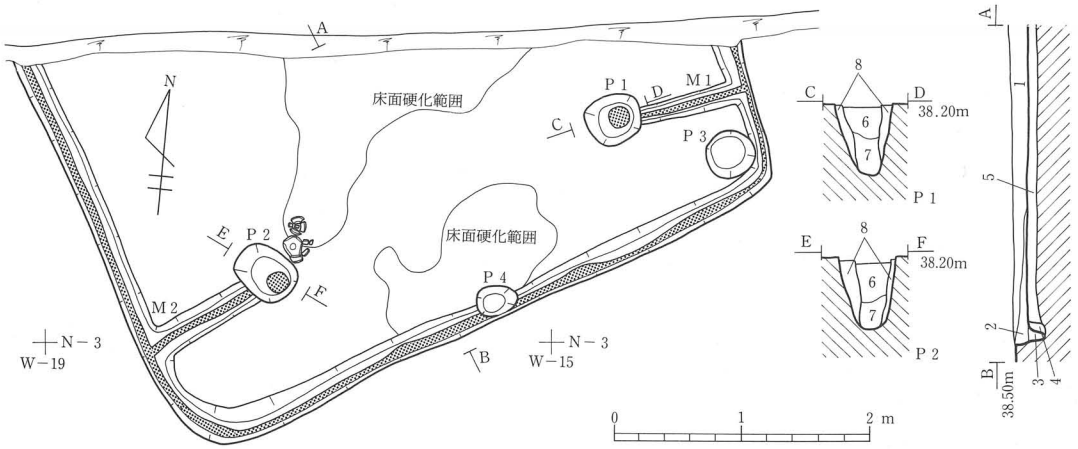
［堆積土］２層認められ、いずれも自然流入土である。

［壁］地山を壁としており、床面から住居の外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りのよい東壁で床面から15cmである。

［床］掘り方埋め土を床としている。ほぼ平坦であるが、中央部とＰ４付近が硬化して、若干窪んでいる。

［柱穴］床面で２個（Ｐ１・２）検出された。Ｐ１・２は住居の南壁から１ｍ程内側の平行線上に位置しており、柱抜き取り痕が認められる。掘り方の平面形は50cm×40cmの隅丸長方形を呈し、深さ約55cmで、底面には直径15cmの円形の柱押圧痕が残る。このＰ１・２は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［溝］調査区内では壁の直下を巡る周溝と、住居の南東隅・南西隅近くで、それぞれ南壁に平行してＰ１・２まで延びる溝（Ｍ１・２）が検出された。周溝は上幅10～25cm、深さ10cm前後で、断面は「Ｕ」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅３～10cm、深さ約10cmの黒褐色の堆積土が認められる。また、Ｍ１・２は長さ75cm程で、上幅14～24cm、深さ約15cm、断面は「Ｕ」字状を呈する。

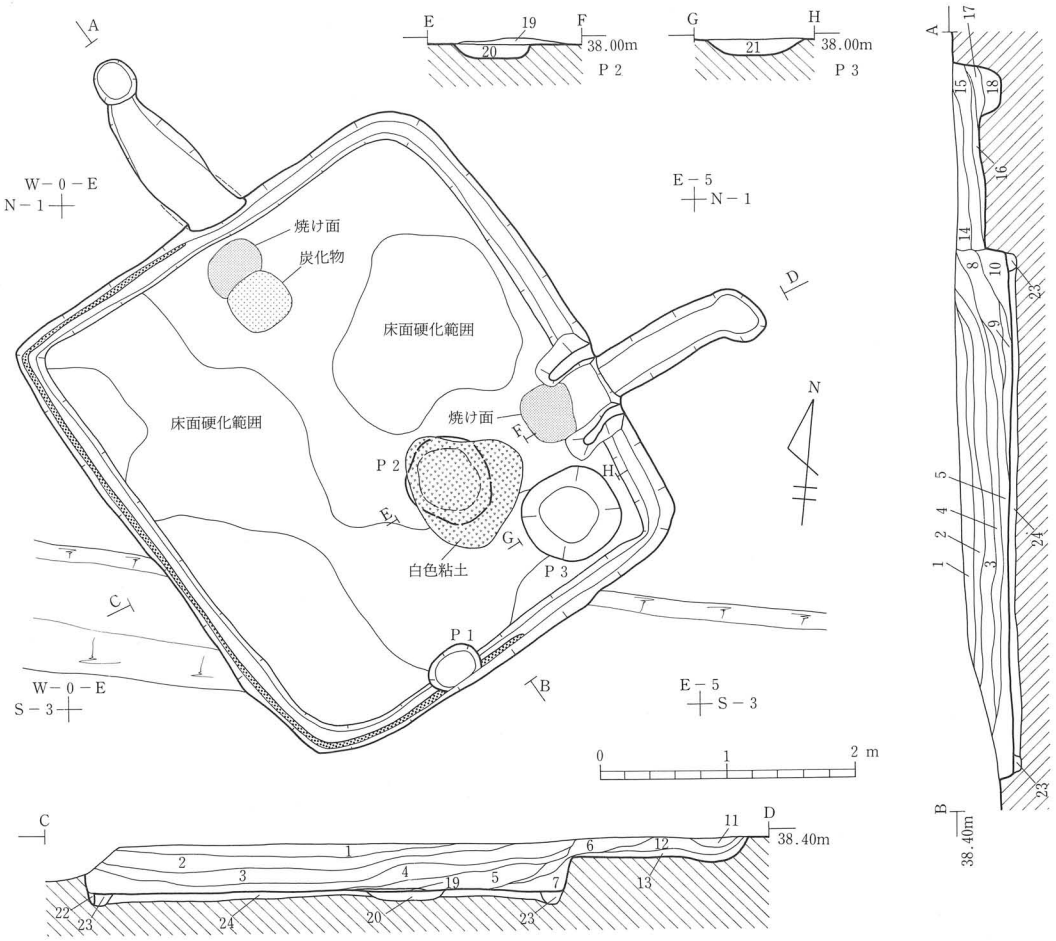


No.	土色	土性	混入物等	備考	No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物少量・地山小ブロック	自然流入土	5	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	炭化物少量・マンガン粒・地山ブロック	住居掘り方埋め土
2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物・地山粒	自然流入土	6	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト		P1・2柱抜き取り痕
3	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物・地山粒	壁材の痕跡	7	灰褐色（7.5YR4/2）	シルト		P1・2柱抜き取り痕
4	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック	周溝埋め土	8	褐色（7.5YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロック	P1・2掘り方埋め土

第４図　第１号住居跡

これらの溝の中央には幅５cm前後の材の痕跡と思われる黒褐色の堆積土が認められる。Ｍ１・２はそれぞれ周溝とＰ１・２につながっており、Ｐ１・２との前後関係は不明であるが、周溝との重複は認められない。なお、材の痕跡は周溝内の壁材の痕跡まで及ぶ。

［その他のピット］床面で２個（Ｐ３・４）検出された。Ｐ３・４はこの順に直径40cm・25cmの不整な円形を呈し、深さは16cm・25cmである。Ｐ４は周溝と重複しており、これよりも新しい。



No.	土色	土性	混入物等	備考	No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト		自然流入土	13	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土・炭化物多量	煙道（新）内堆積土、カマド（新）機能時堆積
2	黒褐色（10YR2/3）	シルト	灰白色火山灰ブロック多く	自然流入土	14	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土・炭化物・地山粒	煙道（旧）内堆積土（自然流入土）
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物・地山粒	自然流入土	15	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物多く	煙道（旧）内堆積土（自然流入土）
4	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山粒	自然流入土	16	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土・炭化物多量	煙道（旧）内堆積土、カマド（旧）機能時堆積
5	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト		自然流入土	17				炭化物層、カマド（旧）機能時堆積
6	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロック多く	自然流入土	18	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土ﾌﾞﾛｯｸ・炭化物・地山粒多く	煙出しﾋﾟｯﾄ（旧）内堆積土、ｶﾏﾄﾞ（旧）機能時堆積
7	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山粒	カマド内堆積土（自然流入土）	19	灰黄色（2.5YR7/2）	粘土		白色粘土層、床面直上に堆積
8	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒多く	自然流入土	20	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物・地山ブロック多く	Ｐ２堆積土（人為堆積）
9	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒・地山粒	自然流入土	21	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	炭化物・地山粒	Ｐ３堆積土（自然流入土）
10	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土ﾌﾞﾛｯｸ・炭化物・地山小ﾌﾞﾛｯｸ	自然流入土	22	暗褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物	壁材の痕跡
11	黒褐色（10YR3/2）	シルト	焼土・炭化物多く	煙道（新）内堆積土（自然流入土）	23	褐色（10YR4/6）	シルト	地山ブロック	周溝埋め土
12	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土・炭化物多く	煙道（新）内堆積土（自然流入土）	24	褐色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	焼土・炭化物少量、地山ブロック	住居掘り方埋め土

第５図　第２号住居跡

［出土遺物］床面から体部外面にハケメがみられる土師器甕が出土している。

【第２号住居跡】（第５・６図）

［位置・確認面］Ｉ区ほぼ中央の緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

［平面形・規模］東西3.8m×南北4.1mの正方形を呈する。

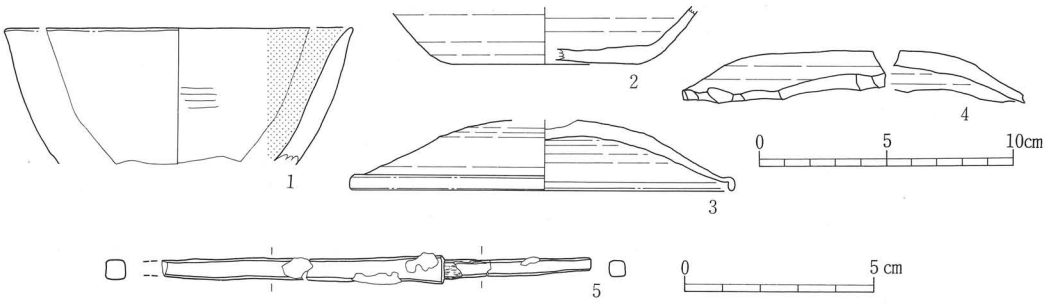
［堆積土］19層認められる。１～12・14・15層は自然流入土であり、２層には灰白色火山灰のブロックが含まれている。また、13層は新しいカマド、16～18層は古いカマドの煙道底面上に堆積し、いずれも焼土と炭化物を多量に含むことから、それぞれ新旧のカマド機能時に堆積したものとみられる。19層は直下に位置するＰ２を覆うかたちで、床面直上に認められる白色粘土の塊である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい北東隅で床面から39cmである。

［床］掘り方埋め土を床としている。ほぼ平坦で、新旧のカマド付近と南西隅を除く部分が硬化している。

［周溝］壁の直下を全周する。上幅14～26cm、深さ10cm前後で、断面は逆台形状を呈する。この溝は埋め戻されている。また、住居西半の周溝内には壁側に沿って、壁材の痕跡と思われる幅４cm前後、深さ約10cmの暗褐色の堆積土が認められる。

［カマド］東辺中央やや南寄りと北辺中央で新旧２つのカマドが検出された。東辺のものが新しく、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は粘土質の土を用いて構築されている。燃焼部底面はほぼ平らで、若干奥壁側へ傾斜しており、焼けて赤変している。底面と煙道の間には25cmの段がつく。煙道はほぼ水平で、長さ1.4mの煙道の先端は50cm×35cmの隅丸長方形を呈するピット状である。また、北辺の古いカマドでは燃焼部側壁が取り払われ、燃



No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	土師器坏	床面	外：ヘラケズリの痕跡　内：ヘラミガキ＋黒色処理　全面摩滅が著しい	(13.8)	－	－	1／5	BⅢ	12－1
2	須恵器坏	堆積土中	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	＼－	(7.6)	－	1／4		
3	須恵器蓋	床面	外：ロクロナデ→（天井部に回転ヘラケズリ→ナデ）　内：ロクロナデ　つまみ欠損	15.3	－	－	8／9		12－2
4	須恵器蓋	堆積土中	外：ロクロナデ→（天井部に回転ヘラケズリ→ナデ）　内：ロクロナデ　周縁部が割り取られている	－	－	－	1／5		12－3
No.	器種	層位	備考						図版番号
5	鉄鏃	床面	鏃身先端部を欠損しており、刃部形態不明　ふくれ錆あり　残存長：11.3cm						17－11

第６図　第２号住居跡出土遺物

焼部底面と煙道が残る。焼け面は直径50cmの不整な円形を呈し、この上面から焚き口部にかけて薄い炭化物層が認められる。底面と煙道の間には15cmの段がつき、煙道はほぼ水平に延びる。長さ1.5mの煙道の先端は直径40cmの不整な円形を呈するピット状で、確認面からの深さは38cmある。

［貯蔵穴状ピット］床面で2個（Ｐ２・３）検出された。Ｐ２は75cm×70cmの不整形を呈し、深さは12cmである。堆積土は人為堆積と考えられ、このピットの直上には白色粘土の塊が認められる。Ｐ３は75cm×70cmの隅丸正方形を呈し、深さは15cmである。堆積土は１層で、自然流入土である。

［その他のピット］床面で１個（Ｐ１）検出された。平面形は45cm×30cmの隅丸長方形を呈し、深さ14cmである。このピットは周溝と重複しており、これよりも新しい。

［出土遺物］床面から土師器坏（第６図１）、須恵器蓋（第６図３）、鉄鏃（第６図５）が出土している。また、周溝埋め土中から非ロクロ調整の土師器甕の底部、新しいカマドの燃焼部内から体部外面に平行タタキの施されている須恵器甕の破片が出土している。その他にも堆積土中から須恵器坏（第６図２）・蓋（第６図４）などが出土している。

【第４号住居跡】（第７図）

［位置・確認面］Ｉ区やや西寄りの緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第３号溝跡、第５号土壙と重複しており、いずれの遺構よりも古い。

［平面形・規模］調査区内にかかるのは住居の北辺のみで、東西3.2m以上×南北0.9m以上の方形を基調とする。

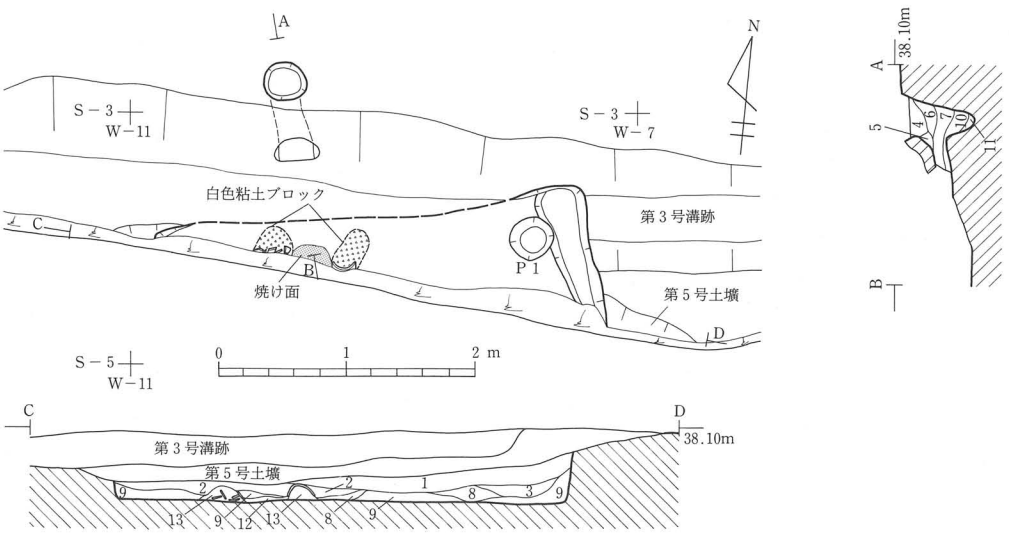
［堆積土］12層認められる。１～４・６・７層は自然流入土であり、５層は煙道上部の崩落土である。８・９層は焼土ブロック・炭化材・地山ブロックを多量に含み、床面直上に堆積している。10～12層はカマドの燃焼部・煙道に堆積している焼土もしくは炭化物層で、カマド機能時に堆積したと考えられる。なお、８・９層の状況からこの住居は焼失住居と考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい東側で床面から40cmである。

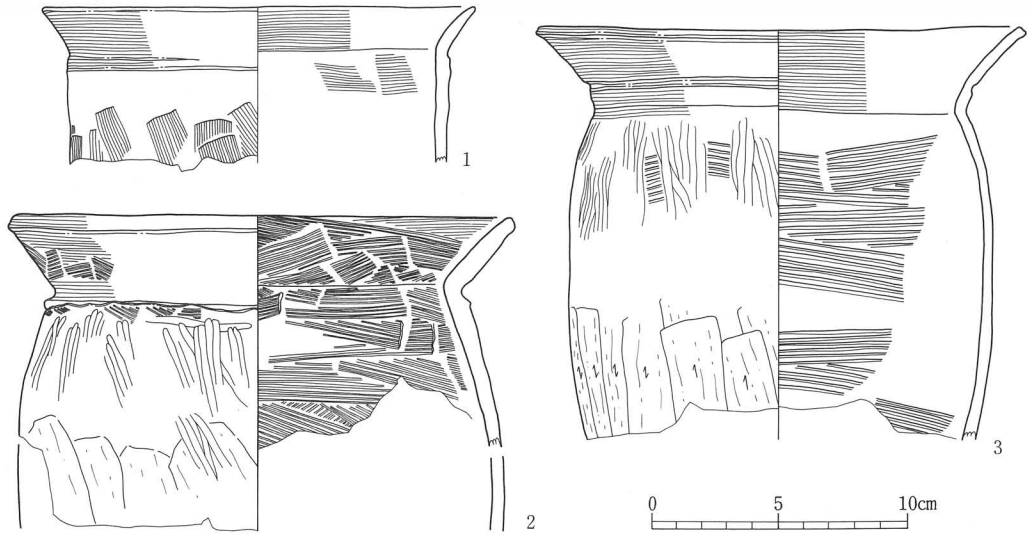
［床］残存する部分では地山を床としており、ほぼ平坦である。

［周溝］東壁の直下で検出された。上幅20～35cm、深さ10cm前後で、断面は「Ｕ」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。

［カマド］燃焼部底面と煙道の一部が残る。燃焼部側壁を構築していたと考えられる白色粘土の大ブロックと土師器甕（第７図１～３）が焼け面の両脇に認められる（13層）。煙道



No.	土　色	土 性	混 入 物 等	備　考	No.	土　色	土 性	混 入 物 等	備　考
1	褐　色(7.5YR4/3)	シルト	焼土・炭化物少量	自然流入土	8	暗赤褐色（5YR3/4）	シルト	焼土ブロック多量、地山ブロック	床面直上に堆積（人為堆積か？）
2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物・地山ブロック	自然流入土	9	黒褐色　（10YR2/2）	シルト	炭化材・地山ブロック多量	床面直上に堆積（人為堆積か？）
3	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山ブロック	自然流入土	10				炭化物層（細分可）、カマド機能時堆積
4	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト		煙道内堆積土（自然流入土）	11	暗赤褐色（5YR3/6）	シルト	焼土・炭化物多量	煙出しピット内堆積土、カマド機能時堆積
5	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山大ブロック	煙道上部崩落土	12				焼土層、カマド機能時堆積
6	黒褐色（10YR3/2）	シルト		煙道内堆積土（自然流入土）	13	灰黄褐色(10YR4/2)	粘　土	白色粘土大ブロック・土器片	カマド燃焼部側壁か？
7	暗褐色（10YR3/3）	シルト		煙道内堆積土（自然流入土）	14	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘　土	地山ブロック	周溝埋め土



No.	器　種	層　位	調　整	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	図版番号
1	土師器甕	カマド燃焼部右側壁中	外：[口]ヨコナデ、頸部に段　[体]ヘラナデ　内：[口]ヨコナデ　[体]ヘラナデ	(17.1)	－	－	1／10	AIb	12－4
2	土師器甕	カマド燃焼部右側壁中	外：[口]ヨコナデ→部分的なハケメ→頸部にヨコナデ、頸部に段　[体]ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：[口]ヨコナデ→ハケメ　[体]ハケメ	20.1	－	－	1／3	AIa	12－5
3	土師器甕	カマド燃焼部右側壁中	外：[口]ヨコナデ、頸部に沈線　[体上半]ハケメ→ヘラミガキ　[体下半]ヘラケズリ　内：[口]ヨコナデ　[体]ハケメ	(19.3)	－	－	1／4	AIa	12－6

第７図　第４号住居跡および出土遺物

は先端に向かって上向きにトンネル状に掘り抜かれている。長さ1.3m の煙道の先端では直径35cmの円形を呈するピット状の煙出しが開口しており、確認面からの深さは60cmある。

［その他のピット］１個（Ｐ１）検出された。直径35cmの円形を呈し、深さ13cmである。住居に伴うかどうかは不明である。

［出土遺物］カマドの燃焼部右側壁部分に据えられていたとみられる土師器甕（第７図１～３）が出土している。また、カマド燃焼部の左側壁部分に据えられていたとみられる土師器甕も出土しているが、破片のため図示できなかった。この甕は胴部にやや張りをもつ長胴形を呈し、器面調整は外面がハケメの後粗いミガキ、内面がハケメである。その他にも床面から須恵器甕の口縁部の破片などが出土している。

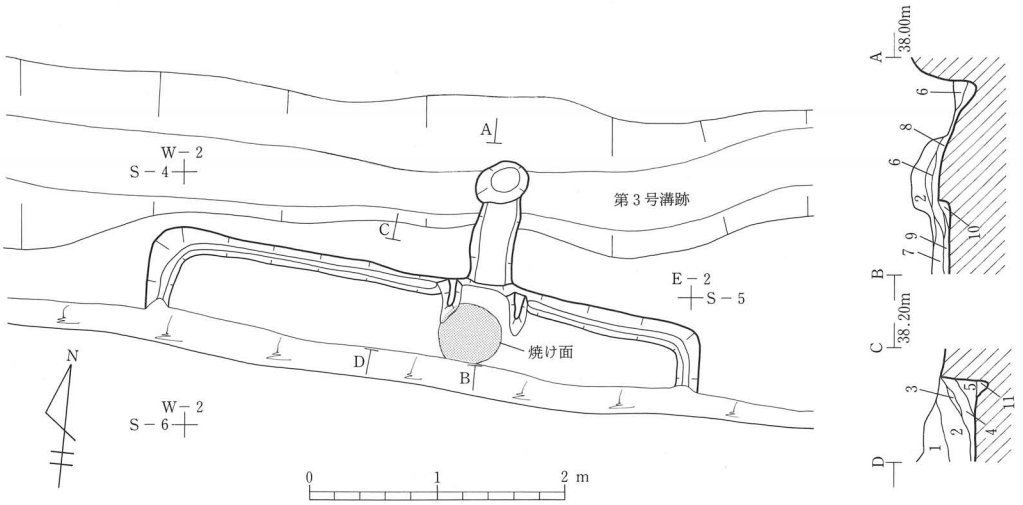
【第16号住居跡】（第８図）

［位置・確認面］Ｉ区ほぼ中央の緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第３号溝跡と重複しており、これよりも古い。

［平面形・規模］調査区内にかかるのは住居の北辺のみで、東西4.2m×南北0.6m 以上の方形を基調とする。

［堆積土］10層認められる。１～５層はいずれも自然流入土で、３層には灰白色火山灰のブロックが含まれている。６層は煙道上部の崩落土であり、７層は白色粘土のブロックを多量に含むことからカマドの崩壊土と考えられる。８～10層はカマドの燃焼部底面から煙道にかけて堆積しており、焼土と炭化物を多量に含むことからカマド機能時の堆積とみられる。



No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト		自然流入土
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山小ブロック	自然流入土
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	灰白色火山灰小ブロック	自然流入土
4	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	焼土粒・炭化物・地山小ﾌﾞﾛｯｸ	自然流入土
5	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物	自然流入土
6	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土ﾌﾞﾛｯｸ・炭化物・地山小ﾌﾞﾛｯｸ	煙道上部崩落土
7	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土質ｼﾙﾄ	白色粘土ブロック多量	カマド崩壊土
8	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	焼土・炭化物多量	カマド・煙道内堆積土、カマド機能時堆積
9	極暗赤褐色(5YR2/3)	シルト	焼土・炭化物多量	カマド内堆積土、カマド機能時堆積
10				焼土層、カマド機能時堆積
11	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物	周溝堆積土（自然流入土）

第８図　第16号住居跡

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい西壁で床面から40cmである。

［床］地山を床としており、ほぼ平坦である。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、カマド部分で途切れる。上幅10～20cm、深さ約５cmで、断面は住居中央側へ開く変形「Ｖ」字状を呈する。堆積土は締まりのない暗褐色土で、自然流入土とみられる。

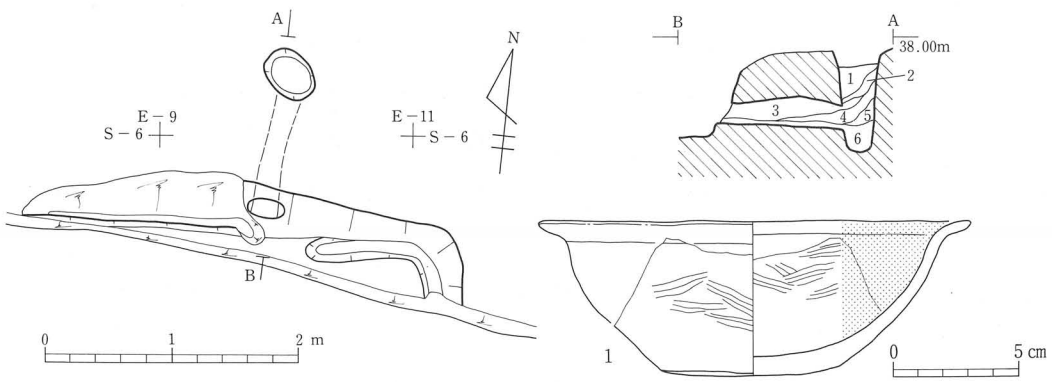
［カマド］北辺中央やや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は白色粘土主体の土を用いて構築されている。燃焼部底面はほぼ平らで、焼けて赤変しており、煙道との間には８cmの段がつく。煙道は先端に向かって下向きに傾斜している。長さ1.0m の煙道の先端は40cm×30cmの不整な楕円形を呈するピット状で、確認面からの深さは38cmある。

［出土遺物］カマドの燃焼部底面や堆積土中から土師器の小破片が出土している。

【第17号住居跡】（第９図）

［位置・確認面］Ｉ区やや東寄りの緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

［平面形・規模］調査区内にかかるのは住居の北辺のみで、東西2.6m 以上×南北0.4m 以上の方形を基調とする。



No.	土色	土性	混入物等	備考	No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物・地山ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）	4	黒褐色（10YR3/2）	シルト	焼土・炭化物・地山ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）
2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物・地山ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）	5	褐色（7.5YR4/4）	シルト		煙道内堆積土（自然流入土）
3	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	焼土・炭化物・地山ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）	6				焼土と炭化物の互層、カマド機能時堆積

No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	土師器鉢	周溝堆積土中	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ＋黒色処理　底：摩滅により不明	(17.1)	6.9	6.1	1／2		12－7

第９図　第17号住居跡および出土遺物

［堆積土］基本的に自然流入土であるが、6層は煙道底面上に堆積する焼土と炭化物の互層で、カマド機能時に堆積したと考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面から住居の外側へ開き気味に立ち上がる。壁高は残りのよい北東隅で床面から60cmである。

［床］地山を床としている。ほぼ平坦であるが、東側へやや傾斜している。

［周溝］北東隅の壁の直下で検出された。上幅15～20cm、深さ15cm前後で、断面は「U」字状を呈する。

［カマド］北辺中央で、ほぼ水平にトンネル状に掘り抜かれた煙道が検出された。長さ1.3mの煙道の先端では45cm×30cmの隅丸長方形を呈するピット状の煙出しが開口しており、確認面からの深さは60cmある。

［出土遺物］周溝堆積土中から土師器鉢（第9図1）が出土している。その他にも堆積土中から土師器甕や底部の切り離しがヘラ切りで、その後ナデ調整されている須恵器坏、体部外面に平行タタキが施されている須恵器甕などの破片が出土している。

【第20号住居跡】（第10～12図）

［位置・確認面］II区やや東寄りの緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第21号住居跡、第54号土壙と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。

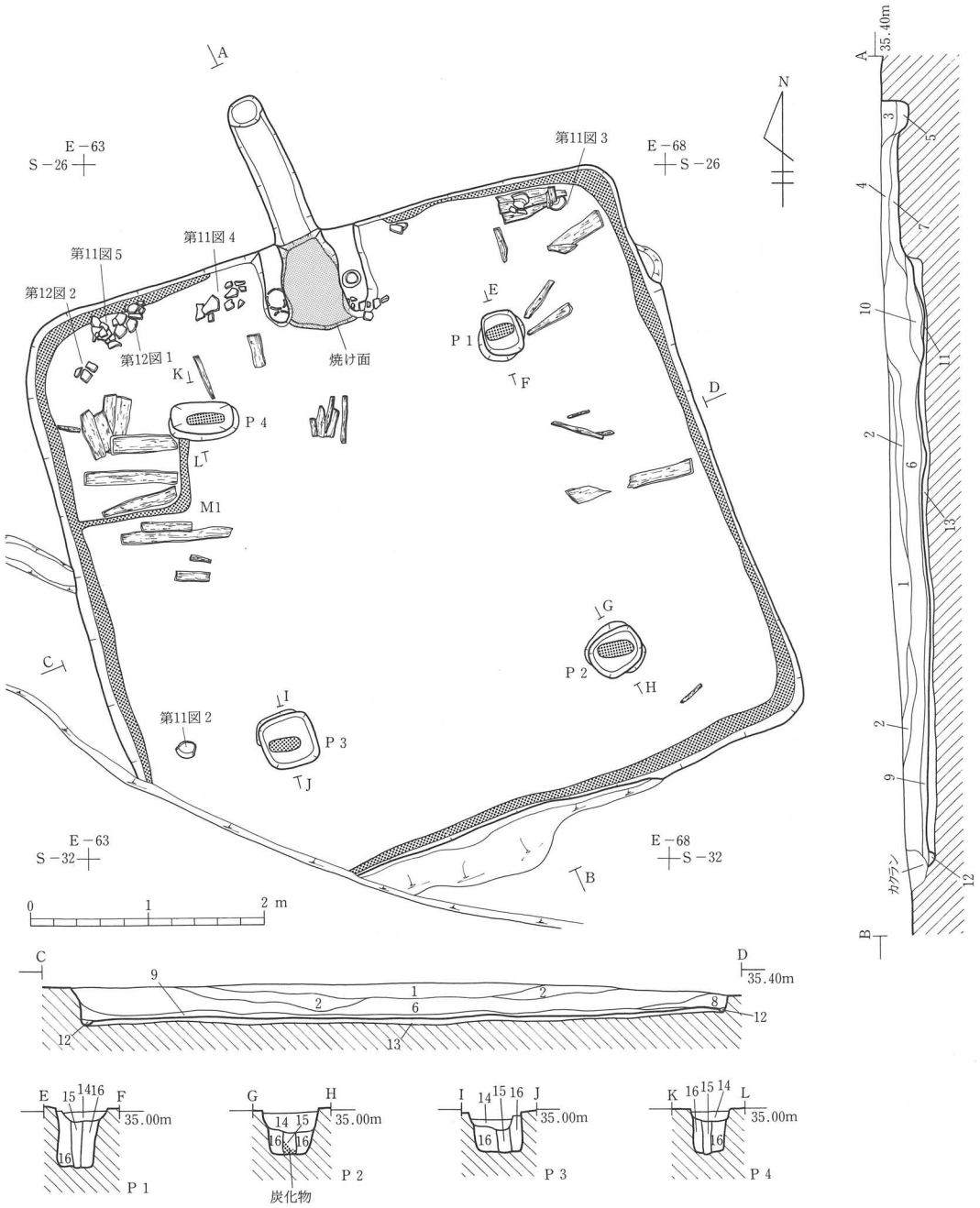
［平面形・規模］東西5.4m×南北5.3mの正方形を呈する。

［堆積土］11層認められる。1～7層は自然流入土であり、2～4層には灰白色火山灰のブロックもしくは粒子が含まれている。8層は住居の壁の崩落土とみられる。9層は床面直上を覆うように堆積しており、炭化材と地山ブロックを多量に含む。また、10層はカマドの崩壊土、11層はカマド機能時に堆積したと考えられる焼土層である。なお、9層の状況からこの住居は焼失住居と考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい北西隅で床面から30cmである。

［床］掘り方埋め土を床としており、やや凹凸が認められる。

［柱穴］床面で4個（P1～4）検出された。P1～4は住居平面形の対角線上に位置し、いずれにも柱抜き取り痕が認められる。掘り方の平面形は隅丸長方形を呈し、深さ40cm前後である。また、柱穴の下部では約30cm×約10cmの隅丸長方形の柱痕跡が検出されており、柱痕跡中には炭化物の塊が含まれる。このP1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

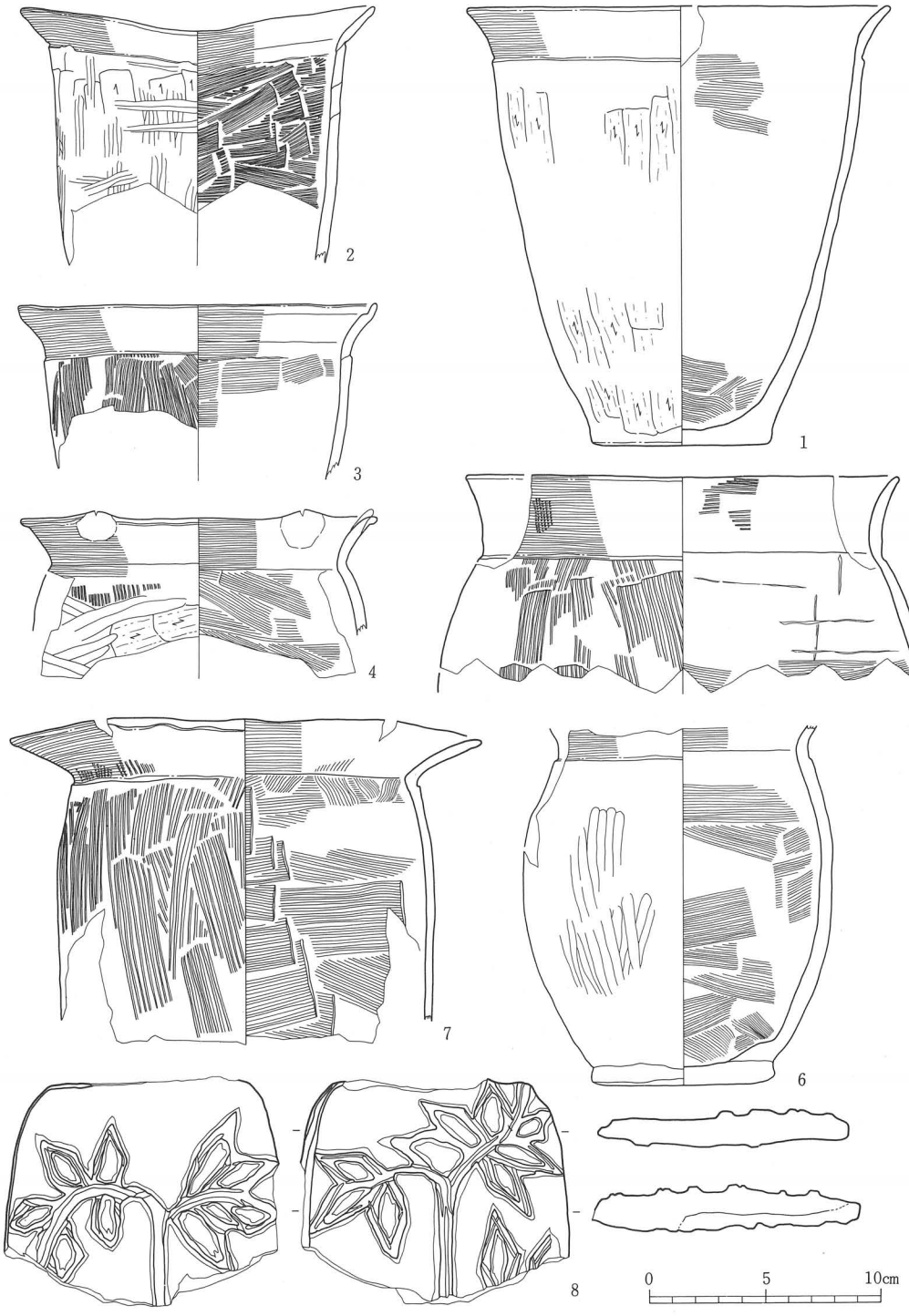


No.	土　色	土 性	混 入 物 等	備　考	No.	土　色	土 性	混 入 物 等	備　考
1	黒褐色（10YR2/3）	シ ル ト	炭化物	自然流入土	9	暗褐色（10YR3/3）	シ ル ト	炭化材・地山ブロック多量	床面直上に堆積（人為堆積か？）
2	暗褐色（10YR3/3）	シ ル ト	炭化物・灰白色火山灰大ﾌﾞﾛｯｸ	自然流入土	10	暗褐色（10YR3/4）	シ ル ト	焼土・炭化物・白色粘土ﾌﾞﾛｯｸ・土器片	カマド崩壊土
3	暗褐色（7.5YR3/4）	シ ル ト	炭化物・灰白色火山灰大ﾌﾞﾛｯｸ	煙道内堆積土（自然流入土）	11				焼土層、カマド機能時堆積
4	暗褐色（10YR3/4）	シ ル ト	炭化物・灰白色火山灰粒	煙道内堆積土（自然流入土）	12	黒褐色（10YR3/2）	シ ル ト	炭化物多量	壁材の痕跡
5	黒褐色（10YR2/3）	シ ル ト	炭化物	煙出しﾋﾟｯﾄ内堆積土(自然流入土)	13	褐　色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	炭化物若干、地山ブロック多く	住居掘り方埋め土
6	黒褐色（10YR3/2）	シ ル ト	炭化物	自然流入土	14	暗褐色（10YR3/4）	シ ル ト	炭化物・地山小ブロック	P 1～4 柱抜き取り痕
7	褐　色（7.5YR4/4）	シ ル ト	焼土ﾌﾞﾛｯｸ・炭化物・地山ﾌﾞﾛｯｸ	煙道内堆積土（自然流入土）	15	黒褐色（10YR2/2）	シ ル ト	焼土粒、炭化物多量	P 1～4 柱痕跡
8	褐　色（7.5YR4/3）	粘土質ｼﾙﾄ	地山大ブロック	壁崩落土	16	褐　色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多量	P 1～4 掘り方埋め土

第10図　第20号住居跡

No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	土師器坏	カマド燃焼部底面	外：ヘラミガキ、沈線２条　内：ヘラミガキ（＋黒色処理）　平底風丸底　火ハネ	13.9	－	3.5	3／4	AⅡ	13－1
2	土師器坏	床　面	外：段、[段より上部]ヨコナデ　[段より下部]ヘラケズリ　内:ヘラミガキ＋黒色処理、軽い段　底:ヘラケズリ	14.8	(9.2)	3.4	2／3	BⅠ	13－2
3	須恵器坏	床　面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	14.2	9.2	5.4	3／4	BⅠc	13－3
4	土師器甕	床　面	外：[口]ハケメ→ヨコナデ、頸部に軽い段　[体]ハケメ→部分的なヘラミガキ　内:[口]ヨコナデ　[体]ヘラナデ	23.4	－	－	1／3	B	13－4
5	土師器甕	床　面	外：[口]ハケメ→ヨコナデ　[体]ハケメ→ヘラミガキ　内:[口]ヨコナデ　[体上半]ヘラナデ　[体下半]ハケメ　底:木葉痕	20.9	9.8	31.1	2／3	B	13－6

第11図　第20号住居跡出土遺物（1）



No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	土師器甕	床面	外:[口]ヨコナデ、頸部に段 [体]ヘラケズリ 内:[体]ナデ 底:木葉痕→ナデ 全面剥落が著しい	(18.3)	7.8	19.2	1／3	Ca	13－5
2	土師器甕	床面	外:[口]ヨコナデ、頸部に段 [体]ヘラケズリ→ヘラミガキ 内:[口]ヨコナデ [体]ハケメ	(15.4)	－	－	1／5	AIb	14－1
3	土師器甕	カマド燃焼部底面	外:[口]ヨコナデ、頸部に段 [体]ハケメ 内:[口]ヨコナデ、端部内面に段 [体]ヘラナデ	(15.6)	－	－	1／10	Ca	14－4
4	土師器甕	カマド燃焼部底面	外:[口]ヨコナデ [体]ハケメ・ヘラケズリ→ヘラミガキ 内:[口]ヨコナデ [体]ヘラナデ 口縁部内外面に意図的なオサエか？	(15.5)	－	－	1／10	AIIb	14－6
5	土師器甕	カマド燃焼部左側壁中(奥)	外:[口]ハケメ→ヨコナデ、頸部に段 [体]ハケメ 内:[口]ハケメの痕跡 [体]ヘラナデ 内外面ともに剥離が著しい	(18.9)	－	－	1／5	AIIa	14－2
6	土師器甕	カマド燃焼部右側壁中(奥)	外:[口]ヨコナデ、頸部に段 [体]ヘラミガキ、体部下半の剥落が著しい 内:[口]ヨコナデ [体]ヘラナデ [体下端]ナデ 底:木葉痕	－	7.9	－	2／3	AIIb	14－5
7	土師器甕	カマド燃焼部右側壁中(手前)	外:[口]ハケメ→ヨコナデ、頸部に段 [体]ハケメ 内:[口]ヨコナデ [体]ヘラナデ 口縁部の歪みが著しい	(20.5)	－	－	1／6	AIa	14－3
No.	器種	層位	備考						図版番号
8	不明土製品	床面直上	両面に植物をモチーフにした模様が浮き彫り 削り取られた部分にヘラミガキ 残存長：10.0cm 最大幅：11.9cm 最大厚：2.3cm						17－15

第12図　第20号住居跡出土遺物 (2)

［溝］壁の直下をほぼ全周し、カマドの両脇で途切れる周溝と、西壁からＰ４まで「Ｌ」字状に延びる溝（Ｍ１）が検出された。周溝およびＭ１は上幅５～10cm、深さ５cm前後で、断面は「Ｕ」字状を呈する。堆積土はいずれも炭化物を多量に含む締まりのない黒褐色土である。これらの溝はその規模や堆積土の状況から、それぞれ壁材、材の痕跡と思われる。溝の重複は認められない。また、Ｍ１はＰ４と接していたと考えられるが、Ｐ４の柱抜き取り痕に壊されて、その前後関係は不明である。

［カマド］北辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁の焚き口部には土師器甕（第12図５～７）が２個ずつ口縁部を下にして据えられており、それに白色粘土主体の土を貼りつけて側壁を構築している。また、燃焼部底面は浅く窪んで皿状になっている。底面から奥壁にかけては緩やかに傾斜しており、焼けて赤変している。特に底面中央部が強く焼けている。煙道はほぼ水平に延び、長さ1.3m の煙道の先端は直径30cm の不整な円形を呈するピット状で、確認面からの深さは25cmある。

［出土遺物］床面やカマドの燃焼部底面・側壁部分から土師器坏（第11図１・２）・甕（第11図４・５、第12図１～７）、須恵器坏（第11図３）が出土している。その他にも床面からは非ロクロ調整の土師器坏・甕や須恵器坏・高台坏・甕などの破片が出土している。また、床面直上からは植物をモチーフにした模様が両面に浮き彫りされた板状の土製品（第12図８）が出土した。この土製品では下絵となる線を入れた後、これをもとにして模様部分が浮き出るように周縁を削り取っている。なお、仕上げの段階で削り取られた部分にはヘラミガキが施されている。

【第21号住居跡】（第13図）

［位置・確認面］Ⅱ区やや東寄りの緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

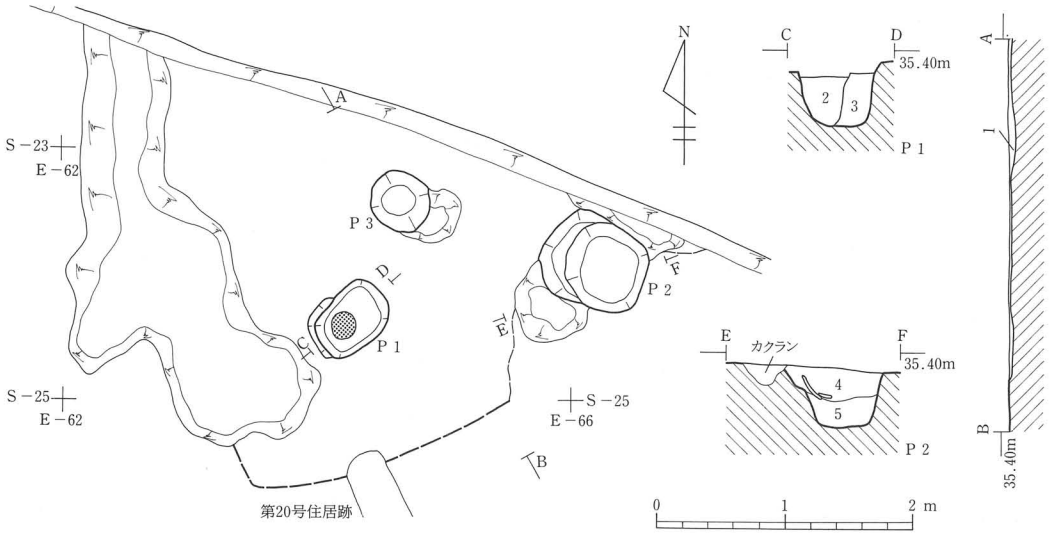
［重複］第20号住居跡、第55号土壙と重複しており、前者より古く、後者より新しい。

［平面形・規模］住居の北半以上が調査区外に及ぶことや削平により壁・堆積土が残存しないこと、西側が撹乱を受けていることから全体の規模は不明であるが、残存する掘り方埋め土の状況から東西4.0m 以上×南北3.6m 以上で方形を基調とする。

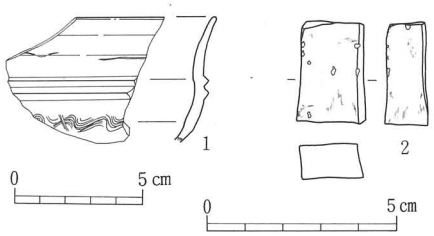
［床］掘り方埋め土を床としていると考えられるが、削平と撹乱のため詳細は不明である。

［柱穴］住居の南西隅から1.5m 程中央寄りの床面で１個（Ｐ１）検出されており、柱抜き取り痕が認められる。掘り方の平面形は60cm×45cmの隅丸長方形を呈し、深さ50cmで、底面には直径20cmの円形の柱押圧痕が残る。その位置から主柱穴の可能性がある。

［貯蔵穴状ピット］南辺寄りで検出された（Ｐ２）。平面形は85cm×70cmの隅丸長方形を呈する。深さは50cmあり、北西側に深さ20cmの段状に浅い部分が認められる。堆積土は２層



No.	土　色	土　性	混　入　物　等	備　考
1	褐　色（10YR4/4）	粘土質シルト	焼土・炭化物若干、地山ブロック多く	住居掘り方埋め土
2	暗褐色（7.5YR3/4）	シ　ル　ト	焼土・炭化物少量、地山ブロック	P１柱抜き取り痕
3	褐　色（7.5YR4/6）	粘土質シルト	小礫、地山ブロック多く	P１掘り方埋め土
4	黒褐色（10YR2/3）	シ　ル　ト	焼土・炭化物・土器片・地山ブロック	P２堆積土（人為堆積）
5	黒褐色（10YR3/2）	シ　ル　ト	焼土・炭化物・地山ブロック	P２堆積土（人為堆積）



No.	器　種	層　位	調　整	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	図版番号
1	須恵器高坏	P２堆積土中（５層）	外：ロクロナデ　[体]波状文　内：ロクロナデ	－	－	－	?		12－10
No.	器　種	層　位	備　考						図版番号
2	砥　石	P２堆積土中（５層）	４面使用　石材：凝灰岩　最大長：2.8cm　最大幅：1.6cm　最大厚：1.2cm						18－３

第13図　第21号住居跡および出土遺物

で、いずれも焼土・炭化物・土器片・地山ブロックを多量に含み、人為堆積と考えられる。

［その他のピット］１個（Ｐ３）検出された。平面形は直径50cmの不整な円形を呈し、深さは30cmである。堆積土は締まりのない暗褐色土で、住居に伴うかどうかは不明である。

［出土遺物］Ｐ２の堆積土中から須恵器高坏（第13図１）、砥石（第13図２）が出土している。また、その他にもＰ２の堆積土中からは非ロクロ調整の土師器坏・甕・甑などが出土している。坏は半球状の胴部に短く外反する口縁部を持つものと、器高が低く口縁部が直立するものの２点がある。甑は無底で、長胴形を呈するものとみられる。

【第23号住居跡】（第14図）

［位置・確認面］Ⅱ区やや東寄りの緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第34・52・53号土壙と重複しており、いずれよりも新しい。

［平面形・規模］住居の北半以上が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、現状から東西4.0m以上×南北4.3m以上で方形を基調とする。

［堆積土］３層認められる。１・２層は自然流入土、３層は西辺中央付近の床面直上に堆

積した炭化物層である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい西壁で床面から15cmである。

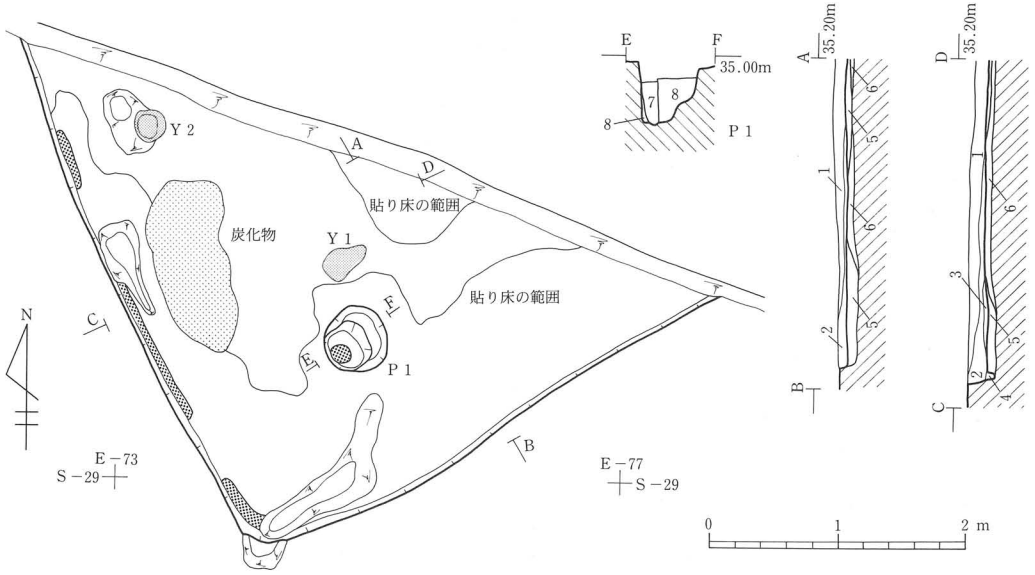
［床］掘り方埋め土を床としている。概ね平坦であるが、南側へ若干傾斜している。また、中央部と縁辺に近い部分は貼り床されて硬化している。

［柱穴］住居の南西隅から1.6m程中央寄りの床面で１個（Ｐ１）検出されており、柱痕跡が確認された。掘り方の平面形は直径50cmの不整な円形を呈する。深さは50cmあり、東側に深さ20cmの段状に浅い部分が認められる。柱痕跡は直径12cmの円形を呈する。その位置から主柱穴の可能性がある。

［周溝］西壁の直下で断続的に検出された。上幅10cm前後、深さ約５cmで、断面は「Ｕ」字状を呈する。堆積土は締まりのない黒褐色土である。その規模や堆積土の状況から壁材の痕跡の可能性がある。

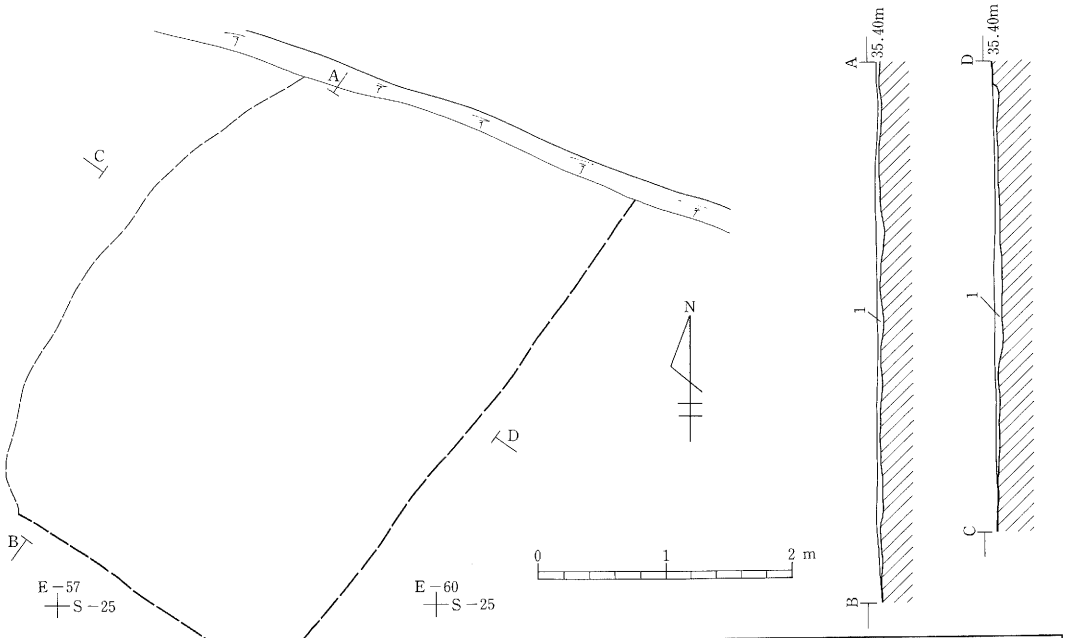
［焼け面］住居の中央付近と西壁寄りの２箇所で、床面が焼けて赤変している部分（Ｙ１・２）が検出された。Ｙ１は35cm×20cmの不整形を呈する。Ｙ２は直径20cmの不整な円形を呈し、やや窪んでいる。

［出土遺物］床面から土師器甕の体部や底部の破片が少量出土している。



No.	土色	土性	混入物等	備考	No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	焼土・炭化物・地山粒	自然流入土	5	褐色(7.5YR4/4)	粘土質シルト	褐色粘土ブロック多量	住居貼り床
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土・炭化物・地山ブロック	自然流入土	6	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロック多く	住居掘り方埋め土
3				炭化物層（床面直上に堆積）	7	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物・地山粒	Ｐ１柱痕跡
4	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物・地山粒	壁材の痕跡	8	褐色(7.5YR4/3)	粘土質シルト	地山ブロック多く	Ｐ１掘り方埋め土

第14図　第23号住居跡



No.	土色	土性	混入物等	備考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物、地山ブロック多く	住居掘り方埋め土

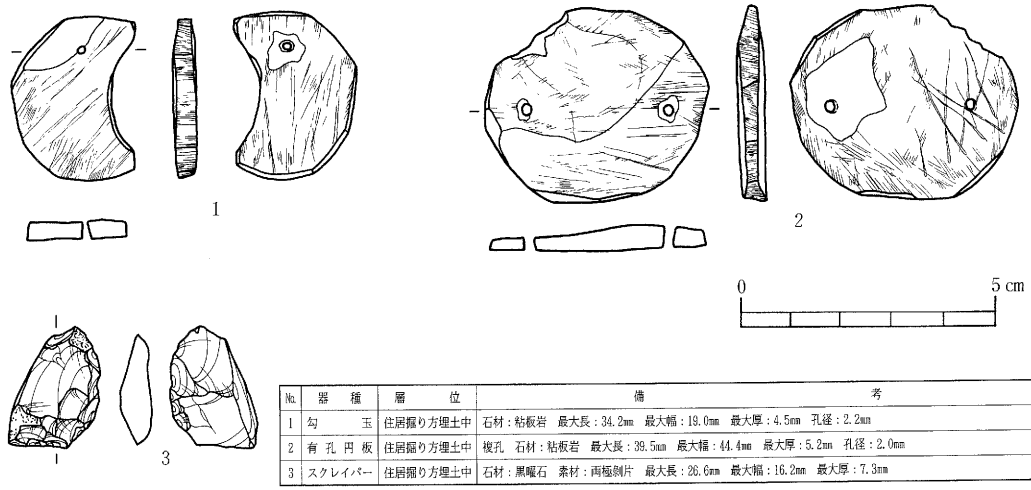
第15図　第24号住居跡

【第24号住居跡】（第15・16図）

［位置・確認面］II区やや東寄りの緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

［平面形・規模］住居の北側が調査区外に及ぶことや削平により壁・堆積土が残存しないことから全体の規模は不明であるが、残存する掘り方埋め土の状況から東西3.1m以上×南北4.7m以上で方形を基調とする。

［床］掘り方埋め土を床としていると考えられるが、削平のため詳細は不明である。



No.	器種	層位	備考	図版番号
1	勾玉	住居掘り方埋土中	石材：粘板岩　最大長：34.2mm　最大幅：19.0mm　最大厚：4.5mm　孔径：2.2mm	18－4
2	有孔円板	住居掘り方埋土中	穿孔　石材：粘板岩　最大長：39.5mm　最大幅：44.4mm　最大厚：5.2mm　孔径：2.0mm	18－5
3	スクレイパー	住居掘り方埋土中	石材：黒曜石　素材：両極剥片　最大長：26.6mm　最大幅：16.2mm　最大厚：7.3mm	18－7

第16図　第24号住居跡出土遺物

［出土遺物］住居掘り方埋め土中から勾玉（第16図１）と有孔円板（第16図２）、黒曜石製のスクレイパー（第16図３）が出土している。その他にも住居掘り方埋め土中からは土師器の小破片が出土している。

【第25号住居跡】（第17図）

［位置・確認面］II区やや東寄りの緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第19号溝跡、第42号土壙と重複しており、前者より古く、後者より新しい。

［平面形・規模］住居の南西隅が調査区外に及んでおり、この部分は第19号溝跡によって壊されているとみられるが、現状から東西3.9m×南北3.8m の正方形を呈する。

［堆積土］11層認められる。１～６層は自然流入土であり、１層には灰白色火山灰のブロックが含まれている。７層は煙道上部の崩落土、８層はカマドの崩壊土とみられる。９～11層はカマドの燃焼部底面から煙道にかけて堆積しており、焼土と炭化物を多量に含むことからカマド機能時に堆積したものと考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい北西隅で床面から30cmである。

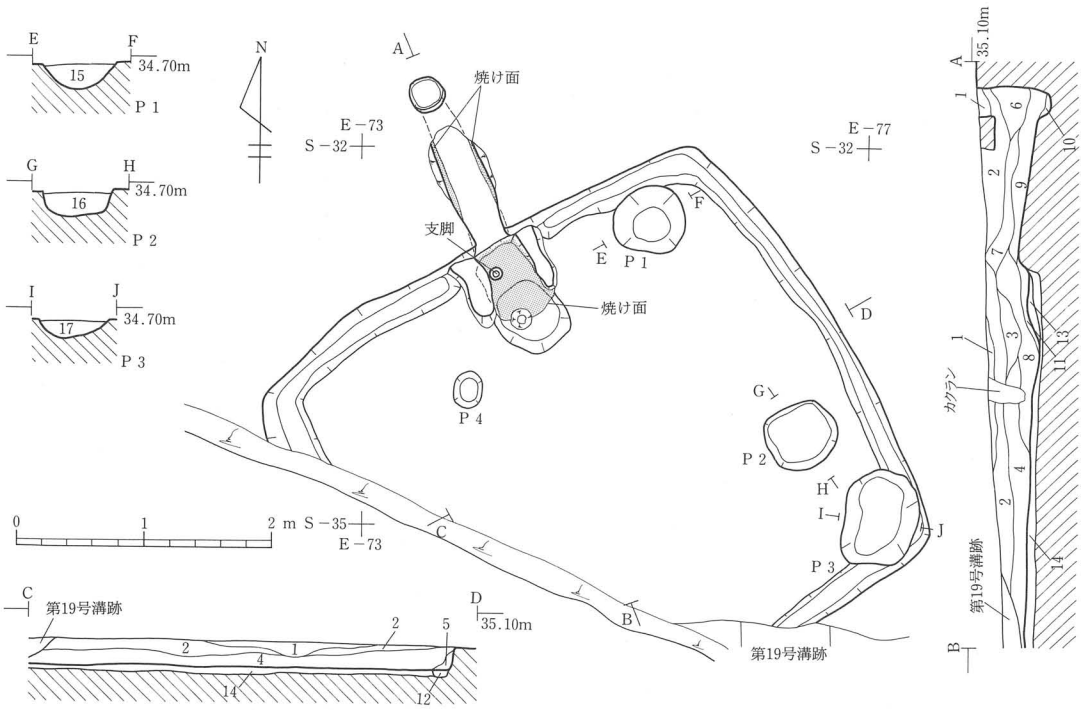
［床］掘り方埋め土を床としており、ほぼ平坦である。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡っており、カマド部分で途切れる。上幅12～24cm、深さ５cm前後で、断面は「U」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。

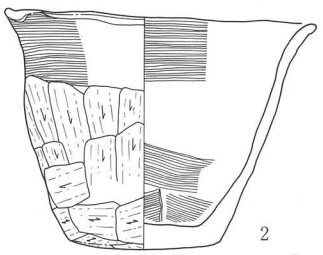
［カマド］北辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は白色粘土主体の土を用いて構築されている。また、住居の掘り方埋め土の上面に側壁と同様の白色粘土を貼って燃焼部底面としている。底面中央左側壁寄りでは、支脚として利用されたと考えられる土師器甕（第17図２）が底部を伏せた状態で検出された。この甕が左側壁寄りに認められることから、カマド機能時には右側壁寄りにも支脚として甕が置かれていた可能性がある。燃焼部底面から奥壁にかけては緩やかに傾斜しており、焼けて赤変している。特に底面中央部が強く焼けている。煙道は先端に向かって下向きにトンネル状に掘り抜かれている。長さ1.4m の煙道の先端では直径20cmの不整な円形を呈するピット状の煙り出しが開口しており、確認面からの深さは55cmある。

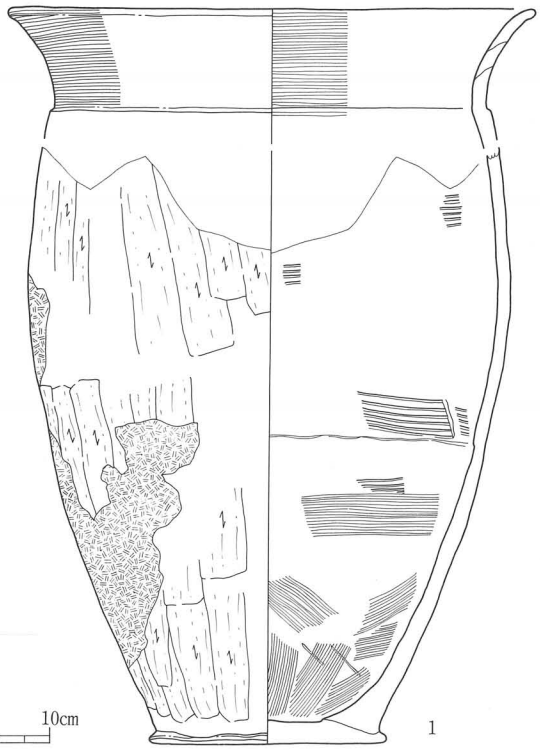
［貯蔵穴状ピット］床面で３個（Ｐ１～３）検出された。いずれも不整形を呈し、深さは20cm前後である。この中で、Ｐ３は周溝と重複しており、これよりも新しく、人為堆積である。

［その他のピット］１個（Ｐ４）検出された。平面形は30cm×20cmの不整形を呈し、深さは16cmである。堆積土は締まりのない黒褐色土で、住居に伴うかどうかは不明である。



No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	灰白色火山灰ブロック	自然流入土
2	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	炭化物・地山粒	自然流入土
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物・地山粒	自然流入土
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土・炭化物・地山ブロック	自然流入土
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物	自然流入土
6	黒褐色 (2.5Y3/2)	シルト	炭化物・地山粒	煙道内堆積土（自然流入土）
7	暗赤褐色 (5YR3/2)	シルト	焼土大ブロック・炭化物・地山ブロック	煙道上部崩落土
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物・白色粘土大ブロック	カマド崩壊土
9	極暗赤褐色 (5YR2/3)	シルト	焼土ブロック・炭化物多量	煙道内堆積土、カマド機能時堆積
10				炭化物層、カマド機能時堆積
11	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	焼土・炭化物多量	カマド内堆積土、カマド機能時堆積
12	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、地山ブロック多量	周溝埋め土
13	赤灰色 (2.5YR5/1)	粘土質シルト	白色粘土主体	上面が強く焼けている
14	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロック多く	住居掘り方埋め土
15	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	炭化物・地山粒	P 1 堆積土（自然流入土）
16	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	炭化物・地山小ブロック	P 2 堆積土（自然流入土）
17	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・地山ブロック多量	P 3 堆積土（人為堆積）





0 5 10cm

No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	土師器甕	床面	外:[口]ヨコナデ、頸部に段 [体]ヘラケズリ 内:[口]ヨコナデ [体]ハケメ→ヘラナデ、摩滅 底:木葉痕 外面に二次的な粘土の貼りつけ	(20.8)	9.3	(29.3)	1／3	AIa	12－9
2	土師器甕	カマド支脚	外:[口]ヨコナデ [体]ヘラケズリ 内:[口]ヨコナデ [体]ヘラナデ、摩滅 底:ヘラケズリ 外面に火ハネ	12.2	5.9	9.6	4／5	Cb	12－8

第17図　第25号住居跡および出土遺物

［出土遺物］床面やカマドの燃焼部底面から土師器甕（第17図１・２）が出土している。その他にも床面や煙道内、堆積土中からは非ロクロ調整で内面が黒色処理されている土師器坏、非ロクロ調整で長胴形を呈する土師器甕、須恵器坏・甕の破片が出土している。

【第26号住居跡】（第18図）

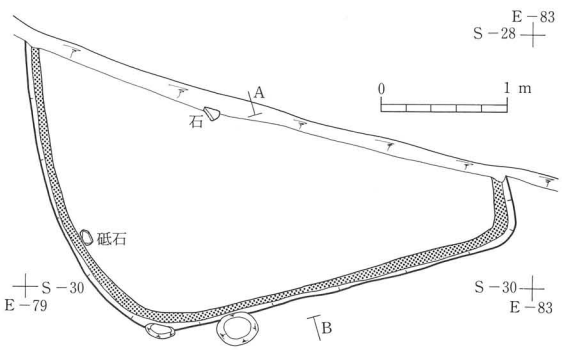
［位置・確認面］II区やや東寄りの緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

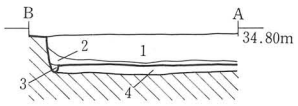
［重複］第50・51号土壙と重複しており、いずれよりも新しい。

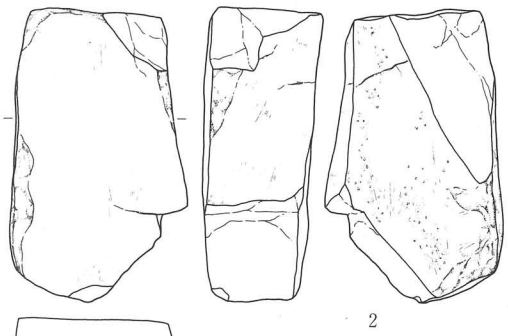
［平面形・規模］住居の北半以上が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、現状から東西3.3m×南北2.4m以上で方形を基調とする。なお、東辺がやや外側に膨らんでいる。

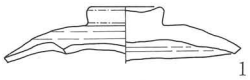
［堆積土］２層認められる。１層は地山ブロックを多量に含み、一度に堆積したとみられることから人為的に埋め戻されている可能性がある。また、２層は床面直上を覆うように堆積しており、焼土と炭化材を多量に含む。２層の状況から、この住居は焼失住居と考えられる。

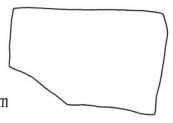
［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい南西隅で床面から30cmである。











No.	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物、地山ブロック多量	人為的な埋め土か？
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化材・炭化物多量	床面直上に堆積（人為堆積か？）
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物多量	壁材の痕跡
4	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロック多く	住居掘り方埋め土

No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	須恵器蓋	床面直上	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→（天井部に回転ﾍﾗｹｽﾘ→ﾅﾃﾞ） 内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 偏平宝珠状つまみ 赤褐色 周縁部が割り取られている	－	－	－	1／2		12－11

No.	器種	層位	備考	図版番号
2	砥石	床面	4面使用 石材：砂岩 最大長：11.7cm 最大幅：6.9cm 最大厚：4.3cm	18－1

第18図　第26号住居跡および出土遺物

［床］掘り方埋め土を床としており、概ね平坦である。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡る。上幅５～10cm、深さ５cm前後で、断面は「U」字状を呈する。堆積土は炭化物を多量に含む締まりのない黒褐色土である。その規模や堆積土の状況から壁材の痕跡の可能性がある。

［出土遺物］床面や床面直上から須恵器蓋（第18図１）、砥石（第18図２）が出土している。その他にも床面からは土師器の破片が少量出土している。

【第27号住居跡】（第19図）

［位置・確認面］II区やや東寄りの緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第19号溝跡、第48号土壙と重複しており、前者より古く、後者より新しい。

［平面形・規模］東西3.4m×南北3.4mの正方形を呈する。

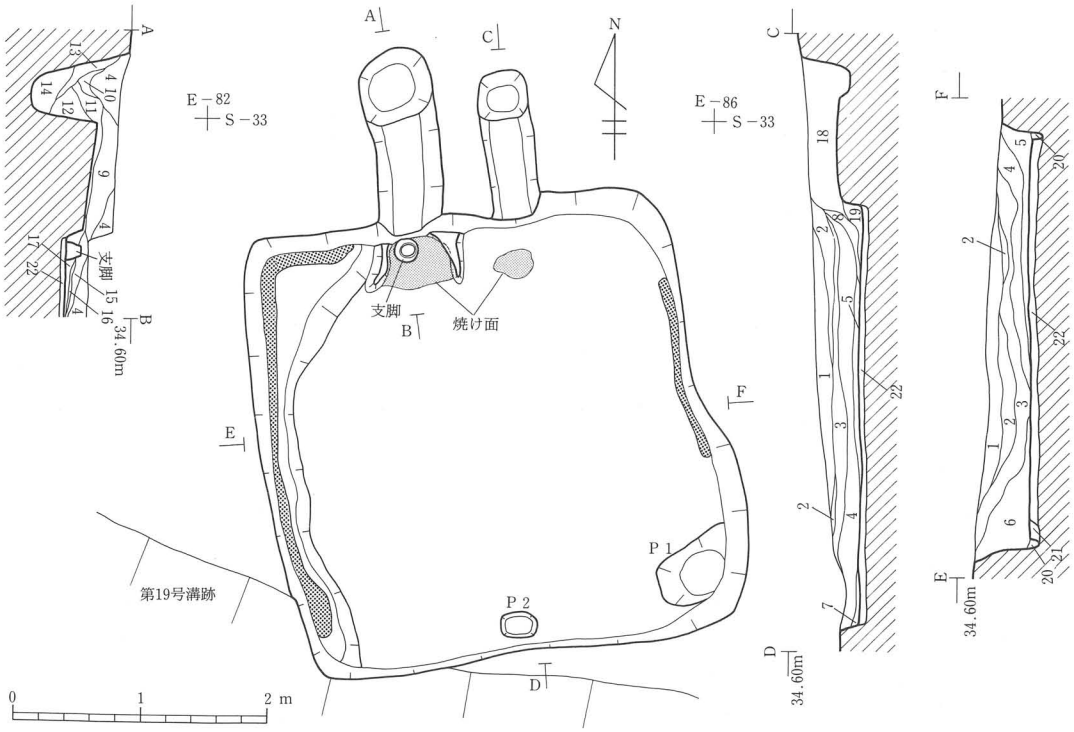
［堆積土］17層認められる。１～６・８～12・14層は自然流入土であり、２・３層には灰白色火山灰のブロックもしくは粒子が含まれている。また、堆積土の状況から７層は住居の壁の崩落土、13層は煙道上部の崩落土とみられる。15層は白色粘土のブロックを多量に含む新しいカマドの崩壊土である。16・17層は焼土と炭化物を多量に含むことから新しいカマド機能時に堆積したとみられる。18・19層は古いカマドの燃焼部底面直上から煙道内全体に堆積しており、白色粘土と地山のブロックを多く含む。このカマドが使われなくなった段階で埋め戻された土の可能性がある。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい北西隅で床面から50cmである。

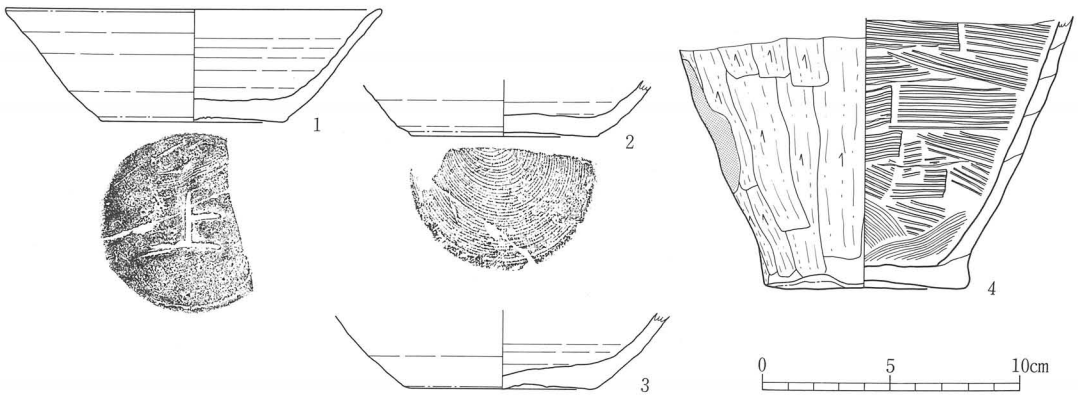
［床］掘り方埋め土を床としており、ほぼ平坦である。

［周溝］西辺の壁際から新しいカマドの左脇にかけて検出された。上幅20～30cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。しかし、住居の北西隅付近では上幅70cmと幅広になっており、内側の壁が緩やかに立ち上がる。この溝は埋め戻されている。また、周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～15cm、深さ約10cmの暗褐色の堆積土が認められる。この暗褐色土は東壁の直下でも検出された。

［カマド］北辺で新旧２つのカマドが検出された。中央やや西寄りのカマドが新しく、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は白色粘土主体の土を用いて構築されている。また、底面はほぼ平らで、焼けて赤変している。中央奥壁寄りには支脚として利用されたと考えられる土師器甕の下半（第19図４）が底部を伏せた状態で検出された。底面と煙道の間には12cmの段がつく。煙道は先端に向かってやや上向きに傾斜しており、長さ1.4mの煙道の先端は60cm×55cmの隅丸正方形を呈するピット状で、確認面からの深さは80cmある。中央や



No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒色（10YR2/1）	シルト		自然流入土（黒ボク土）
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物・灰白色火山灰粒	自然流入土
3	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	灰白色火山灰大ﾌﾞﾛｯｸ多く	自然流入土
4	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土・炭化物多く	自然流入土
5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	焼土・炭化物・地山粒	自然流入土
6	黒褐色（10YR3/2）	シルト	焼土・炭化物・地山粒	自然流入土
7	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック多く	壁崩落土
8	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物・地山ブロック	自然流入土
9	褐色（7.5YR4/3）	シルト	焼土・炭化物・地山ﾌﾞﾛｯｸ	煙道(新)内堆積土(自然流入土)
10	灰褐色（7.5YR4/2）	シルト	地山粒	煙道(新)内堆積土(自然流入土)
11	褐色（7.5YR4/6）	シルト	地山小ブロック	煙道(新)内堆積土(自然流入土)
12	褐色（7.5YR4/4）	シルト	地山粒	煙出しピット（新）内堆積土（自然流入土）
13	褐色（7.5YR4/3）	シルト	地山ブロック多量	煙出しピット（新）壁崩落土
14	灰褐色（7.5YR4/2）	シルト	炭化物・地山小ブロック	煙出しピット（新）内堆積土（自然流入土）
15	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土・炭化物・白色粘土大ブロック	カマド（新）崩壊土
16				炭化物層、カマド（新）機能時堆積
17	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	焼土・炭化物多量	カマド(新)内堆積土、カマド(新)機能時堆積
18	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	焼土・炭化物・白色粘土・地山ﾌﾞﾛｯｸ	煙道（旧）内堆積土（人為堆積か？）
19	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土質シルト	焼土・炭化物・白色粘土小ブロック	カマド部分（旧）内堆積土（人為堆積か？）
20	暗褐色（10YR3/4）	シルト		壁材の痕跡
21	暗褐色（7.5YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロック	周溝埋め土
22	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	炭化物若干、地山ブロック多く	住居掘り方埋め土



No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	須恵器坏	床面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ、ヘラ書き「上」　内外面に火ダスキ	(14.9)	7.2	4.6	1／3	Dｃ	14－7
2	須恵器坏	床面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：回転糸切り　内外面に火ダスキ　灰白色	－	7.3	－	1／4		
3	須恵器坏	堆積土中	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→周縁部にナデ	－	7.2	－	1／4		
4	土師器甕	カマド（新）支脚	外：[体]ヘラケズリ　内：[体]ハケメ→体部下端にナデ　底：木葉痕→ナデか？　外面に炭化物付着	－	8.0	－	1／3		14－8

第19図　第27号住居跡および出土遺物

や東寄りの古いカマドでは燃焼部側壁が取り払われ、燃焼部底面と煙道が残る。焼け面は30cm×20cmの不整形を呈する。底面と煙道の間には15cmの段がつき、煙道はほぼ水平に延びる。長さ1.1m の煙道の先端は40cm×40cmの隅丸正方形を呈するピット状で、確認面からの深さは40cmある。

［貯蔵穴状ピット］南東隅の床面で検出された（Ｐ１）。平面形は60cm×40cmの不整形を呈し、深さは15cmである。堆積土は締まりのない暗褐色土である。

［その他のピット］床面で１個（Ｐ２）検出された。平面形は30cm×20cmの隅丸長方形を呈し、深さは８cmである。堆積土は褐色のシルトである。

［出土遺物］床面や新しいカマドの燃焼部底面から土師器甕（第19図４）や須恵器坏（第19図１・２）が出土している。その他にも床面からは非ロクロ調整で胴部が長胴形を呈する土師器甕や、体部外面に平行タタキが施された須恵器甕などの破片が出土している。また、堆積土中からも須恵器坏（第19図３）などが出土しており、須恵器の破片の出土量が多い。

【第29号住居跡】（第20・21図）

［位置・確認面］II区ほぼ中央の緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

［平面形・規模］住居の南半が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、現状から東西5.1m×南北2.4m 以上で方形を基調とする。

［堆積土］11層認められる。１～７層は自然流入土であり、２～５層には灰白色火山灰のブロックもしくは粒子が含まれている。８層は白色粘土のブロックを多量に含むカマドの崩壊土である。また、９層は床面直上を覆うように堆積しており、炭化材と地山ブロックを多量に含む。10層は煙道上部の崩落土、11層はカマド機能時の堆積と考えられる。なお、９層の状況からこの住居は焼失住居と考えられる。

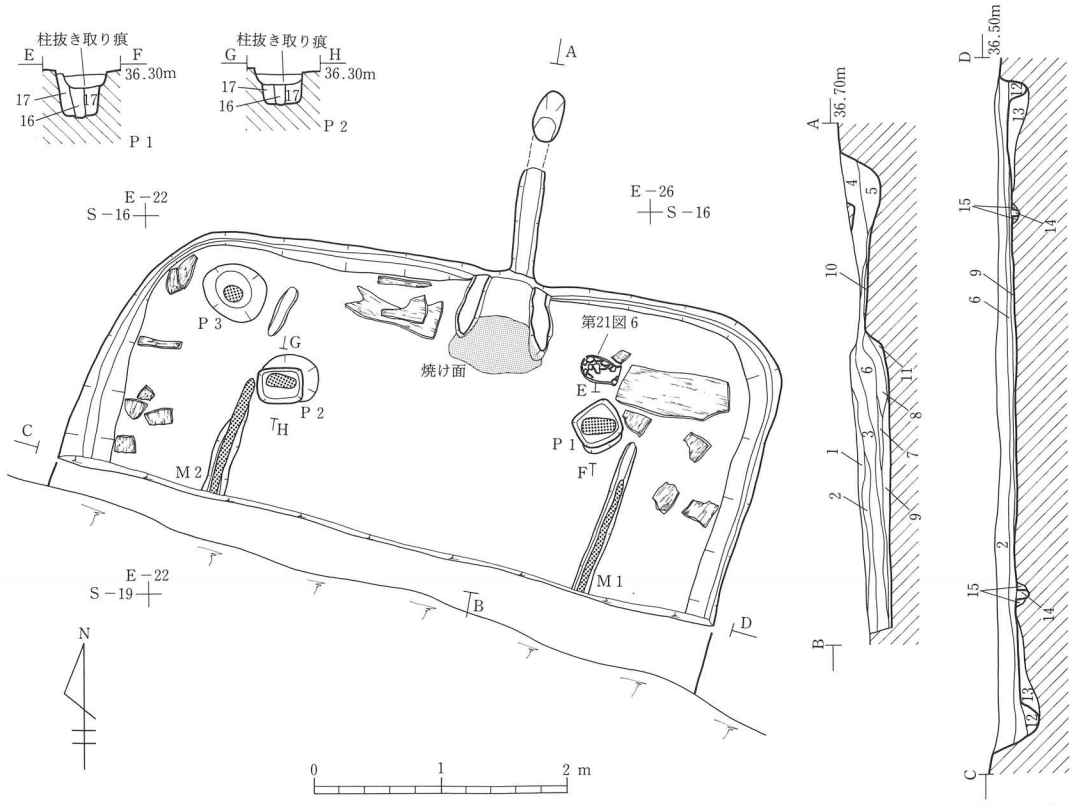
［壁］地山を壁としており、床面からやや開き気味に立ち上がる。壁高は残りのよい北西隅で床面から35cmである。

［床］住居の中央部分では地山を、壁寄りの部分では掘り方埋め土を床としている。床面にはやや凹凸が認められる。

［柱穴］床面で３個（Ｐ１～３）検出された。Ｐ１・２は住居の北壁から１ｍ程内側の平行線上に位置しており、いずれにも柱抜き取り痕が認められる。掘り方の平面形は隅丸長方形を呈し、深さ30cm前後である。柱穴の下部では約25cm×約10cmの隅丸長方形の柱痕跡が検出されている。このＰ１・２は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、Ｐ３は柱の抜き取り穴で、その底面には直径12cmの円形の柱押圧痕が残る。

［溝］調査区内では壁の直下を巡り、カマド部分で途切れる周溝と、Ｐ１・２の脇でそれぞれ東壁と西壁に平行して南北方向に延びる溝２条（Ｍ１・２）が検出された。周溝は上幅５～25cm、深さ約５cmで、断面は住居中央側へ開く変形「Ｖ」字状を呈する。堆積土は炭化物を多く含む締まりのない黒褐色土で、自然流入土とみられる。また、Ｍ１・２は残存状況が悪いものの、断面観察により床面から掘り込まれたものと判断された。上幅10～20cm、深さ約10cmで、断面は「Ｕ」字状を呈する。これらの溝の中央には材の痕跡とみられる幅５cm前後の黒褐色の堆積土が認められる。

［カマド］北辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は白色粘土主体の土を用いて構築されている。燃焼部底面はほぼ平らであるが、住居中央側へ緩やかに傾斜している。底面は焼けて赤変しており、煙道との間には12cmの段がつく。煙道は先端に向かって下向きにトンネル状に掘り抜かれている。長さ1.4m の煙道の先端では40

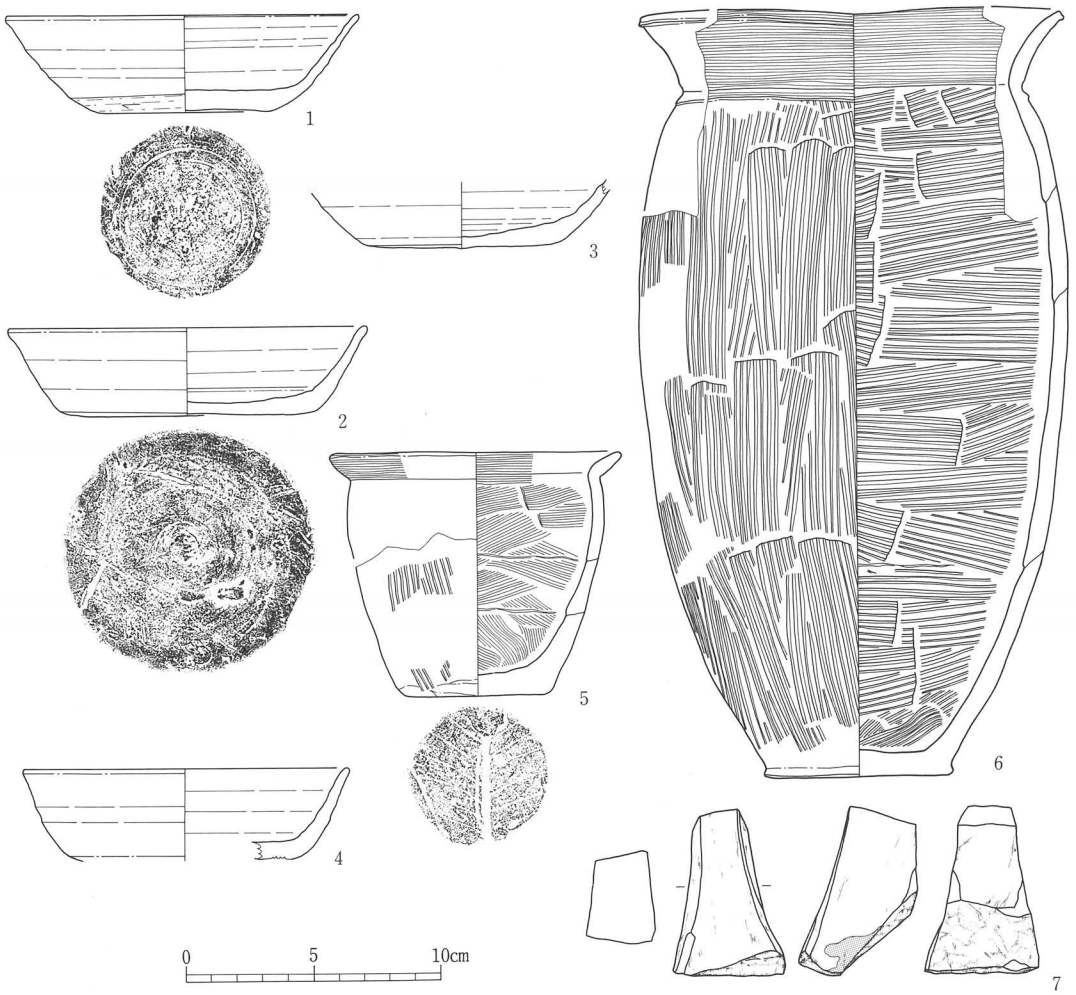


No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	地山小ブロック	自然流入土
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	灰白色火山灰粒	自然流入土
3	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	灰白色火山灰ブロック	自然流入土
4	黒褐色（10YR3/1）	シルト	灰白色火山灰小ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）
5	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物・灰白色火山灰小ﾌﾞﾛｯｸ	煙道内堆積土（自然流入土）
6	黒褐色（10YR3/2）	シルト		自然流入土
7	暗褐色（10YR3/4）	シルト		自然流入土
8	黒褐色(7.5YR3/2)	粘土質ｼﾙﾄ	白色粘土ブロック多く	カマド崩壊土
9	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化材・炭化物多量、地山ﾌﾞﾛｯｸ	床面直上に堆積（人為堆積か？）
10	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック	煙道上部崩落土
11	黒褐色（10YR2/2）	シルト	焼土・炭化物	カマド内堆積土、カマド機能時堆積
12	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物	周溝堆積土（自然流入土）
13	褐色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	炭化物少量、地山ブロック多量	住居掘り方埋め土
14	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物	材の痕跡
15	褐色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多く	Ｍ１・２埋め土
16	黒褐色（7.5YR3/1）	シルト	焼土・炭化物多く	Ｐ１・２柱痕跡
17	褐色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多く	Ｐ１・２掘り方埋め土

第20図　第29号住居跡

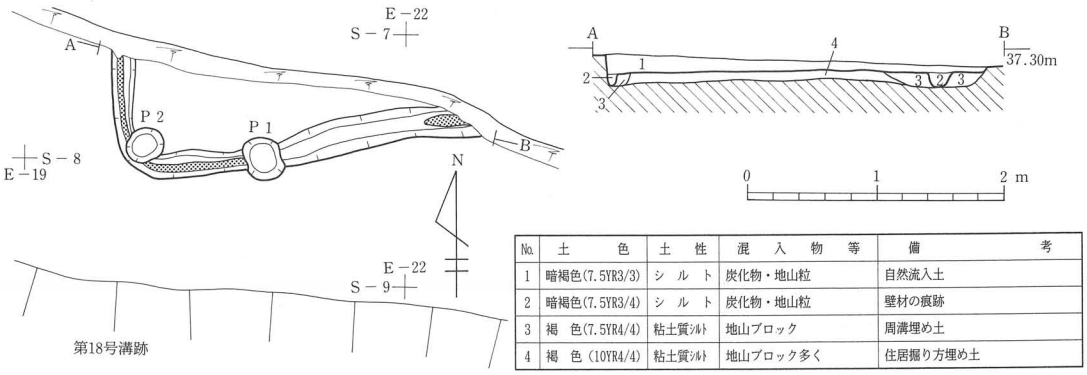
cm×20cmの隅丸長方形を呈するピット状の煙り出しが開口している。

［出土遺物］床面から土師器甕（第21図５・６）、須恵器坏（第21図１・２）・高台坏（第21図４）・砥石（第21図７）が出土している。この他にも床面からは非ロクロ調整で長胴形を呈する土師器甕やロクロ調整の土師器甕、須恵器坏などが出土している。また、堆積土中からも須恵器坏（第21図３）などが出土している。



No.	器　種	層　位	調　　整	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	図版番号
1	須恵器坏	床　面	外：ロクロナデ　[体下端]回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ　底：回転ヘラケズリ　歪み著しい	13.9	6.8	3.9	4／5	CⅢa	15－1
2	須恵器坏	床　面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ、火ダスキ　底：ヘラ切り→ナデ　歪み著しい	14.2	(10.1)	3.6	4／5	AⅠc	15－2
3	須恵器坏	堆積土中	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　灰白色	－	7.5	－	1／3		
4	須恵器高台坏	床　面	外：ロクロナデ　[体下端]回転ヘラケズリ→ナデ　内：ロクロナデ　底：不明＋高台	(12.8)	(7.9)	3.7	1／5		15－3
5	土師器甕	床　面	外：[口]ヨコナデ　[体]ハケメ、火ハネ　[体下端]手づくねの痕跡　内：[口]ヨコナデ　[体]ヘラナデ　底：木葉痕、中央に沈線	(11.6)	5.4	9.7	2／3	Cb	15－5
6	土師器甕	床　面	外：[口]ヨコナデ　[体]ハケメ　内：[口]ヨコナデ　[体]ハケメ　底：木葉痕	(16.8)	7.3	30.7	2／5	AⅠa	15－4
No.	器　種	層　位	備　　考						図版番号
7	砥　石	床　面	6面使用　石材：凝灰岩　最大長：6.7cm　最大幅：4.4cm　最大厚：3.7cm　スクリーントーンの範囲に炭化物付着						18－2

第21図　第29号住居跡出土遺物



No.	土　色	土　性	混　入　物　等	備　考
1	暗褐色(7.5YR3/3)	シ　ル　ト	炭化物・地山粒	自然流入土
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	炭化物・地山粒	壁材の痕跡
3	褐　色(7.5YR4/4)	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック	周溝埋め土
4	褐　色(10YR4/4)	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多く	住居掘り方埋め土

第22図　第30号住居跡

【第30号住居跡】（第22図）

［位置・確認面］II区ほぼ中央の緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第63号土壙と重複しており、これよりも新しい。

［平面形・規模］調査区内にかかるのは住居の南西隅のみで、東西2.5m以上×南北1.0m以上の方形を基調とする。

［堆積土］１層で、自然流入土である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい西壁で床面から17cmである。

［床］掘り方埋め土を床としており、概ね平坦である。

［周溝］調査区内では壁の直下を巡る。上幅10～25cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。また、周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅４～８cm、深さ約10cmの暗褐色の堆積土が断続的に認められる。

［その他のピット］床面で２個（Ｐ１・２）検出された。Ｐ１・２はいずれも周溝よりも新しく、直径30cm前後の不整な円形を呈し、深さは約30cmである。その位置からみて壁柱穴の可能性がある。

［出土遺物］堆積土中から内面が黒色処理されている土師器坏や須恵器壷・甕などの小破片が若干出土している。

【第37号住居跡】（第23・24図）

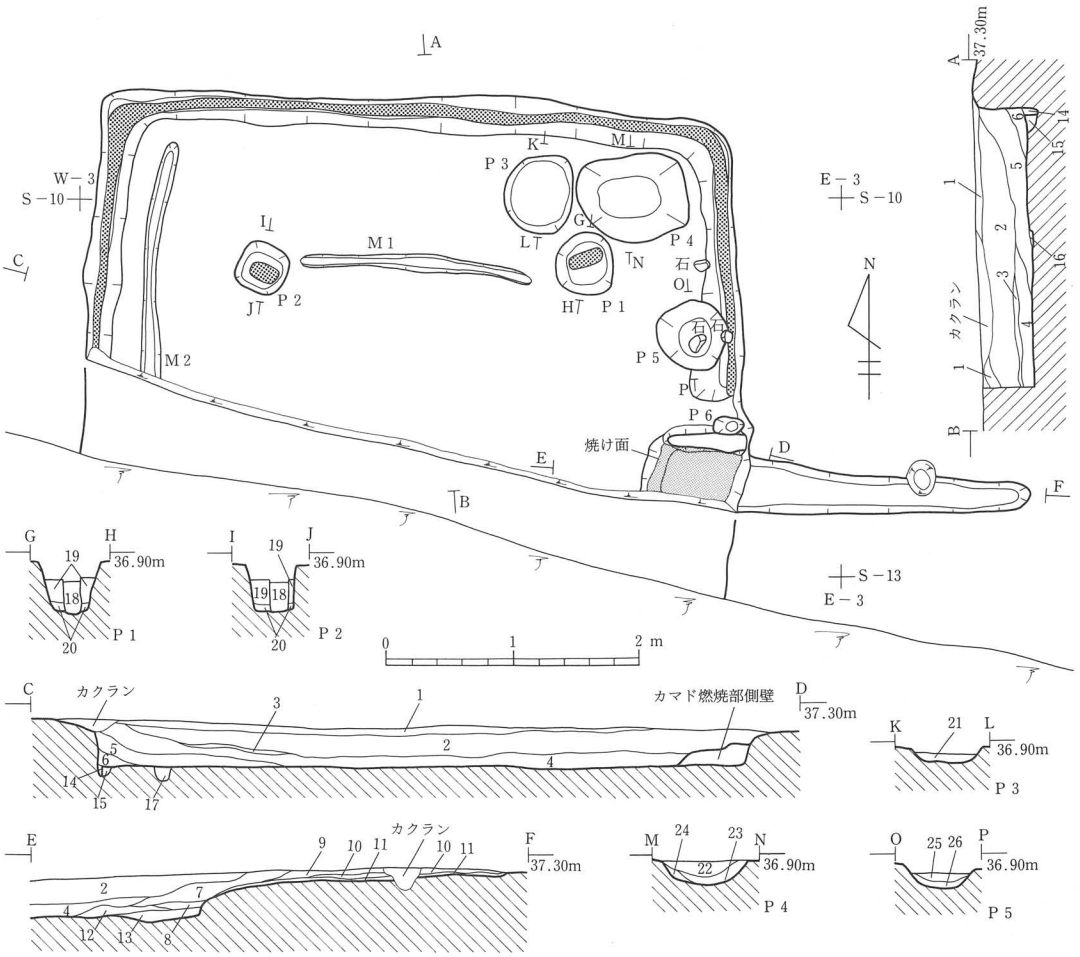
［位置・確認面］II区西寄りの緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

［平面形・規模］住居の南半が調査区外に及んでいるため全体の規模は不明であるが、現状から東西5.0m×南北2.9m以上で方形を基調とする。

［堆積土］13層認められる。１～５・７～10層は自然流入土であり、３層には灰白色火山

灰のブロックが含まれている。また、堆積土の状況から6層は住居の壁の崩落土、11層は煙道上部の崩落土、12層はカマドの崩壊土とみられる。13層は焼土と炭化物を多量に含むカマド機能時の堆積層である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい北西隅で床面から43cmである。



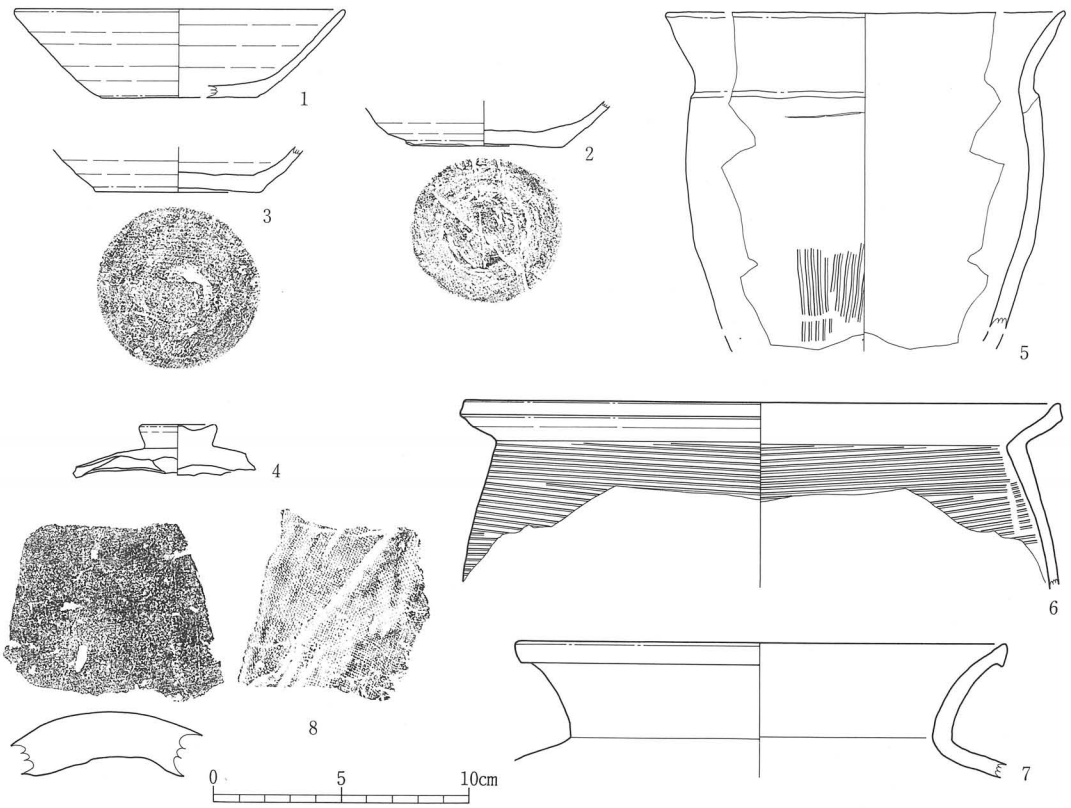
No.	土色	土性	混入物等	備考	No.	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物	自然流入土	14	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物	壁材の痕跡
2	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物・小礫	自然流入土	15	褐色(7.5YR4/3)	粘土質ｼﾙﾄ	炭化物・地山ブロック	周溝埋め土
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	灰白色火山灰ブロック	自然流入土	16	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック	M1堆積土（自然流入土）
4	褐色（10YR4/4）	シルト	地山小ブロック	自然流入土	17	褐色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック	M2堆積土（人為堆積）
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物・地山小ﾌﾞﾛｯｸ・小礫	自然流入土	18	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト		P1・2柱痕跡
6	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック多く	壁崩落土	19	褐色（10YR4/4）	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多く	P1・2掘り方埋め土
7	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山小ブロック	自然流入土	20	褐色（10YR4/6）	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多く	P1・2掘り方埋め土
8	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物	自然流入土	21	暗褐色（10YR3/4）	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多く	P3堆積土（人為堆積）
9	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物・地山小ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）	22	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物	P4堆積土（自然流入土）
10	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）	23	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山小ブロック	P4堆積土（自然流入土）
11	褐色(7.5YR4/4)	シルト	焼土・炭化物・地山ﾌﾞﾛｯｸ	煙道上部崩落土	24	褐色(7.5YR4/6)	シルト	地山小ブロック	P4堆積土（自然流入土）
12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質ｼﾙﾄ	焼土・粘土ブロック	カマド崩壊土	25	にぶい赤褐色(5YR4/3)	シルト	焼土ﾌﾞﾛｯｸ・炭化物・地山ﾌﾞﾛｯｸ	P5堆積土（人為堆積）
13	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	焼土・炭化物多量	ｶﾏﾄﾞ内堆積土､ｶﾏﾄﾞ機能時堆積	26	暗赤褐色（5YR3/4）	シルト	焼土ﾌﾞﾛｯｸ・炭化物・地山ﾌﾞﾛｯｸ	P5堆積土（人為堆積）

第23図　第37号住居跡

［床］地山を床としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］床面で２個（Ｐ１・２）検出された。Ｐ１・２は住居の北壁から1.2m 程内側の平行線上に位置しており、柱痕跡が認められる。Ｐ１は50cm×45cmの不整形、Ｐ２は40cm×40cmの隅丸正方形を呈し、いずれも深さは40cm前後である。柱痕跡は約25cm×約10cmの隅丸長方形を呈する。このＰ１・２は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［溝］調査区内では壁の直下を巡り、カマドの左脇で途切れる周溝と、Ｐ１・２の間を東西方向に延びる溝（Ｍ１）、西辺近くで壁に平行して南北方向に延びる溝（Ｍ２）が検出された。周溝は上幅12～30cm、深さ10cm前後で、断面は「Ｕ」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅10cm前後、深さ約10cmの暗褐色の堆積土が認められる。Ｍ１は上幅10cm前後、深さ２cmで、堆積土は自然流入土で



No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	須恵器坏	床面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→一方向のヘラナデ　内外面に火ダスキ　内面が赤褐色	(13.1)	(6.2)	3.5	1／3	CIc	15－6
2	須恵器坏	床面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　内外面に火ダスキ　灰白色	－	6.1	－	1／3		
3	須恵器坏	床面直上	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→一方向のヘラナデ　赤褐色	－	6.6	－	1／3		
4	須恵器蓋	堆積土中	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→(天井部に回転ﾍﾗｹｽﾘ→ﾅﾃﾞ)　内:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 偏平宝珠状つまみ　周縁部が割り取られている	－	－	－	1／4		15－7
5	土師器甕	床面	外：体部にハケメの痕跡　内：体部にハケメの痕跡　内外面とも剥落著しい	15.7	－	－	1／5	Ca	15－8
6	土師器甕	P5堆積土中(26層)	外：[口]ロクロナデ　[体]回転ハケメ　内：[口]摩滅が著しく不明　[体]回転ハケメ	(23.8)	－	－	1／4	D	15－9
7	須恵器甕	床面直上	内外面とも摩滅により調整不明、焼きが非常に悪く白色	(19.5)	－	－	1／9		15－10
No.	器種	層位	備考						図版番号
8	丸瓦	堆積土中	凸面：ナデ　凹面：輪積み痕、布目						15－11

第24図　第37号住居跡出土遺物

ある。M２は上幅10～15cm、深さ約10cmで、断面が「U」字状を呈し、人為堆積である。

［カマド］東辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は褐色の粘土質の土を用いて構築されている。燃焼部底面は浅く窪んで皿状になっており、焼けて赤変している。底面と煙道の間には15cmの段がつく。煙道は先端に向かってやや上向きに傾斜しており、長さ2.2m である。

［貯蔵穴状ピット］床面で３個（Ｐ３～５）検出された。Ｐ４は85cm×70cmの不整形を呈し、深さ20cm、Ｐ３・５は不整な円形を呈し、深さ10cm前後である。このうちＰ５は周溝と重複しており、これよりも新しい。また、Ｐ３・５の堆積土は人為堆積と考えられる。

［出土遺物］床面や床面直上、Ｐ５の堆積土中から土師器甕（第24図５・６）、須恵器坏（第24図１～３）・蓋（第24図４）・甕（第24図７）が出土している。その他にも床面や堆積土中からは非ロクロ調整で長胴形を呈する土師器甕や体部外面に平行タタキ、ヘラケズリが施されている須恵器甕、丸瓦（第24図８）などの破片が出土している。

【第38号住居跡】（第25図）

［位置・確認面］II区西寄りの緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

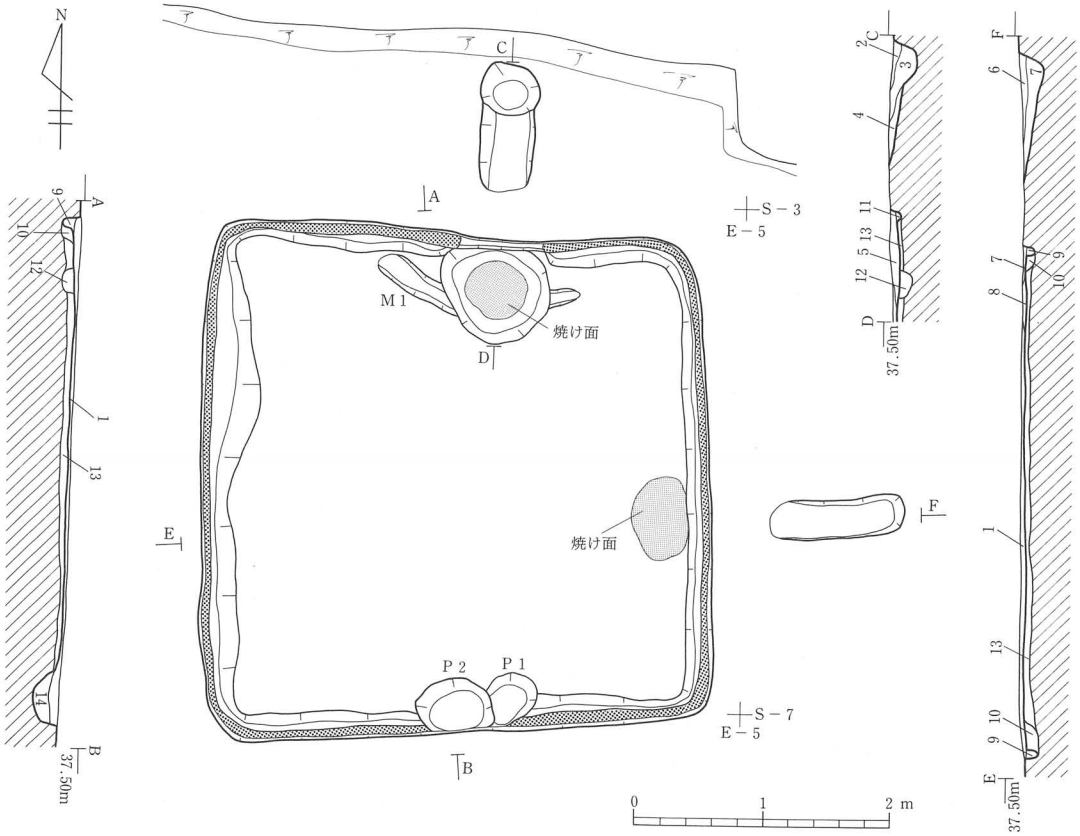
［平面形・規模］東西4.0m×南北4.1m の正方形を呈する。

［堆積土］８層認められる。１・２・４層は自然流入土である。また、堆積土の状況から３層は新しい煙道上部の崩落土、５層は新しいカマドの崩壊土とみられる。６層は古い煙道内に堆積しており、白色粘土ブロックと地山ブロックを多く含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。また、７・８層は古いカマドの燃焼部底面直上または煙道底面直上に堆積する焼土層もしくは炭化物層で、このカマドの機能時に堆積したと考えられる。

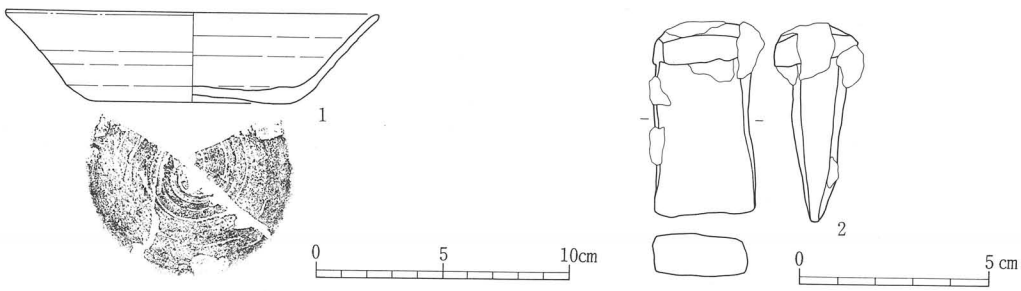
［壁］残存する部分では地山を壁としている。壁高は残りのよい南壁で床面から５cmである。

［床］掘り方埋め土を床としている。概ね平坦であるが、南側へ若干傾斜している。

［溝］壁の直下を全周し、新しいカマド部分で途切れる周溝と、新しいカマドの下部で弧を描くように延びる溝（Ｍ１）が検出された。周溝は上幅10～45cm、深さ10cm前後で、断面は「U」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～10cm、深さ約10cmの黒褐色の堆積土が認められる。なお、新しいカマド部分の奥壁直下でもこの堆積土と連続して灰褐色の堆積土が検出されており、新しいカマド構築時に壁材が抜き取られた痕と考えられる。Ｍ１は上幅10～20cm、深さ約10cmで、断面は「U」字状を呈し、埋め戻されて暗渠となっている。



No.	土色	土性	混入物等	備考	No.	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山粒	自然流入土	8				焼土層、カマド（1E）機能時堆積
2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土・炭化物・地山小ブロック	煙道（新）内堆積土（自然流入土）	9	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物・地山粒	壁材の痕跡
3	黒褐色（10YR3/1）	シルト	焼土ブロック・炭化物多く、地山大ブロック	煙道（新）上部崩落土	10	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質ソルト	炭化物、地山ブロック多く	周溝埋め土
4	褐色（10YR4/4）	シルト	焼土・炭化物・地山粒	煙道（新）内堆積土（自然流入土）	11	灰褐色（7.5YR4/2）	シルト	焼土・炭化物	壁材の抜き取り痕か？<カマド（新）部分>
5	灰褐色（7.5YR4/2）	粘土質ソルト	焼土・炭化物・白色粘土大ブロック	カマド（新）崩壊土	12	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質ソルト	炭化物、地山ブロック多く	M1埋め土
6	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	焼土・炭化物・白色粘土小ブロック・地山ブロック	煙道（旧）内堆積土（人為堆積か？）	13	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質ソルト	地山ブロック多量	住居掘り方埋め土
7				炭化物層、カマド（旧）機能時堆積	14	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物・地山粒	P2堆積土（自然流入土）



No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	須恵器坏	床面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　灰白色（口縁部は青灰色）	(14.8)	8.0	3.6	1／2	CIc	15－12
No.	器種	層位	備考						図版番号
2	鉄製楔	床面	ふくれ錆あり　最大長：5.2cm　最大幅：2.6cm　最大厚：2.3cm						17－14

第25図　第38号住居跡および出土遺物

［カマド］北辺中央やや東寄りと東辺中央やや南寄りで新旧２つのカマドが検出された。いずれのカマドにも燃焼部側壁は残存していないが、燃焼部底面上にカマドの崩壊土が残存していることや、壁材の痕跡が途切れる状況から北辺のものが新しいと判断された。新しいカマドの燃焼部底面は浅く窪んで皿状で、焼けて赤変している。煙道は先端に向かって下向きに傾斜している。長さ1.3m の煙道の先端部は直径45cmの不整な円形を呈するピット状で、確認面からの深さは20cmある。また、東辺の古いカマドの燃焼部底面はほぼ平らで、焼けて赤変している。煙道は先端に向かって下向きに傾斜しており、長さ1.5m である。

［貯蔵穴状ピット］南辺中央の床面で重複して２個（Ｐ１・２）検出されており、Ｐ２が新しい。いずれも深さ15cm前後で、周溝よりも新しい。Ｐ１は堆積土の状況やＰ２との重複関係から、埋め戻されていたと考えられる。

［出土遺物］床面から須恵器坏（第25図１）と鉄製の楔（第25図２）が出土している。その他にも床面からは土師器の小破片や須恵器坏、体部外面にヘラケズリが施されている須恵器甕などの破片が少量出土している。

【第43号住居跡】（第26～28図、第１表）

［位置・確認面］II区西寄りの緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

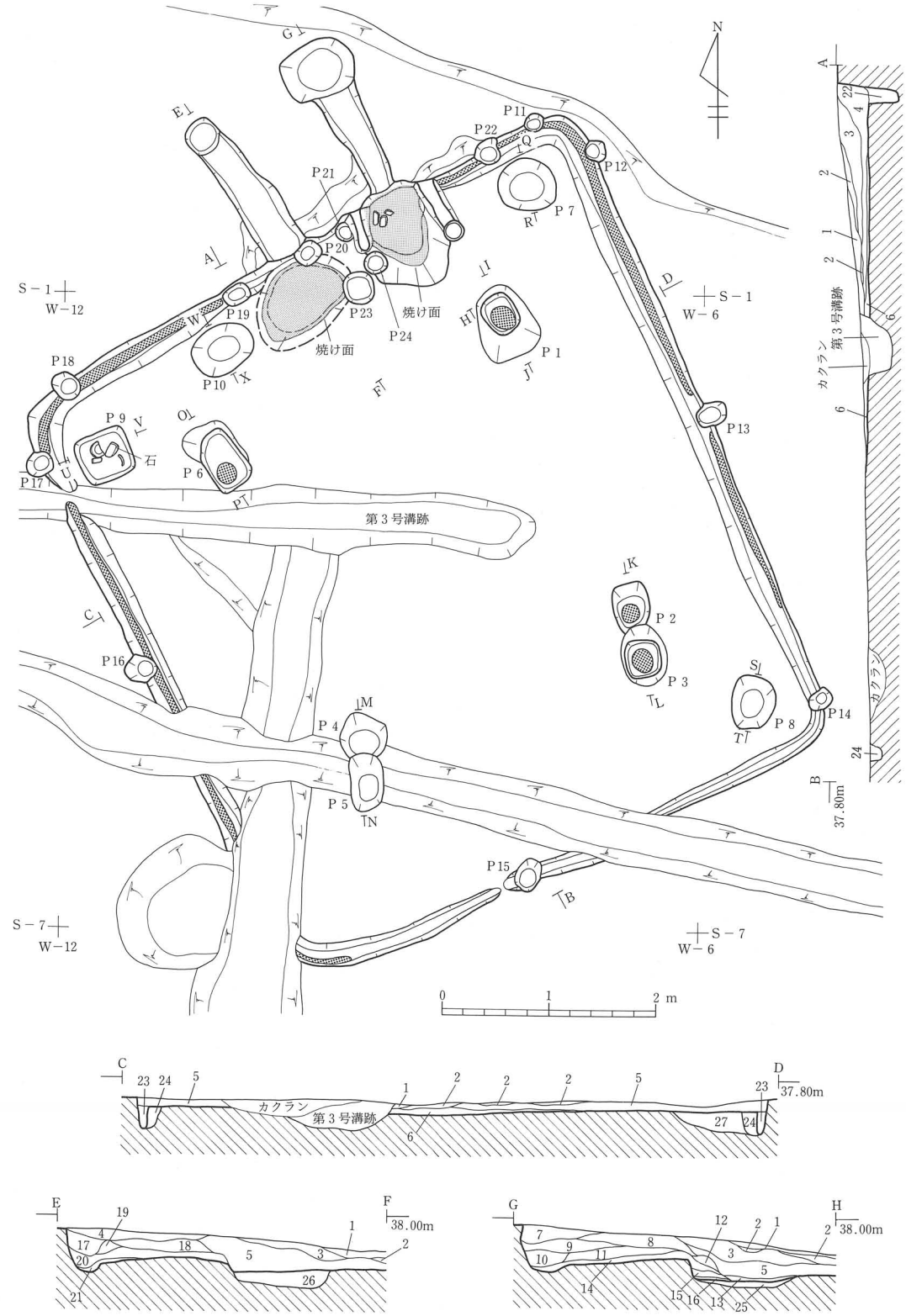
［重複］第３号溝跡、第46号住居跡と重複しており、前者より古く、後者より新しい。また、主柱穴と考えられる柱穴の状況から建て替えが行なわれたと考えられる。

［平面形・規模］削平により住居の南半では壁が残存していないが、周溝の状況から東西5.8m×南北6.3m の正方形を呈するものと思われる。また、改築前の規模は不明である。

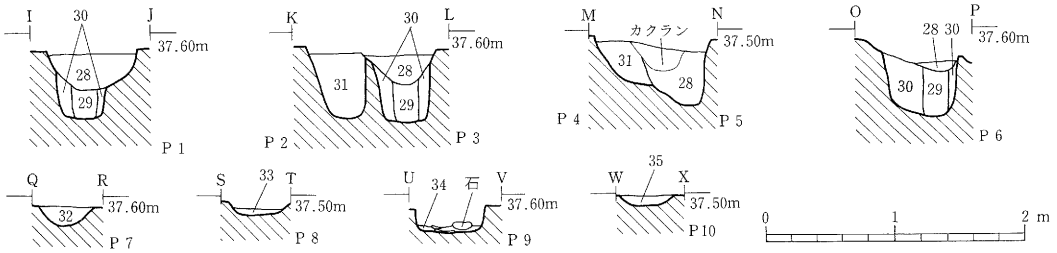
［堆積土］21層認められる。１～８・10層は自然流入土であり、２層には灰白色火山灰のブロックが含まれている。９・17層は新旧の煙道内に堆積し、焼けた粘土のブロックを多量に含む人為堆積土である。また、堆積土の状況から11～13層は新しいカマドの煙道上部の崩落土もしくはカマドの崩壊土、18・19層は古い煙道上部の崩落土とみられる。14～16層と20・21層はそれぞれ新旧のカマドの燃焼部底面か煙道底面上に堆積した焼土もしくは炭化物層で、カマド機能時の堆積と考えられる。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい北壁で床面から30cmである。

［床］改築前の床面は不明である。改築後は基本的に地山を床としているが、北東隅付近では部分的に掘り方埋め土を床としている。床面はほぼ平坦であるが、南半がやや南側へ傾斜していることから、若干削平を受けているとみられる。



第26図　第43号住居跡（1）



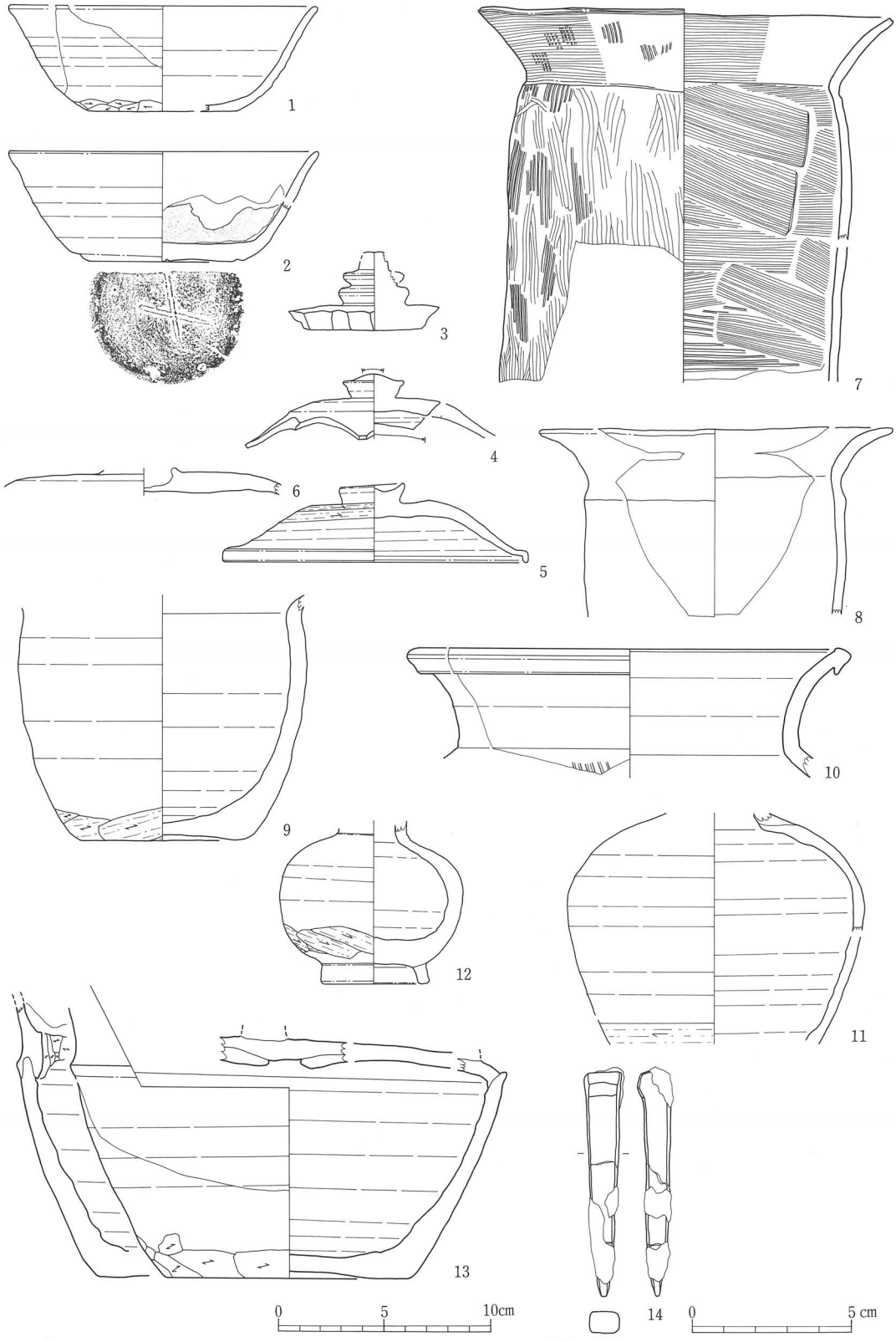
No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒 色（10YR2/1）	シルト		自然流入土（黒ボク土）
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	灰白色火山灰ブロック	自然流入土
3	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土粒・炭化物・地山粒	自然流入土
4	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	焼土粒・炭化物・地山粒	自然流入土
5	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒・炭化物・地山小ブロック	自然流入土
6	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物・地山小ブロック	自然流入土
7	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物	煙道（新）内堆積土（自然流入土）
8	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	焼土・炭化物・地山小ブロック	煙道（新）内堆積土（自然流入土）
9	黒褐色（7.5YR3/1）	シルト	炭化物、焼けた粘土ブロック多量	煙道（新）内堆積土（人為堆積か？）
10	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物多く	煙道（新）内堆積土（自然流入土）
11	褐 色（7.5YR4/3）	シルト	焼土ブロック・地山ブロック多量	煙道（新）上部崩落土
12	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土質ソルト	焼土・炭化物・白色粘土大ブロック	カマド（新）崩壊土
13	灰黄色（10YR5/2）	粘土質ソルト	焼土ブロック・炭化物・白色粘土ブロック	カマド（新）崩壊土
14	黒褐色（10YR2/2）	シルト	焼土、炭化物多く	カマド（新）内堆積土、カマド（新）機能時堆積
15	黒褐色（2.5Y3/1）	シルト	焼土・炭化物多量	カマド（新）内堆積土、カマド（新）機能時堆積
16				炭化物層、カマド（新）機能時堆積
17	灰褐色（7.5Y4/2）	シルト	焼土・炭化物、焼けた粘土ブロック多量	煙道（旧）内堆積土（人為堆積か？）
18	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	焼土・炭化物・地山ブロック多量	煙道（旧）上部崩落土
19	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山ブロック	煙道（旧）上部崩落土
20	黒褐色（7.5YR2/2）	シルト	焼土・炭化物	煙道（旧）内堆積土、カマド（旧）機能時堆積
21				炭化物層、カマド（旧）機能時堆積
22	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山粒	壁柱穴
23	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山粒	壁材の痕跡
24	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質ソルト	地山ブロック多く	周溝埋め土
25	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土・炭化物、地山ブロック多量	人為堆積
26	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	焼土ブロック・炭化物、地山ブロック多量	人為堆積
27	褐 色（10YR4/4）	粘土質ソルト	地山ブロック多量	住居掘り方埋め土
28	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロック多量	P1・3・5・6柱抜き取り痕
29	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物	P1・3・6柱痕跡
30	褐 色（10YR4/4）	粘土質ソルト	地山ブロック多量	P1・3・6掘り方埋め土
31	暗褐色（10YR3/4）	粘土質ソルト	地山ブロック多量	P2・4柱抜き取り穴埋め土
32	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山粒	P7堆積土（自然流入土）
33	暗赤褐色（5YR3/3）	シルト	焼土ブロック・炭化物多量	P8堆積土（人為堆積）
34	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土・炭化物	P9堆積土（自然流入土）
35	暗赤褐色（5YR3/2）	シルト	焼土小ブロック・炭化物多量、地山 粒	P10堆積土（人為堆積）

第27図　第43号住居跡（2）

［柱穴］床面で6個（P1～6）検出された。P1・3・5・6は住居平面形の対角線上に位置しており、いずれにも柱の抜き取り痕が認められる。P1・3・6の掘り方は隅丸正方形もしくは隅丸長方形を呈し、深さは約60cmである。柱穴の下部では直径20cmの円形の柱痕跡が検出された。このP1・3・5・6は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、P2・4はそれぞれすぐ南側に位置するP3・5と重複しており、これらよりも古い。その位置と重複関係からP1・6に食われたと考えられる柱穴と組んで、改築前の主柱穴になるとみられる。このP2・4では柱が抜き取られているが、P2の底面には直径18cmの円形の柱押圧痕が残る。

［壁柱穴］周溝内もしくはわずかに壁から張り出す位置で規則的に配された12個（P11～22）のピットが検出された。平面形は直径25cm前後の不整な円形を呈し、深さ20～40cmである。これらは、その位置・形状・規模から壁柱穴であると考えられる。また、カマドの両脇に壁柱穴が認められ、この内P20が古いカマドの機能時には存在し得ないことから、少なくともP19・21は古いカマド、P20・22は新しいカマドの機能時に伴うとみられる。

［周溝］壁の直下をほぼ全周し、新旧のカマド部分では途切れる。上幅14～28cm、深さ10～20cmで、断面は「U」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。また、南辺を除く周溝内



第28図　第43号住居跡出土遺物

No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	須恵器坏	P9堆積土中（34層）	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ［体下端］軽いﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底：軽いﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　灰白色	(14.6)	7.0	5.0	1/6	DⅢb	16-1
2	須恵器坏	P6柱抜き取り痕中（28層）	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、添付着　底：回転糸切り→ﾅﾃﾞ、ﾍﾗ書き「X」　内外面に火ダスキ	(14.6)	7.5	5.2	2/5	DⅡc	16-2
3	須恵器蓋蓋？	P6柱抜き取り痕中（28層）	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　周縁部が割り取られている	－	－	－	1/5		16-3
4	須恵器蓋	P9堆積土中（34層）	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→（天井部に回転ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ→ﾅﾃﾞ）　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　宝珠状つまみ　矢印の範囲が著しく摩滅　周縁部が割り取られている	－	－	－	1/2		16-4
5	須恵器蓋	P9堆積土中（34層）	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→天井部に回転ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　偏平宝珠状つまみ　周縁部が割り取られている	14.4	－	3.8	4/5		16-5
6	須恵器蓋蓋？	堆積土中	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→（天井部に回転ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ→ﾅﾃﾞ）　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	－	－	－	3/5		16-6
7	土師器甕	ｶﾏﾄﾞ(新)燃焼部右側壁中	外：［口］ﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ　［体］ﾊｹﾒ→ﾍﾗﾐｶｷ　内：［口］ﾖｺﾅﾃﾞ　［体］ﾊｹﾒ→ﾍﾗﾅﾃﾞ	19.5	－	－	1/2	AⅠa	16-7
8	土師器甕	ｶﾏﾄﾞ(新)燃焼部底面直上	内外面とも摩滅により調整不明	(16.6)	－	－	1/7		16-9
9	土師器甕	P9堆積土中（34層）	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　［体下端］ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底：剥落が著しく不明　胎土不良	－	7.8	－	1/2	E	16-11
10	須恵器甕	堆積土中	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、体部に平行ﾀﾀｷﾒの痕跡　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	(21.0)	－	－	1/10		16-8
11	須恵器壺	床　面	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　［体下端］回転ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　歪みあり	－	－	－	1/4		16-12
12	須恵器壺	堆積土中	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　［体下端］ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　底：ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ＋高台	－	(5.0)	－	3/4		16-10
13	須恵器平瓶	堆積土中	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　［体下端］軽いﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　［頸部］軽いﾍﾗﾅﾃﾞﾘ　底：周縁部にﾍﾗﾅﾃﾞﾘ、中央部は不明　胎土良好	－	11.6	－	1/2		16-13
No.	器種	層位	備考						図版番号
14	鉄　釘	壁材の痕跡中	ふくれ錆あり　最大長：7.1cm　最大長：1.2cm　最大厚：0.9cm						17-12

第１表　第43号住居跡出土遺物観察表

には壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～10cm、深さ10～20cmの黒褐色の堆積土が断続的に認められる。

［カマド］北辺で新旧２つのカマドが検出された。東寄りのカマドが新しく、燃焼部と煙道からなる。燃焼部右側壁の焚き口部には土師器甕（第28図７）が口縁部を下にして据えられており、それに白色粘土主体の土を貼りつけて側壁を構築している。左側壁の焚き口部からは浅いピット（Ｐ24）が検出されており、この部分にも土器が据えられていたものと考えられる。燃焼部底面は浅く窪んで皿状で、焼けて赤変しており、煙道との間には20cmの段がつく。煙道は先端に向かって若干下向きに傾斜している。長さ1.6m の煙道の先端は70cm×50cmの隅丸長方形を呈するピット状で、確認面からの深さは45cmある。また、北辺中央の古いカマドでは燃焼部側壁が取り払われ、燃焼部底面と煙道が残る。底面は平らで、焼けて赤変しており、煙道との間には15cmの段がつく。煙道はほぼ水平に延び、長さ1.6m の煙道の先端は直径35cmの円形を呈するピット状で、確認面からの深さは40cmある。

［貯蔵穴状ピット］床面で４個（Ｐ７～10）検出された。Ｐ７・８・10は約50cm×約40cmの不整形を呈し、深さは10～15cmである。また、Ｐ９は50cm×45cmの正方形を呈し、深さは20cmである。このうち、Ｐ８・10の堆積土は焼土ブロックと炭化物を多量に含み、人為堆積と考えられる。

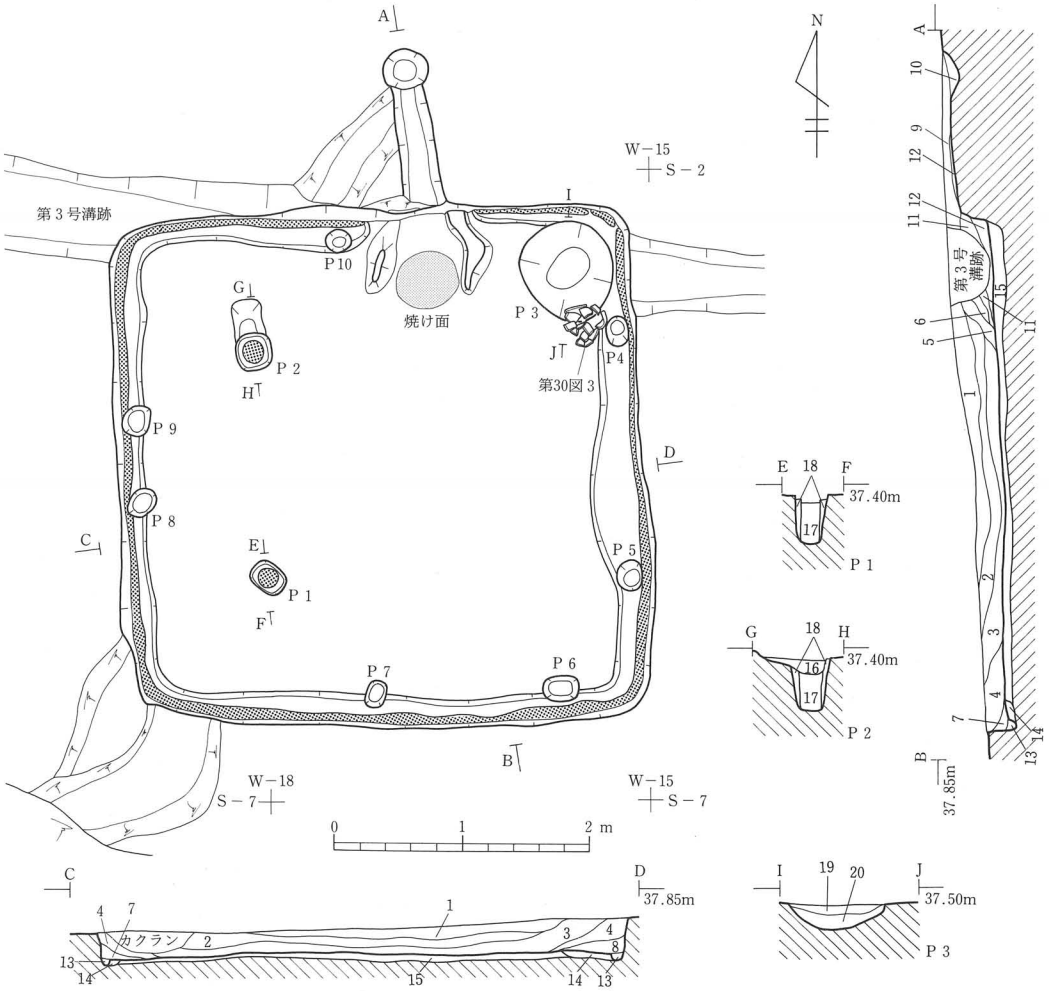
［出土遺物］床面や新しいカマドの燃焼部底面直上・側壁部分、Ｐ６の柱抜き取り痕中、壁材の痕跡中、Ｐ９の堆積土中から土師器甕（第28図７～９）、須恵器坏（第28図１・２）・蓋（第28図３～５）・壷（第28図11）、鉄釘（第28図14）が出土している。その他にも床面からは土師器甕や須恵器坏などの破片が出土しており、土師器甕には非ロクロ調整で長胴形を呈するものの破片が多いが、ロクロ調整のものも認められる。また、堆積土中からは須恵器蓋（第28図６）・甕（第28図10）・壷（第28図12）・平瓶（第28図13）なども出土して

いる。なお、須恵器蓋の小破片が図示した以外にも堆積土中から多く出土している。

【第44号住居跡】（第29・30図）

［位置・確認面］II区西寄りの緩やかな南斜面で検出された。確認面は地山面である。

［重複］第３号溝跡と重複しており、これよりも古い。



No.	土色	土性	混入物等	備考	No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト		自然流入土	11	暗褐色(7.5YR3/3)	粘土質ｼﾙﾄ	白色粘土ブロック多量	カマド崩壊土
2	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト	灰白色火山灰大ブロック	自然流入土	12	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物少量	カマド・煙道内堆積土（自然流入土）
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物	自然流入土	13	暗褐色（10YR3/3）	シルト		壁材の痕跡
4	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物・小礫	自然流入土	14	褐色（10YR4/6）	粘土質ｼﾙﾄ	炭化物、地山ブロック多量	周溝埋め土
5	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物	自然流入土	15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質ｼﾙﾄ	炭化物少量、地山ﾌﾞﾛｯｸ多量	住居掘り方埋め土
6	褐色(7.5YR4/3)	シルト	炭化物	自然流入土	16	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山小ブロック	P２柱抜き取り痕
7	暗褐色（10YR3/4）	シルト	小礫	自然流入土	17	暗褐色（10YR3/3）	シルト		P１・２柱痕跡
8	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物・地山小ブロック	自然流入土	18	褐色(7.5YR4/6)	粘土質ｼﾙﾄ	地山ブロック多量	P１・２掘り方埋め土
9	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山小ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）	19	暗褐色（10YR3/4）	シルト		P３堆積土（自然流入土）
10	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物・地山小ブロック	煙道内堆積土（自然流入土）	20	褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物	P３堆積土（自然流入土）

第29図　第44号住居跡

［平面形・規模］東西4.0m×南北4.0mの正方形を呈する。

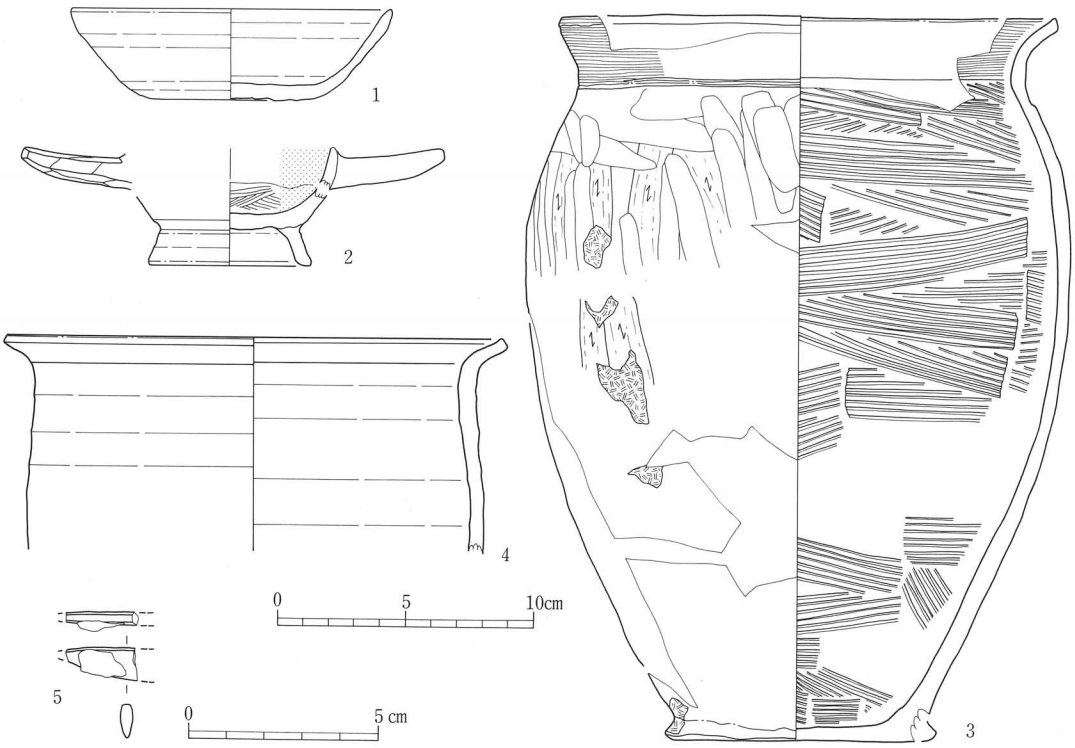
［堆積土］12層認められる。１～10・12層は自然流入土であり、２層には灰白色火山灰のブロックが含まれている。11層は白色粘土のブロック主体で、カマドの崩壊土とみられる。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい北壁で床面から35cmである。

［床］掘り方埋め土を床としている。やや凹凸があり、若干南側へ傾斜している。

［柱穴］床面で２個（Ｐ１・２）検出された。Ｐ１・２は住居の西壁から１ｍ程内側の平行線上に位置しており、Ｐ２には柱抜き取り痕が認められる。掘り方の平面形は隅丸長方形もしくは隅丸正方形を呈し、深さ40cm前後である。これらの柱穴には直径15cmの円形の柱痕跡が認められる。このＰ１・２は、その位置・形状・規模から主柱穴の可能性がある。

［壁柱穴］周溝上面で規則的に配された７個（Ｐ４～10）のピットが検出された。平面形は直径20cm前後の不整な円形を呈し、深さ15～30cmである。これらは、その位置・形状・規模から壁柱穴であると考えられる。また、これらのピットは同じく周溝内に認められる



No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	須恵器坏	床面	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　内外面に火ハネ　赤褐色	(12.7)	6.4	3.7	2／5	CIc	17－1
2	土師器双耳坏	床面	外：ロクロナデ　[耳]ヘラケズリの痕跡　内：ヘラミガキ＋黒色処理　底：切り離し不明＋高台　全面摩滅が著しい	－	(5.5)	－	1／3		17－2
3	土師器甕	床面	外:[口]ヨコナデ　[体]ヘラケズリ→軽いヘラミガキ、二次的な粘土の貼りつけ　内:[口]ヨコナデ　[体]ハケメ　底:ヘラケズリ	19.6	10.3	28.7	3／4	AIIa	17－3
4	土師器甕	床面	外：ロクロナデ（破片の状況から体部にヘラケズリ）　内：ロクロナデ	20.0	－	－	1／8	D	17－4
No.	器種	層位	備考						図版番号
5	刀子？	床面	刀身の先端部のみ残存　ふくれ錆あり　残存長：1.9cm						17－13

第30図　第44号住居跡出土遺物

暗褐色の堆積土（壁材の痕跡）よりも内側に位置している。

［周溝］壁の直下を全周し、カマドの両脇で途切れる。上幅12～45cm、深さ５cm前後で、断面は「U」字状を呈する。この溝は埋め戻されている。また、周溝内には壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～10cm、深さ約５cmの暗褐色の堆積土が認められる。

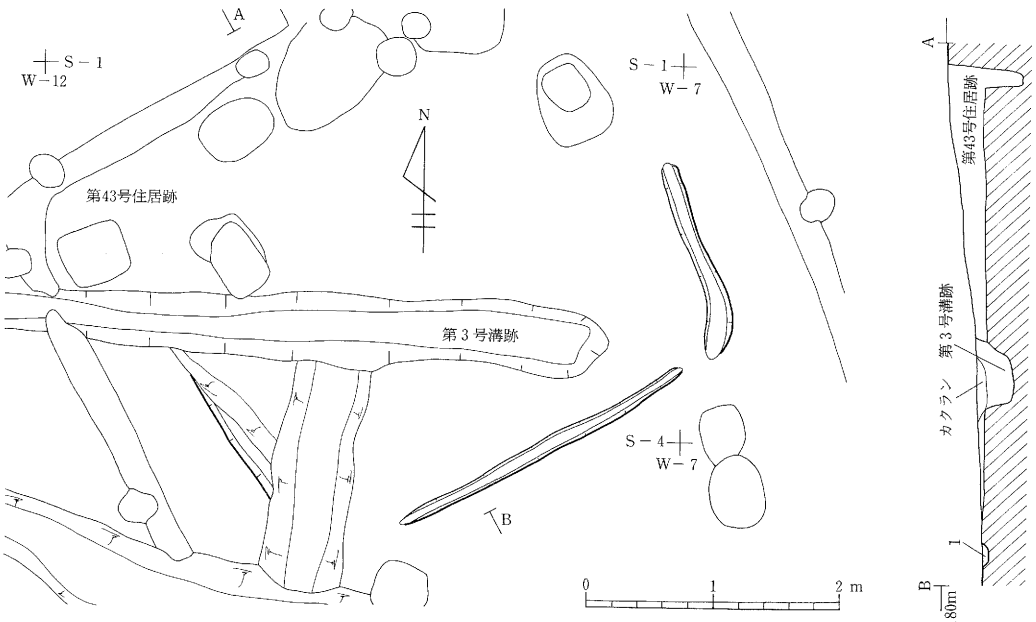
［カマド］北辺中央やや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は白色粘土主体の土を用いて構築されている。燃焼部底面はほぼ平らで、焼けて赤変している。底面と煙道の間には20cmの段がつき、煙道は先端に向かってやや上向きに傾斜している。長さ1.3m の煙道の先端は直径30cmの円形を呈するピット状で、確認面からの深さは15cmある。

［貯蔵穴状ピット］北東隅の床面で検出された（Ｐ３）。平面形は直径75cmの不整な円形を呈し、深さは20cmである。堆積土は２層で、いずれも自然流入土である。

［出土遺物］床面から土師器双耳坏（第30図２）・甕（第30図３・４）、須恵器坏（第30図１）、刀子の刃部先端とみられる破片（第30図５）が出土している。その他にも床面からはロクロ調整で内面がヘラミガキ、黒色処理されている土師器坏や非ロクロ調整で長胴形を呈する土師器甕、体部外面にヘラケズリが施されている須恵器甕などが出土している。

【第46号住居跡】（第31図）

II区西寄りの緩やかな南斜面で検出された。第43号住居跡によって壊されており、住居南半を断続的に巡る周溝が東西4.1m×南北2.0m の範囲で残る。周溝は、現状で上幅



No.	土色	土性	混入物等	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山ブロック	周溝埋め土

第31図　第46号住居跡

10～20cm、深さ３cm前後で、埋め戻されている。遺物は出土していない。

【第47号住居跡】（第32図）

［位置・確認面］ II区ほぼ中央の緩やかな東斜面で検出された。確認面は地山面である。

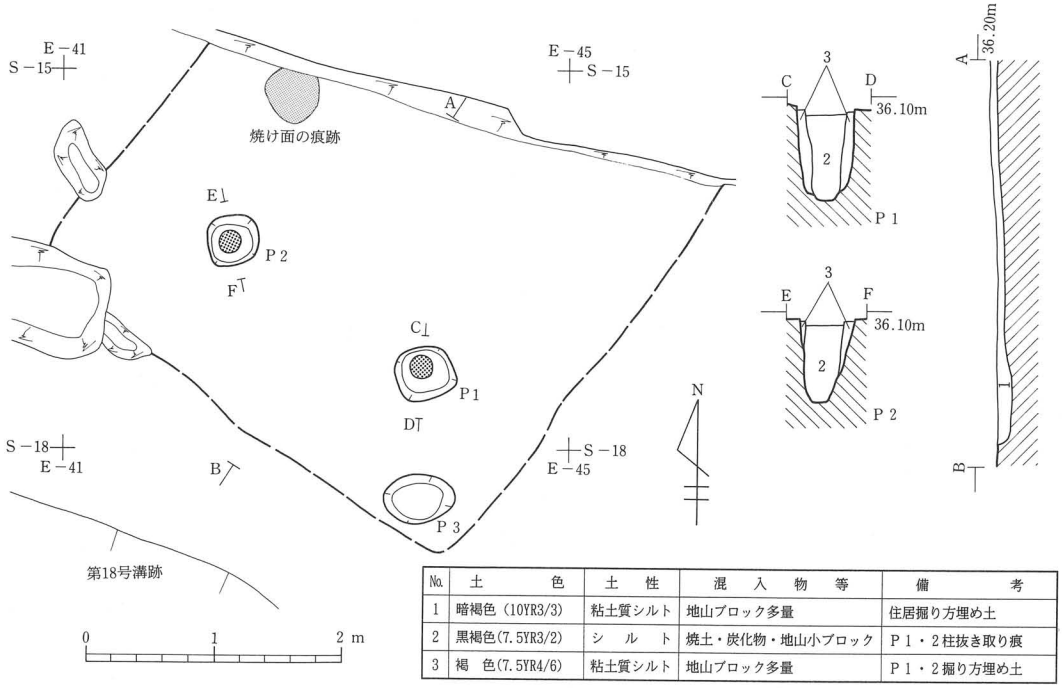
［平面形・規模］ 住居の北半が調査区外に及ぶことや削平により壁・堆積土が残存しないことから全体の規模は不明であるが、残存する掘り方埋め土の状況から東西4.0m 以上×南北3.6m 以上で方形を基調とする。

［床］掘り方埋め土を床としていると考えられるが、削平のため詳細は不明である。なお、住居の掘り方は壁寄りの部分が深くなっている。

［柱穴］ ２個（Ｐ１・２）検出された。Ｐ１・２は住居の南辺から１ｍ程内側の平行線上に位置しており、いずれにも柱抜き取り痕が認められる。現状で、掘り方の平面形は約40cm×約40cmの隅丸正方形を呈し、深さ70cm前後である。また、掘り方底面には直径15cmの円形の柱押圧痕が残る。このＰ１・２は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［焼け面］ 西壁寄りで、土が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は直径40cmの不整な円形を呈する。

［貯蔵穴状ピット］ 南東隅で検出された（Ｐ３）。平面形は55cm×40cmの楕円形を呈し、深さは10cmである。



No.	土　　色	土　性	混　入　物　等	備　　考
1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロック多量	住居掘り方埋め土
2	黒褐色(7.5YR3/2)	シ　ル　ト	焼土・炭化物・地山小ブロック	Ｐ１・２柱抜き取り痕
3	褐　色(7.5YR4/6)	粘土質シルト	地山ブロック多量	Ｐ１・２掘り方埋め土

第32図　第47号住居跡

［出土遺物］住居の掘り方埋め土中から半球状の胴部に外反する口縁部をもち、口縁部外面にはヨコナデが施されている土師器坏が出土しているが、破片のため図示できなかった。また、確認面からは土師器甕・甑の破片が出土している。

【第62号住居跡】（第３図）

Ⅱ区ほぼ中央の緩やかな東斜面で、住居の煙道の一部が検出された（Ｓ－９～10・Ｅ－26～27付近）。確認面は地山面である。現状で長さ0.8m の煙道はほぼ水平に延びる。その先端は40cm×40cmの隅丸正方形を呈するピット状で、確認面からの深さは20cmある。遺物は出土していない。

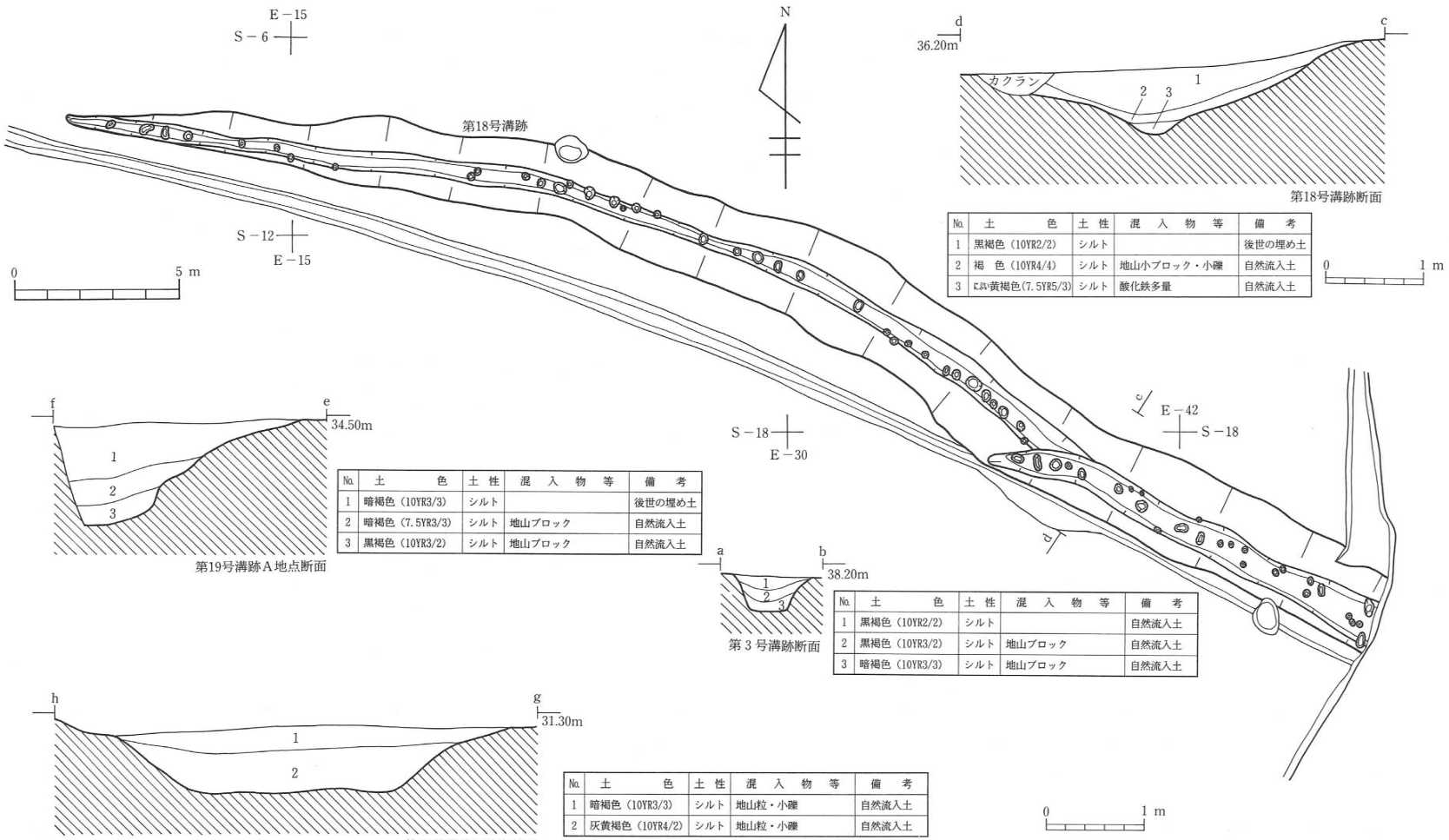
２．溝跡とその出土遺物

【第３号溝跡】（第３・33図）

調査Ⅰ区の南西隅から調査Ⅱ区にかけて、東西方向に延びる溝跡が検出された。確認面は地山面である。第４・16・43・44号住居跡、第５・12号土壙と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。溝の西端は調査区外へ及ぶが、現状で長さ約53m、上幅0.4～1.5m、深さ15～55cmである。側壁はやや開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層認められ、いずれも自然流入土である。堆積土中からは体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、外面がヘラミガキ、内面がヘラミガキ、黒色処理されている土師器坏や土師器甕、体部外面に平行タタキが施されている須恵器甕などの破片が少量出土している。これらの遺物から少なくとも古代の遺構と考えられる。

【第18号溝跡】（第３・33図）

調査Ⅱ区のほぼ中央を調査区に沿って、東西方向に延びる溝跡が検出された。確認面は地山面である。この溝は東端で第19号溝跡と重複しているとみられるが、この部分が農業用の用水路と削平によって壊されており、その前後関係については不明である。また、第60・61号土壙とも重複しており、これらより新しい。現状で長さ約43m、上幅0.4～3.0m、深さ５～90cmである。側壁は外側へ緩やかに傾斜しているが、底面付近で浅い溝状に一段深くなっている。この部分は幅30～80cm、深さ５～20cmで、断面は逆台形状を呈する。この浅く窪んだ部分では、50cm前後の間隔で東西方向へ並ぶ小ピットが60個程検出された。小ピットは直径10～30cmの不整な円形を呈するものが多く、深さは５cm前後である。溝の堆積土は３層認められ、１層は後世に埋め戻された土、２・３層は自然流入土である。なお、小ピットの堆積土は３層と同一である。遺構に伴うと考えられる遺物が出土していな



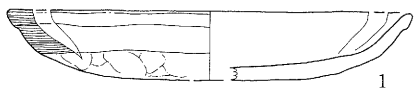
No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR2/2）	シルト		後世の埋め土
2	褐色（10YR4/4）	シルト	地山小ブロック・小礫	自然流入土
3	にぶい黄褐色（7.5YR5/3）	シルト	酸化鉄多量	自然流入土

No.	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト		後世の埋め土
2	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	地山ブロック	自然流入土
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山ブロック	自然流入土

No.	土色	土性	混入物等	備考
1	黒褐色（10YR2/2）	シルト		自然流入土
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山ブロック	自然流入土
3	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロック	自然流入土

No.	土色	土性	混入物等	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山粒・小礫	自然流入土
2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	地山粒・小礫	自然流入土

第33図　第３・18・19号溝跡



No.	器種	層位	特徴	口径	器高	残存率	図版番号
1	かわらけ	2層	手づくね坏	(16.0)	2.7	2／5	17－5

第34図　第19号溝跡出土遺物

いため、その時期については明らかでない。

【第19号溝跡】（第３・33・34図）

調査Ⅱ区の東半で「Ｌ」字状に延びる溝跡が検出された。確認面は地山面である。第18号溝跡と重複しているとみられるが、その前後関係については不明である。また、第36・39・41号土壙とも重複しており、いずれよりも新しい。長さは現状で東西約76m、南北約10mであるが、東西の溝は途中削平により壊されている。上幅3.0～6.0m、深さ0.4～1.1mで、側壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土はＡ地点で３層、Ｂ地点で２層認められ、Ａ地点の１層は後世に埋め戻された土、それ以外は自然流入土である。Ａ地点付近の２・３層からはかわらけ（第34図１）や土師器、須恵器の小破片が若干出土している。このかわらけは手づくねによる坏で、体部から口縁部にかけては内弯気味に外傾している。内外面とも摩滅が著しいが、外面の口縁部から体部中程にかけてはヨコナデ、体部中程から底部にかけては指頭によるオサエの痕跡が認められる。色調は浅黄褐色である。このような特徴をもつ土器は花山村花山寺跡（吉田：1990）、多賀城市多賀城跡第50次調査（高野：1987）などで出土している。多賀城跡第50次調査ではこの土器をＩＡ類とし、平安京の土師器と平泉のかわらけとの類似性から12世紀末の年代を与えている。よって、本遺跡のかわらけも同時期のものと考えられるが、この土器１点のみで遺構の年代を限定するのは難しい。しかし、溝跡の年代は少なくとも同時期までは遡る可能性がある。さらに、この溝が丘陵東端の頂部から東斜面にかけてを取り囲むように延びていることやその規模の大きさからみて、館跡もしくは屋敷跡に伴う堀跡の可能性が指摘される。

３．土壙とその出土遺物（第35～38図）

地山面で、33基検出された。分布状況は遺構配置図（第３図）に示したとおりである。本項では、精査した土壙について形態的な分類を行ない、その後分類ごとに個別に説明を加えていくことにする。なお、各々の土壙の平面形・規模・分類・重複関係などについては第２表にまとめた。

検出された土壙について、まず平面形から大別を行ない、それに個々の特徴を加えて以下の５類に分類した。

Ⅰ類：長楕円形を呈するもの

Ⅱ類：隅丸長方形を呈し、底面にピットのあるもの

Ⅲ類：隅丸長方形を呈し、壁面・底面が焼けて赤変しているもの

Ⅳ類：円形を基調とするもの

Ⅴ類：不整形を呈するもの

以下、各類の土壙について説明を加える。

【Ⅰ類】

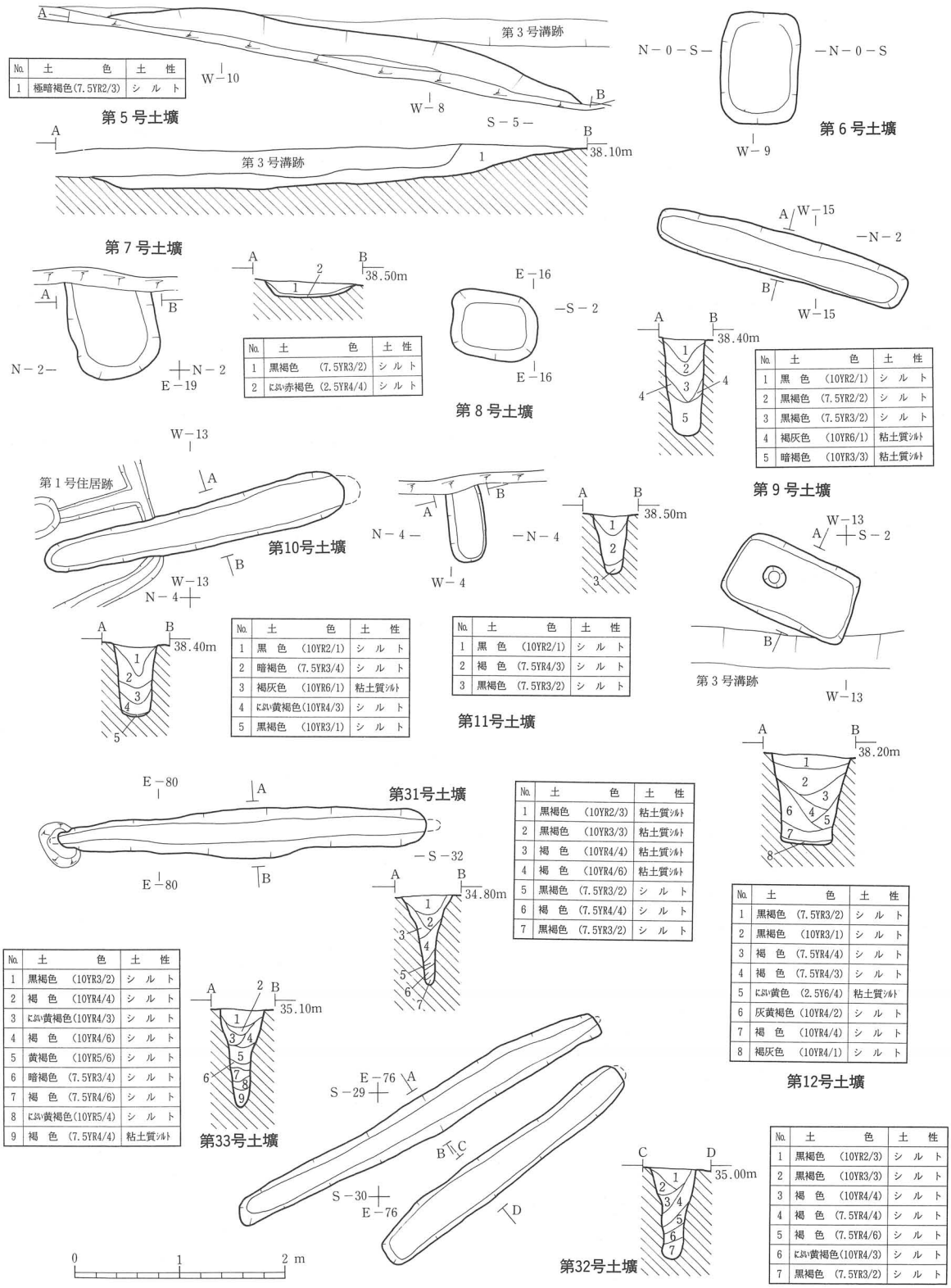
平面形が長楕円形を呈するもので、今回検出された中で最も多く、24基認められる。これらの土壙には住居跡、溝跡と重複するものも認められ、そのいずれよりも古いが、Ⅰ類内で互いに重複するものや、他類の土壙と重複するものは認められない。規模は長軸228～392cm、短軸20～57cm、深さ20～104cmである。中でも、長軸280～290cm、短軸30～50cmで、深さは60cm前後と90cm前後のものが多い。短軸方向の断面形は大部分が「V」字状を呈し、長軸方向の断面形は開口部より底面が広がる台形状を呈するものが多い。堆積土は自然流入土である。これらは調査区全体に分布しているが、特に丘陵東斜面で尾根に沿って多く認められる（Ⅱ区のS－23～37・E－54～88付近）。また、大部分の土壙では丘陵斜面の傾斜に対して直交する方向に長軸が設けられている。これらの土壙からは遺物が出土していないものの、その形態的特徴から縄文時代の陥し穴と考えられる。

【Ⅱ類】

第12号土壙のみである。第3号溝跡と重複しており、これよりも古い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸128cm、短軸76cm、深さ86cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、

遺構番号	規模（長軸cm×短軸cm）	深さ（cm）	平面形	分類	備考	遺構番号	規模（長軸cm×短軸cm）	深さ（cm）	平面形	分類	備考
第5号土壙	460×20以上	40	不整形	Ⅴ類	第4号住居跡を壊す、第3号溝跡に壊される	第42号土壙	250×57	98	長楕円形	Ⅰ類	第25号住居跡に壊される、長軸方向にオーバーハング
第6号土壙	110×74	14	隅丸長方形	Ⅲ類	壁面・底面が焼けて赤変	第48号土壙	290×30	60	長楕円形	Ⅰ類	第27号住居跡に壊される、長軸方向にオーバーハング
第7号土壙	100以上×85	15	隅丸長方形	Ⅲ類	壁面・底面が焼けて赤変	第49号土壙	70×64	30	不整な円形	Ⅳ類	
第8号土壙	84×66	8	隅丸長方形	Ⅲ類	壁面・底面が焼けて赤変	第50号土壙	108以上×28	47	長楕円形	Ⅰ類	第26号住居跡に壊される、長軸方向にオーバーハング
第9号土壙	246×41	92	長楕円形	Ⅰ類	長軸方向にオーバーハング	第51号土壙	245×35	60	長楕円形	Ⅰ類	第26号住居跡に壊される
第10号土壙	296×42	67	長楕円形	Ⅰ類	長軸方向にオーバーハング	第52号土壙	72×60	90	不整な円形	Ⅳ類	第23号住居跡に壊される
第11号土壙	70以上×34	55	長楕円形	Ⅰ類		第53号土壙	直径160	100	円形	Ⅳ類	第23号住居跡に壊される
第12号土壙	128×76	86	隅丸長方形	Ⅱ類	底面に小ピットⅠ個、第3号溝跡に壊される	第54号土壙	298×32	38	長楕円形	Ⅰ類	第20号住居跡に壊される
第31号土壙	354×48	87	長楕円形	Ⅰ類	長軸方向にオーバーハング	第55号土壙	264×30	45	長楕円形	Ⅰ類	第21号住居跡に壊される
第32号土壙	284×42	87	長楕円形	Ⅰ類	長軸方向にオーバーハング	第56号土壙	292×40	104	長楕円形	Ⅰ類	
第33号土壙	392×40	95	長楕円形	Ⅰ類	長軸方向にオーバーハング	第57号土壙	275×20	33	長楕円形	Ⅰ類	短軸方向にオーバーハング
第34号土壙	295×46	91	長楕円形	Ⅰ類	第23号住居跡に壊される	第58号土壙	262×33	58	長楕円形	Ⅰ類	長軸方向にオーバーハング
第35号土壙	280×31	52	長楕円形	Ⅰ類	長軸方向にオーバーハング	第59号土壙	228×40	60	長楕円形	Ⅰ類	
第36号土壙	294×35	44	長楕円形	Ⅰ類	第19号溝跡に壊される、長軸方向にオーバーハング	第60号土壙	192以上×32	73	長楕円形	Ⅰ類	第18号溝跡に壊される
第39号土壙	185以上×24	28	長楕円形	Ⅰ類	第19号溝跡に壊される	第61号土壙	340×25	52	長楕円形	Ⅰ類	第18号溝跡に壊される
第40号土壙	75×72	28	不整な円形	Ⅳ類		第63号土壙	40以上×38	20	（長楕円形）	Ⅰ類	第30号住居跡に壊される
第41号土壙	242×25	68	長楕円形	Ⅰ類	第19号溝跡に壊される						

第2表　土壙一覧表



No.	土　色	土　性
1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シ　ル　ト

No.	土　色	土　性
1	黒褐色　(7.5YR3/2)	シ　ル　ト
2	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	シ　ル　ト

No.	土　色	土　性
1	黒　色　(10YR2/1)	シ　ル　ト
2	黒褐色　(7.5YR2/2)	シ　ル　ト
3	黒褐色　(7.5YR3/2)	シ　ル　ト
4	褐灰色　(10YR6/1)	粘土質シルト
5	暗褐色　(10YR3/3)	粘土質シルト

No.	土　色	土　性
1	黒　色　(10YR2/1)	シ　ル　ト
2	暗褐色　(7.5YR3/4)	シ　ル　ト
3	褐灰色　(10YR6/1)	粘土質シルト
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シ　ル　ト
5	黒褐色　(10YR3/1)	シ　ル　ト

No.	土　色	土　性
1	黒　色　(10YR2/1)	シ　ル　ト
2	褐　色　(7.5YR4/3)	シ　ル　ト
3	黒褐色　(7.5YR3/2)	シ　ル　ト

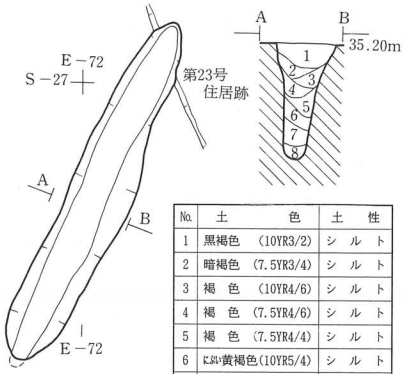
No.	土　色	土　性
1	黒褐色　(10YR2/3)	粘土質シルト
2	黒褐色　(10YR3/3)	粘土質シルト
3	褐　色　(10YR4/4)	粘土質シルト
4	褐　色　(10YR4/6)	粘土質シルト
5	黒褐色　(7.5YR3/2)	シ　ル　ト
6	褐　色　(7.5YR4/4)	シ　ル　ト
7	黒褐色　(7.5YR3/2)	シ　ル　ト

No.	土　色	土　性
1	黒褐色　(7.5YR3/2)	シ　ル　ト
2	黒褐色　(10YR3/1)	シ　ル　ト
3	褐　色　(7.5YR4/4)	シ　ル　ト
4	褐　色　(7.5YR4/3)	シ　ル　ト
5	にぶい黄色　(2.5Y6/4)	粘土質シルト
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	シ　ル　ト
7	褐　色　(10YR4/4)	シ　ル　ト
8	褐灰色　(10YR4/1)	シ　ル　ト

No.	土　色	土　性
1	黒褐色　(10YR3/2)	シ　ル　ト
2	褐　色　(10YR4/4)	シ　ル　ト
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シ　ル　ト
4	褐　色　(10YR4/6)	シ　ル　ト
5	黄褐色　(10YR5/6)	シ　ル　ト
6	暗褐色　(7.5YR3/4)	シ　ル　ト
7	褐　色　(7.5YR4/6)	シ　ル　ト
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シ　ル　ト
9	褐　色　(7.5YR4/4)	粘土質シルト

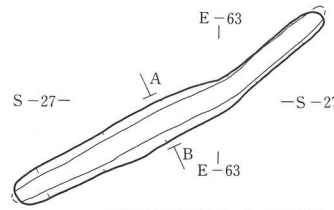
No.	土　色	土　性
1	黒褐色　(10YR2/3)	シ　ル　ト
2	黒褐色　(10YR3/3)	シ　ル　ト
3	褐　色　(10YR4/4)	シ　ル　ト
4	褐　色　(7.5YR4/4)	シ　ル　ト
5	褐　色　(7.5YR4/6)	シ　ル　ト
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シ　ル　ト
7	黒褐色　(7.5YR3/2)	シ　ル　ト

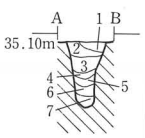
第35図　土壙（第5～12・31～33号土壙）



No.	土色	土性
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト
2	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
3	褐色 (10YR4/6)	シルト
4	褐色 (7.5YR4/6)	シルト
5	褐色 (7.5YR4/4)	シルト
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト
7	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト
8	黄褐色 (10YR5/6)	シルト

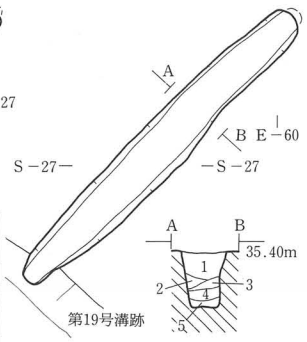
第34号土壙





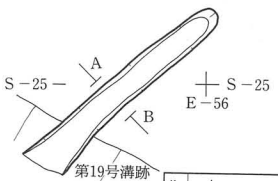
No.	土色	土性
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
2	褐色 (7.5YR4/3)	シルト
3	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
4	褐色 (10YR4/6)	シルト
5	褐色 (10YR4/4)	シルト
6	褐色 (7.5YR4/4)	シルト
7	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト

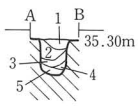
第35号土壙



No.	土色	土性
1	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
2	褐色 (7.5YR4/4)	シルト
3	褐色 (10YR4/4)	シルト
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト
5	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト

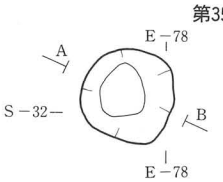
第36号土壙

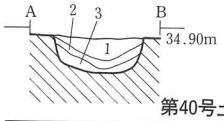




No.	土色	土性
1	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
2	褐色 (10YR4/4)	シルト
3	褐色 (10YR4/6)	シルト
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト

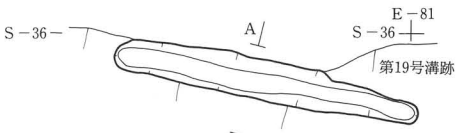
第39号土壙

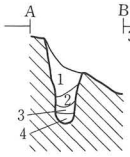




No.	土色	土性
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト
3	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト

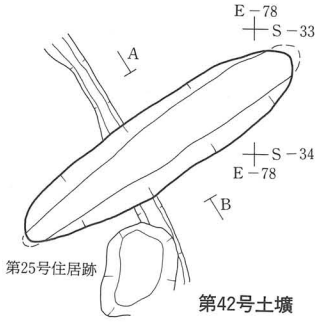
第40号土壙

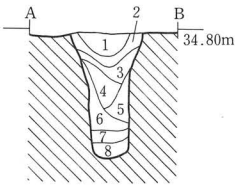




No.	土色	土性
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
2	褐色 (7.5YR4/6)	シルト
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト
4	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト

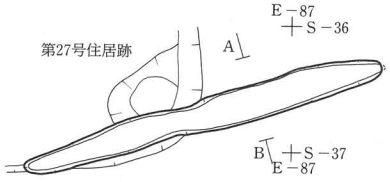
第41号土壙



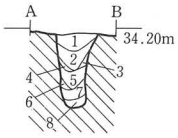


No.	土色	土性
1	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト
2	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
3	褐色 (10YR4/4)	シルト
4	褐色 (7.5YR4/4)	シルト
5	褐色 (7.5YR4/3)	シルト
6	褐色 (7.5YR4/6)	シルト
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
8	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト

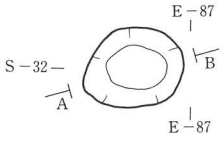
第42号土壙



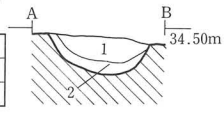
No.	土色	土性
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト
3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
4	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト
6	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
7	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト



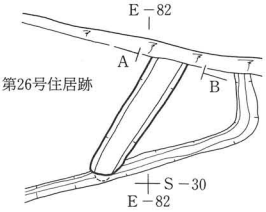
第48号土壙

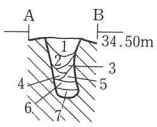


第49号土壙



No.	土色	土性
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト

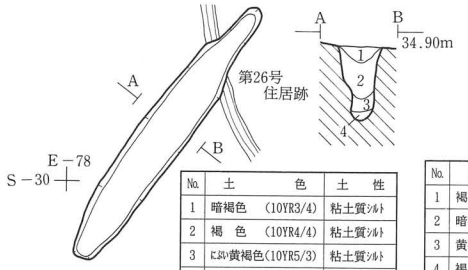




第50号土壙

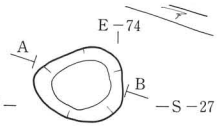
No.	土色	土性
1	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
2	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト
4	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト

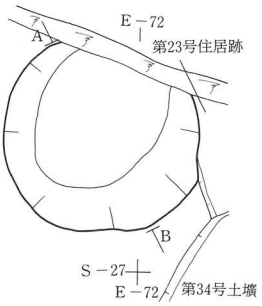
第36図　土壙（第34～36・39～42・48～50号土壙）

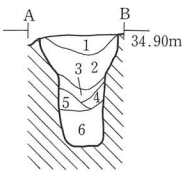


No.	土色	土性
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
2	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト

第51号土壙

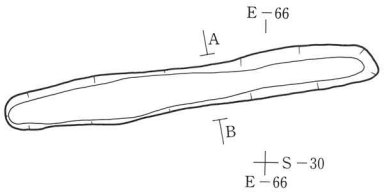


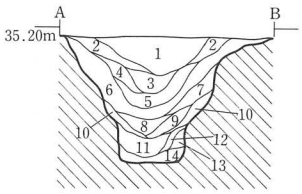




No.	土色	土性
1	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
3	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト
4	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト
6	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト

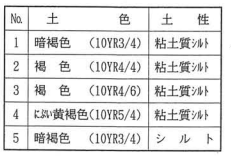
第52号土壙





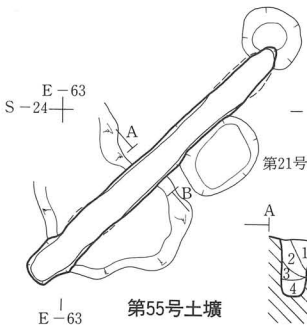
No.	土色	土性
1	黒色 (10YR2/1)	シルト
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト
6	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
7	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト
8	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
9	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト
11	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
12	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト
13	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
14	黒褐色 (10YR3/2)	シルト

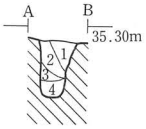
第53号土壙



No.	土色	土性
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
2	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
3	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト

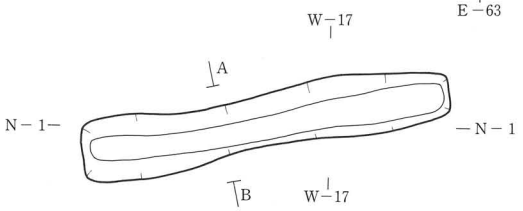
第54号土壙

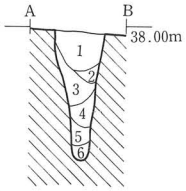




第55号土壙

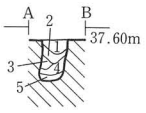
No.	土色	土性
1	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
2	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト



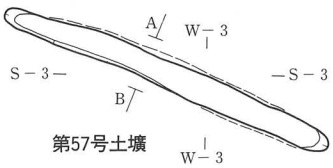


No.	土色	土性
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
3	褐色 (10YR4/4)	シルト
4	褐色 (7.5YR4/4)	シルト
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト
6	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト

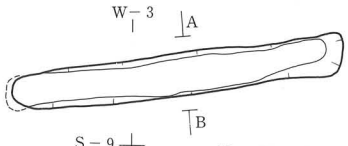
第56号土壙



No.	土色	土性
1	褐色 (10YR4/4)	シルト
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
4	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト

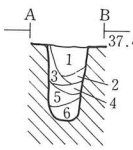


第57号土壙

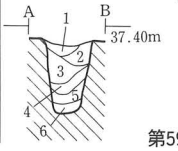


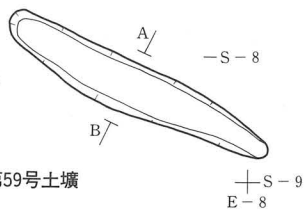
第58号土壙

No.	土色	土性
1	褐色 (10YR4/4)	シルト
2	褐色 (7.5YR4/6)	シルト
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト
4	褐色 (10YR4/6)	シルト
5	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト
6	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト



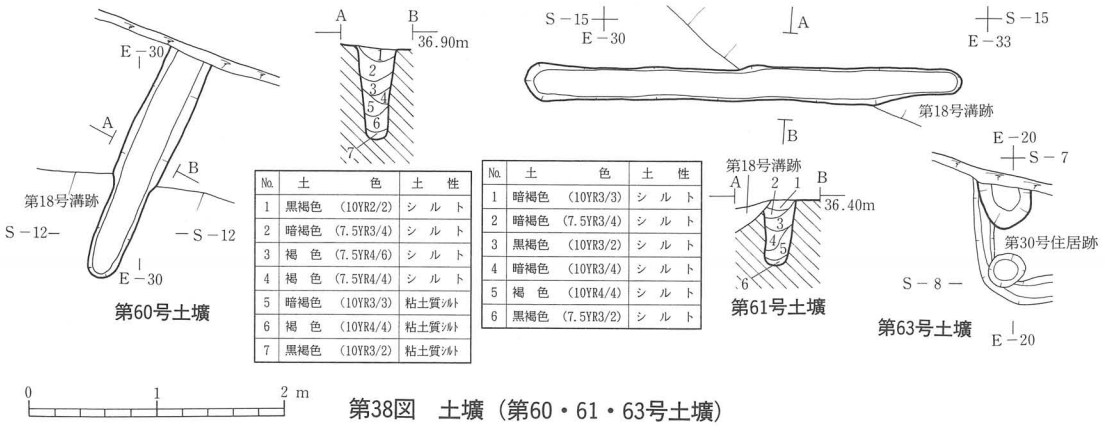
No.	土色	土性
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
2	褐色 (7.5YR4/4)	シルト
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト
4	褐色 (10YR4/4)	シルト
5	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト
6	黒褐色 (7.5YR2/2)	粘土質シルト





第59号土壙

第37図　土壙（第51～59号土壙）



No.	土色	土性
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト
2	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
3	褐色 (7.5YR4/6)	シルト
4	褐色 (7.5YR4/4)	シルト
5	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト
6	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
7	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト

No.	土色	土性
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト
2	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト
5	褐色 (10YR4/4)	シルト
6	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト

第38図　土壙（第60・61・63号土壙）

底面はほぼ平坦である。底部の中央西寄りには杭痕とみられる直径20cm、深さ40cmの小ピットが１個認められる。堆積土は自然流入土で、遺物は出土していない。この土壙も形態的特徴から縄文時代の陥し穴と考えられる。

【III類】

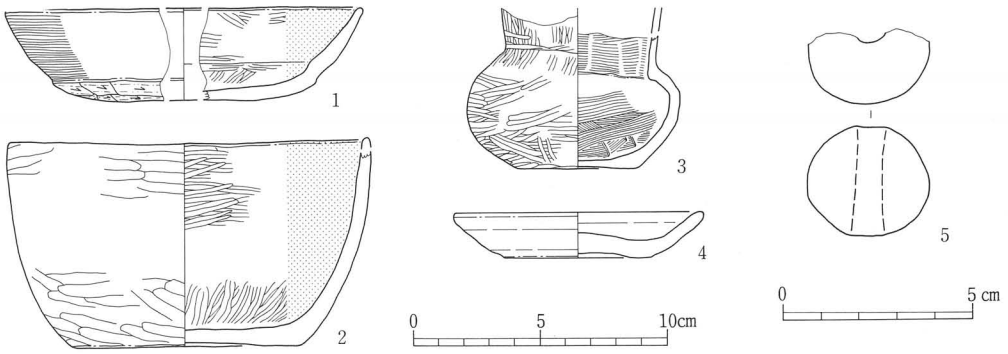
３基(第６～８号土壙)認められる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸84～110cm、短軸66～85cm、深さ８～15cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面・側壁は焼けて赤変しており、堆積土中には焼土と炭化物が多量に含まれる。いずれの土壙からも土師器の小破片が少量出土しているが、図示できるものはない。これらは遺構に伴う遺物が土器破片のみであり、時期を特定できないが、その特徴から土師器を焼成した遺構であるとみられる。

【IV類】

４基（第40・49・52・53号土壙）認められる。第52・53号土壙は第23号住居跡と重複しており、これよりも古い。平面形は円形を基調としているが、第40・49・52号土壙は直径70cm前後で、深さはこの順に28cm・30cm・90cm、第53号土壙は直径160cmで、深さ100cmと、規模にはやや幅がある。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がるが、第52・53号土壙は途中からやや開き気味に立ち上がり、上部の壁が崩落している可能性がある。底面はほぼ平坦である。堆積土は自然流入土で、遺物も出土していないため、その時期・性格については不明である。

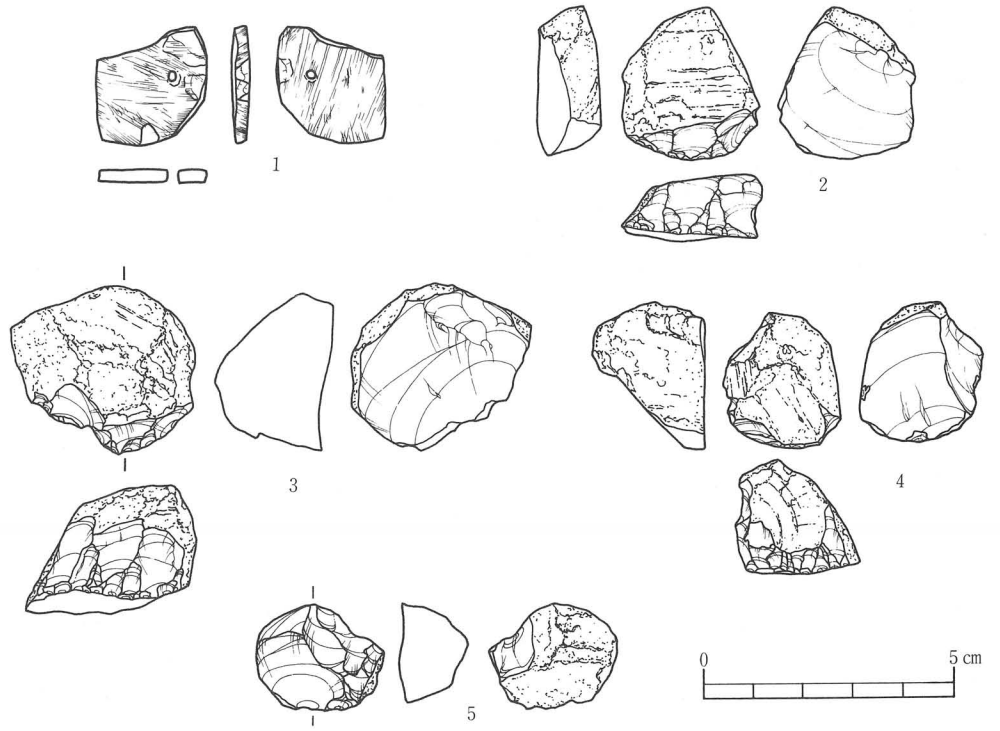
【V類】

第５号土壙のみである。第４号住居跡、第３号溝跡と重複しており、前者よりも新しく、後者よりも古い。その南半以上が調査区外へ及ぶが、不整形を呈するものと思われる。堆積土は自然流入土で、遺物も出土していないため、その時期・性格については不明である。



No.	器種	層位	調整	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	土師器坏	表土層	外：段、[段より上部]ヨコナデ [段より下部]ヘラケズリ 内：ヘラミガキ＋黒色処理、軽い段 平底風丸底	14.1	－	3.7	2／5	AⅠ	17－7
2	土師器坏	表土層	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ＋黒色処理 底：摩滅により不明	14.3	9.0	8.3	2／3	BⅢ	17－8
3	土師器小型壺	第20号住居跡堆積土中	外：[口~頸]縦方向のﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶｷ [体]横方向のﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶｷ 内：ﾍﾗﾅﾃﾞ 底：木葉痕→周縁部にﾍﾗｹｽﾞﾘ	－	4.7	－	2／3		17－9
4	かわらけ	第44号住居跡堆積土中	ロクロ調整小皿	(9.9)	5.8	1.8	3／5		17－6
No.	器種	層位	備考						図版番号
5	土玉	第25号住居跡堆積土中	最大径：3.2cm						17－10

第39図　その他の出土遺物（1）



No.	器種	層位	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考	図版番号
1	有孔円板	第20号住居跡堆積土中	粘板岩	23.5mm	21.8mm	3.2mm	複孔か？	18－6
2	スクレイパー	第25号住居跡堆積土中	黒曜石	29.4mm	26.6mm	11.3mm	素材：剥片	18－17
3	スクレイパー	第25号住居跡堆積土中	黒曜石	38.5mm	30.6mm	21.5mm	素材：石核	18－9
4	スクレイパー	第19号溝跡堆積土中	黒曜石	33.2mm	25.3mm	22.4mm	素材：石核	18－11
5	両極石核	第29号住居跡堆積土中	黒曜石	25.4mm	21.3mm	13.1mm		18－12
6	スクレイパー	第26号住居跡堆積土中	黒曜石	26.0mm	24.8mm	14.1mm	素材：剥片	18－10
7	石核	第23号住居跡確認面	黒曜石	49.6mm	28.9mm	23.3mm		18－16
8	石核	第40号土壙確認面	黒曜石	33.7mm	28.3mm	15.6mm		18－13
9	二次加工剥片	第20号住居跡堆積土中	黒曜石	44.0mm	25.9mm	18.1mm	素材：剥片	18－14
10	剥片	第20号住居跡堆積土中	黒曜石	24.7mm	29.1mm	10.0mm		18－15
11	剥片	第25号住居跡堆積土中	黒曜石	13.8mm	16.0mm	5.9mm	刃部再生剥片	18－8
12	剥片	表土層	黒曜石	25.1mm	22.0mm	10.6mm		18－18
13	剥片	第23号住居跡堆積土中	珪質頁岩	44.0mm	40.9mm	14.6mm		18－19
14	二次加工剥片	攪乱中	珪質頁岩	36.7mm	34.6mm	15.3mm	素材：剥片	18－20
15	二次加工剥片	第19号溝跡堆積土中	壁玉	31.1mm	19.2mm	7.9mm	素材：剥片	18－21
16	原石？	第44号住居跡堆積土中	玉髄	50.5mm	30.4mm	13.0mm	燧石か？	18－22
17	磨製石斧	第19号溝跡堆積土中	砂岩	56.0mm	38.1mm	26.9mm	基部のみ	18－23

第40図　その他の出土遺物（2）

4．その他の出土遺物（第39・40図）

住居跡、溝跡、土壙の堆積土中や確認面、表土層からは、土師器坏（第39図１・２）・小型壷（第39図３）、かわらけ（第39図４）、土玉（第39図５）、有孔円板（第40図１）、石器（第40図２～５）などが出土している。その特徴からみて、土師器小型壷と土玉、有孔円板は古墳時代、土師器坏２点とかわらけは古代のものと考えられる。中でもかわらけはロクロ調整の小皿で、多賀城市多賀城跡第50次調査(高野：1987)でⅡＢ類とされているものである。多賀城跡においてこのかわらけは手づくねのかわらけＩＡ類と共伴することが確認されており、同様に12世紀末の年代が与えられている。また、図示した石器は４点のみであるが、この他にも12点出土しており、その属性については第40図の遺物観察表(６～17)に合わせて示した。石器の大部分は黒曜石製石器で、石核や両極剝片を素材としたスクレイパーが多く認められるが、両極石核や石核、二次加工剝片も含まれている。なお、敲打痕が不明瞭なものの燧石の可能性がある玉髄の原石（図版18-22）や砂岩製の磨製石斧の基部（図版18-23）も出土している。

第Ⅴ章　考　　察

今回の長者原遺跡の調査では、竪穴住居跡や溝跡、土壙などの遺構が検出され、これらの遺構や表土層からは土師器、須恵器、かわらけ、丸瓦、土製品、鉄製品、石製模造品、石器などの遺物が出土している。このうち、溝跡と土壙についてはその出土遺物も含め第Ⅳ章の中で触れている。本項では、竪穴住居跡とその出土遺物を中心に考察を加えることにする。なお、第23・46・62号住居跡については遺物がほとんど出土しておらず、住居の構造も不明である。

(1)　古墳時代の竪穴住居跡と出土遺物

Ⅰ．出土遺物について

古墳時代の竪穴住居跡には第21・24・47号住居跡があり、これらから出土した遺物には土師器坏・甑、須恵器高坏、土玉、砥石、石製模造品、黒曜石製石器などがある。また、遺構には伴わないものの住居跡や溝跡、土壙の堆積土中や確認面、表土層からも土師器小型壷、石製模造品、黒曜石製石器などが出土している。

出土遺物の中心は土師器であるが、遺構に伴わないものを含めても出土量は少なく、器種構成も充たしていないことから、分類し、共伴関係を捉えて土器群を設定することは難しい。そこで、形態的特徴からこれらの遺物の年代を検討するに止めたい。

まず、第21・47号住居跡から出土した土師器坏の破片３点をみると、口縁部や胴部の形態が異なるものの、いずれも口径が大きく器高が低い。２点は半球状の胴部を持ち、口縁部が短くもしくは大きく外反している。残りの１点は他の２点と比して器高がより低いもので、口縁部が直立している。このような特徴は多賀城市山王遺跡ＳＸ230遺物包含層（吾妻他：1994）、仙台市藤田新田遺跡ＳＩ15・17・245住居跡（岩見他：1994）、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第１号住居跡（白鳥・加藤：1974）出土の資料などにみられる。また、第21号住居跡出土の土師器甑は、その破片から無底で長胴形を呈するものとみられ、藤田新田遺跡ＳＩ201住居跡出土の甑に類似している。これらの資料はそれぞれ古墳時代中期の南小泉式期（氏家：1957）に位置付けられており、本遺跡の土器群も同時期のものと考えられる。なお、遺構には伴わないものの第20号住居跡の堆積土から出土している土師器小型壷（第39図３）も形態的特徴が南小泉式期の範疇を逸脱するものではない。

次に、第21号住居跡の貯蔵穴状ピット（Ｐ２）から出土した須恵器高坏に注目したい。

坏部の一部のみが残存するもので、外面には凸線が２条巡り、波状文からなる文様帯が認められる。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部で外反する。端部は丸味を持っている。この高坏は大阪府陶邑古窯群のＴＫ23型式のものに類似することから、５世紀後葉頃のもの（田辺：1981）と考えられる。この年代は前述の南小泉式期の中に納まるものである。

さらに、第24号住居跡の出土遺物の中に石製模造品が含まれていることも注目される。宮城県内で住居跡に石製模造品が伴って出土している類例には古川市名生館遺跡ＳＩ312（白鳥・後藤：1985）、多賀城市山王遺跡２号住居跡（高倉他：1981）、仙台市南小泉遺跡第５号住居跡（佐藤：1987）、仙台市藤田新田遺跡ＳＩ16・22住居跡、亘理町宮前遺跡第25号住居跡（丹羽：1983）、大河原町台ノ山遺跡第５号住居跡（阿部・千葉：1980）、蔵王町宮城館跡住居跡（狩野：1981）などがあり、これらの住居跡は共伴する土器群から南小泉式期のものとされている。本遺跡では明確な土器との共伴関係を捉えることはできなかったものの、これに矛盾しないものと考えられる。

また、第24号住居跡の出土遺物には黒曜石製石器のスクレイパーが含まれている。黒曜石製石器については北海道系の土器である後北Ｃ$_2$－Ｄ式や北大式土器との共伴関係が指摘されている（佐藤：1984・1994等）。本遺跡からは北海道系の土器は出土していないが、東方２㎞の地点にある築館町伊治城跡ＳＤ－260・261溝（佐藤：1992）からは北大Ｉ式と塩釜式土器が共伴して出土している。北海道系の遺物については発掘調査に基づく出土例が少なく、在地の土器との併行関係や接触の在り方、社会背景などまだまだ不明瞭な点が多い。現時点ではこれらのことに考察を加えることは困難であり、今後の課題とし資料の増加を待ちたい。

Ⅱ．竪穴住居跡について

検出された古墳時代の住居跡は３軒（第21・24・47号住居跡）で、いずれもその出土遺物から古墳時代中期のものと考えられる。これらの住居跡は後世の削平により残存状況が著しく悪く、個々の属性を捉えてその構造を考察することは難しい。しかし、その分布状況をみると丘陵東端の緩やかな東斜面（調査Ⅱ区のＳ－14～26、Ｅ－40～67付近）にまとまって分布していることがわかる。また、昭和48（1973）年の調査で同時期の住居跡が検出された地点がこの場所のすぐ北側にあたることも含めて考えると、古墳時代の集落は丘陵東端の頂部から東斜面を中心に展開していた可能性が強い。

⑵ 古代の竪穴住居跡と出土遺物

Ⅰ．出土遺物について

古代の竪穴住居跡には第１・２・４・16・17・20・25・26・27・29・30・37・38・43・44号住居跡があり、これらの遺構や表土層から出土した遺物には土師器、須恵器、丸瓦、土製品、鉄製品、石器などがある。このうち出土量の大半を占めるのは土師器と須恵器で、他の遺物は少ない。以下では出土量の多い土師器、須恵器を中心に、その内容や年代について検討する。

【１】土師器の特徴と分類

土師器には坏・甕・双耳坏・鉢がある。この中で出土量が多く、分類できたのは坏・甕のみで、形態面と製作技法から検討を加え分類を行なうことにする。また、他の器種についてはその特徴を挙げるに止める。なお、分類に際しては器形、器面調整の特徴が捉えられる破片も含めて行なった。

《坏》

器形、器面調整の特徴が捉えられるのは８点である。製作に際しロクロを使用しないものとロクロを使用するものがある。器形によってさらに細分する。

A類：製作にロクロを使用しない丸底のもの。体部に段がつくもの（Ⅰ）と沈線が巡るもの（II）がある。ＡⅠ類は段から上が内弯気味に立ち上がる。器面調整は外面が口縁部から段までがヨコナデ、段から下がヘラケズリ、内面がヘラミガキ、黒色処理されている。ＡII類は底部から口縁部にかけて丸味をもって緩やかに外傾する。器面調整は外面がヘラミガキで、内面がヘラミガキ、黒色処理されている。

B類：製作にロクロを使用しない平底のもの。体部に段がつくもの（Ⅰ）と段や沈線が認められないもの（III）がある。ＢⅠ類は段から上がやや丸味をもって外傾する。器面調整は外面が口縁部から段までがヨコナデ、段から下がヘラケズリ、内面がヘラミガキ、黒色処理されている。ＢIII類は底部から口縁部にかけて直線的に外傾するか、内弯気味に立ち上がる。器面調整は外面がヘラケズリもしくはヘラミガキで、内面がヘラミガキ、黒色処理されている。

C類：製作にロクロを使用したもの。底部付近の破片資料２点のみで、摩滅が著しいため全体の器形や底部の切り離しなどは不明である。器面調整は内面がヘラミガキ、黒色処理されている。

《甕》

器形、器面調整の特徴が捉えられるのは35点である。製作に際しロクロを使用しないも

のとロクロを使用するものがある。器形によってさらに細分する。

A類：製作にロクロを使用しないもので、長胴形を呈する。出土量が最も多い。胴が長くのびるもの（Ⅰ）と胴に張りをもつもの（Ⅱ）に大別される。口縁部は外傾または外反し、頸部に段や沈線を有するものがほとんどである。法量の違いから大形のもの（a）と小形のもの（b）に分けられるが、大形のものが多い。器面調整は外面がハケメもしくはヘラケズリで、その後粗いヘラミガキが施されているものが多い。内面はハケメもしくはヘラナデである。なお、外面に粘土の二次的な貼りつけの痕跡が認められるものもある。

B類：製作にロクロを使用しないもので、球胴形を呈する。2点のみである。口縁部は外反し、頸部に軽い段がつくものもある。器面調整は外面がハケメの後粗いヘラミガキで、内面にはハケメとヘラナデが認められる。

C類：製作にロクロを使用しないもので、鉢形を呈する。7点出土している。口縁部は外傾または外反し、頸部には軽い段がつくものもある。法量の違いから大形のもの(a)と小形のもの（b）に分けられる。器面調整は外面がハケメもしくはヘラケズリで、内面がヘラナデされている。

D類：製作にロクロを使用したもので、器高が高く長胴形を呈する。4点のみである。口縁部は外反するが、端部が上方に突き出ている。器面調整はロクロ調整であるが、体部に回転ハケメもしくは外面の体下半部にヘラケズリが認められる。

E類：製作にロクロを使用したもので、器高が低く鉢形を呈する。1点のみである。口縁部は外反する。器面調整はロクロ調整で、外面の体部下端にはヘラケズリが施されている。

《双耳坏》

1点のみである。製作に際しロクロを使用しているもので、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。また、摩滅が著しいものの、耳の部分にはヘラケズリの痕跡が認められる。なお、坏底部の切り離し技法は高台部接合の際のナデと摩滅により不明である。

《鉢》

1点のみである。製作にロクロを使用しないもので、器高が低く、体部は内弯気味に立ち上がり口縁部で外反している。器面調整は内外面ともにヘラミガキが施されており、内面は黒色処理されている。

【2】須恵器の特徴と分類

須恵器には坏・高台坏・蓋・壷・甕・平瓶がある。この中で出土量が多く、分類できた

のは坏のみで、形態面と製作技法から検討を加え分類を行なうことにする。また、他の器種についてはその特徴を挙げるに止める。

《坏》

器形、器面調整の特徴が捉えられるのは9点である。法量、器形、底部の切り離し技法、再調整によって分類する。切り離し技法はヘラ切りをⅠ、回転糸切りをII、不明をIIIとする。また、再調整は回転ヘラケズリをa、手持ちヘラケズリをb、ナデをcとする。なお、体部下半から底部にかけてが残存しているもの6点のうち5点はヘラ切り後ナデ調整されており、残りの1点は回転糸切りで再調整は認められない。

A類：口径に比して底径が大きく浅い器形を呈する。体部は直線的に立ち上がる。ヘラ切りによって底部が切り離されナデ調整されるＡⅠｃ類のみである。

B類：口径に比して底径が大きく深い器形を呈する。体部は内弯気味に立ち上がる。ヘラ切りによって底部が切り離されナデ調整されるＢⅠｃ類のみである。

C類：口径に比して底径が小さく浅い器形を呈する。体部は直線的に立ち上がるものとやや内弯するものがある。体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリが施されているＣIIIａ類、ヘラ切りによって底部が切り離されナデ調整されるＣⅠｃ類がある。

D類：口径に比して底径が小さく深い器形を呈する。体部は直線的に立ち上がるものとやや内弯するものがある。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されているＤIIIｂ類、ヘラ切りによって底部が切り離されナデ調整されるＤⅠｃ類、回転糸切りによって底部が切り離されナデ調整されるＤIIｃ類がある。

《高台坏》

破片資料を含め2点出土しているが、器形の特徴が捉えられるのは1点のみである。浅い皿状のもので、外面の体部下端は回転ヘラケズリ後、高台部接合の際にナデ調整が施されている。底部の切り離しは不明である。

《蓋》

図示できたものは8点であるが、その他にも第43号住居跡の堆積土中からは小破片が多く出土している。その多くは偏平な宝珠状のつまみを有し、体部はなだらかにのびて、端部が下方へ折り曲げられ口縁部がつくり出されている。外面の天井部は回転ヘラケズリ後、つまみ接合の際にナデ調整されている。また、この内5点は意図的に周縁部が割り取られている。再利用された明確な痕跡は認められないが、つまみの中央と内面の中央に著しい摩滅が認められるものが1点（第28図4）ある。なお、第28図3・6については壷蓋の可能性がある。

《壷》

図示できたものは2点であるが、その他にも体部の破片が若干出土している。2点とも頸部より上を欠損しており、外面の体部には回転ヘラケズリやヘラケズリが認められる。

《甕》

図示できたものは2点であるが、その他にも破片が多数出土している。2点とも口頸部が大きく外反し、端部外側には口縁帯がつくり出されている。外面の体部には平行タタキメが認められる。また、破片資料には体部外面にヘラケズリが施されているものもある。

《平瓶》

1点出土している。胎土が良好で、器面に黒色の粒子が認められることから高温で焼成されたものとみられる。また、外面の体部下端や内面の頸部には軽いヘラケズリが施されている。

【3】出土土器の組合せと年代について

前項のように出土土器は分類された。ここでは住居跡での出土状況を踏まえて、住居に伴うと考えられる遺物を対象にその組合せを考察し、編年的な位置付けを試みたい。

対象となる土器には、土師器坏・双耳坏・鉢・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・壷・甕がある。分類を行なった土師器坏・甕、須恵器坏を中心に考えてみたい（第3表）。

まず、土師器坏は遺構に伴う遺物が少ないものの、製作に際しロクロを使用したものと使用しないものの2群に分けられる。ロクロを使用していないA・B類では、第20号住居跡においてAII類とBI類の共伴が認められるが、ロクロを使用しているC類では、他類との共伴関係は認められない。なお、AI類は住居跡からは出土していない。

次に、出土量の最も多い土師器甕では、ロクロを使用したD・E類が第43号住居跡において共伴しており、第29・37・43・44号住居跡の出土状況からロクロを使用しないAIa・

分類 / 住居跡	土師器坏					土師器甕									須恵器坏							須恵器甕
	AI	AII	BI	BIII	C	AIa	AIb	AIIa	AIIb	B	Ca	Cb	D	EI	AIc	BIIIc	CIa	CIIIc	DIIIb	Dc	Dc	
第1号住居跡																						
第2号住居跡				1																		○
第4号住居跡						2	1	1														
第16号住居跡																						
第17号住居跡																						
第20号住居跡		1	1			2	1	1	2	2	2					1						
第25号住居跡						2						1										
第26号住居跡																						○
第27号住居跡						1														1		
第29号住居跡						2					2	1	1		1		1					
第30号住居跡																						
第37号住居跡						1					1		1					1				○
第38号住居跡																		1				
第43号住居跡						3							1	1					1		1	○
第44号住居跡					2	1		1					1					1				

第3表　古代住居跡での各類の出土状況

AII a・C a・C b類とも共伴関係にあることがわかる。また、第20・25号住居跡の出土状況からロクロを使用しないものについてはA I a・A I b・AII a・AII b・B・C a・C b類すべての組合せが成立する。つまり、製作に際してのロクロ使用の有無が組み合わせ上の大きな要素とみられる。

須恵器坏については、その共伴関係から組合せの特徴を抽出できなかった。

以上のように組み合わせ関係を検討すると、大別が可能な基準は土師器坏・甕の製作に際してのロクロ使用の有無に見出せる。なお、第44号住居跡の出土状況から坏・甕において製作にロクロを使用するものは共伴関係にある。これをもとに他の土器との関係を含め、大きく2つにグループ分けを行ない、それぞれ第I群土器・第II群土器とした。

第I群土器……第20号住居跡出土の資料である。土師器は坏AII・B I類、甕A I a・A I b・AII a・AII b・B・C a類、須恵器は坏B I c類、高台坏、甕などがある。

第II群土器……第29・37・43・44号住居跡出土の資料である。土師器は坏C類、甕A I a・AII a・C a・C b・D・E類、双耳坏、須恵器は坏A I c・CIII a・C I c・DIII b・DII c類、高台坏、蓋、壷、甕などがある。

ここで、組成を欠くためにその出土遺物からは第I・II群土器のいずれにも位置付けることのできないものに第1・2・4・16・17・25・26・27・30・38号住居跡がある。これらの中で、第4号住居跡については土師器甕にA I b類があり、甕の出土量が比較的多いのにロクロ調整のものが含まれていないことや、須恵器の出土量が少ないことから第I群土器に含まれる可能性がある。しかし、住居の大部分が調査区外にあたりその土器組成の全容が明らかでないことに問題が残る。また、第2・26号住居跡からは意図的に周縁部が割り取られた須恵器蓋が出土しており、これは第II群土器の特徴の一つである。しかし、他の遺物がほとんど認められず、主体となる組成を欠くことから第II群土器に含むことは難しい。

次に、これら各土器群の特徴と年代について考えてみたい。なお、遺構の重複関係からは第I・II群土器の前後関係や上下限、各土器群内での変遷を捉えることはできない。

[第I群土器]

1軒のみであるが、遺物の出土量が多く、その組成を窺うには十分である。

土師器をみると、坏は出土量が少ないものの、製作に際しロクロを使用しないもので、丸底（A類）・平底（B類）の両者があり、体部には段もしくは沈線が巡っている。器面調整は外面にヘラミガキまたはヘラケズリ（段以下）が施されており、内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理されている。甕は出土量が多く、いずれも製作にロクロを使用しないも

ので、長胴形（A類）・球胴形（B類）・鉢形（C類）の各類がある。主体は長胴形の甕で、頸部に段や沈線を有するものがほとんどである。なお、各類には大形のものと小形のものが認められ、その多様性が窺われる。

須恵器についてみると、坏は1点のみであるがヘラ切りによって底部が切り離されナデ調整されている。また、高台坏や甕も組成を構成する要素として存在している。土師器に比して須恵器の出土量が少ない。

このような特徴をもつ土器群を出土した例としては、志波姫町糠塚遺跡第16号住居跡（小井川・手塚：1978）、志波姫町御駒堂遺跡第22号住居跡（小井川・小川：1982）などがある。ただし、本土器群では土師器に比して須恵器の出土量が相対的に少なく、その組成においても蓋や鉢などを欠く点にこれらの土器群との相違が認められる。

糠塚遺跡では第16号住居跡出土資料を含む第1群土器を東北地方南部の編年の国分寺下層式（氏家：1957）に比定し、8世紀後半の年代を与えていることから、第Ⅰ群土器の年代についても同様に8世紀後半と考えられる。

なお、第Ⅰ群土器の特徴であるロクロを使用しない有段丸底の土師器坏は岩手県水沢市胆沢城跡ＳⅠ471住居跡（水沢市教育委員会：1980）からも出土しており、これを含む土器群は胆沢城跡創建期（802年）に位置付けられている。よって、第Ⅰ群土器の下限は9世紀初頭頃まで下る可能性が残る。

［第Ⅱ群土器］

第29・37・43・44号住居跡出土の土器がこれにあたる。第29・37・44号住居跡では遺物の出土量が少なく断片的な資料である。第44号住居跡では遺物量は多いものの、その組成において土師器坏を欠いている。よって、これらの住居跡の出土遺物を合わせて、本土器群の特徴を見出さざるをえない。

土師器をみると、坏は破片資料2点のみであるが、いずれも製作に際しロクロを使用しており、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。甕は製作にロクロを使用するものと使用しないものの両者が認められる。ロクロを使用するものには長胴形（D類）・鉢形（E類）のものがあり、体部外面には回転ハケメやヘラケズリがみられる。長胴形のものが大形、鉢形のものが小形の傾向にある。また、ロクロを使用しないものには長胴形（A類）・鉢形（C類）の両類があり、球胴形（B類）のものは認められない。なお、長胴形のものは大形のものに限られる。その他に、ロクロ調整で内面がヘラミガキ、黒色処理された双耳坏も組成に含まれる。

須恵器についてみると、坏は皿状のものと椀状のものがあり、その大部分がヘラ切りによって底部が切り離されナデ調整されている。椀状のものの中には回転糸切りによって切

り離されナデ調整されているものもある。また、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施されているものも少量であるが認められる。その他に、蓋・壷・甕も組成を構成する要素として存在しており、中でも蓋の多くは意図的に周縁部が割り取られており、再利用されていた可能性がある。第Ⅰ群土器に比べ、組成において須恵器の占める割合が大きくなっており、第Ⅱ群土器の段階では須恵器の生産地である窯跡との流通の構造が確立していたことが窺われる。

周辺地域の諸遺跡において、この土器群と同様の特徴を持つまとまった出土例は認められない。しかし、この土器群の最大の特徴は土師器の製作に際しロクロが使用されていることにある。このような特徴を持つ土師器は東北地方南部の土師器編年案の表杉ノ入式(氏家：1957）に比定される。表杉ノ入式期はほぼ平安時代全般に対応するものと考えられており、宮城県内の集落遺跡におけるその最も古い段階のものの一つとして色麻町上新田遺跡第1・8号住居跡出土の土器群が挙げられる（小井川：1981)。この土器群には9世紀初頭頃の年代が与えられている（加藤：1993）ことから、第Ⅱ群土器は9世紀初頭以降のものと考えられる。

Ⅱ．竪穴住居跡について

検出された古代の住居跡は15軒ある。遺物量の少ないものが多く、その出土土器の帰属土器群が明らかなものは5軒のみで、第Ⅰ群土器の段階（第Ⅰ期）に属するのは第20号住居跡、第Ⅱ群土器の段階（第Ⅱ期）に属するのは第29・37・43・44号住居跡となる。これ以外の住居跡については帰属土器群が不明なものの、住居の構造や出土遺物から判断すると第Ⅰ・Ⅱ期の範疇に納まるものと考えられる。

個々の属性に関しては第4表に示した通りである。住居跡の分布状況をみると丘陵東端部の南斜面から東斜面にある調査区全体に偏りなく分布している。第Ⅱ期に属するものが調査Ⅱ区の西寄りにまとまる傾向はみられるが、その方向に斉一性は認められない。平面

遺構番号	平面形	規模(m)東西×南北	焼失	床	主柱穴・柱の形	壁柱穴	周溝(壁材の痕跡)	溝(材の痕跡)	カマドの形態・位置	煙道（傾斜）	貯蔵穴状ピット
第1号住居跡	方形基調	5.2×3.3以上		掘り方埋め土	(2個)・円形		壁の直下を巡る(有)	2条（有）	不明		
第2号住居跡	正方形	3.8×4.1		掘り方埋め土	無		全周（有）		壁に本体付く・東辺と北辺	（水平）・（水平）	2個
第4号住居跡	方形基調	3.2以上×0.9以上	○	地山	不明		東壁の直下（?）		壁に本体付く?・北辺	トンネル状（上向き）	
第16号住居跡	方形基調	4.2×0.6以上		地山	不明		壁の直下を巡る(?)		壁に本体付く・北辺	（下向き）	
第17号住居跡	方形基調	2.6以上×0.4以上		地山	不明		北東隅の壁直下(?)		?・北辺	トンネル状（水平）	
第20号住居跡	正方形	5.4×5.3	○	掘り方埋め土	4個・隅丸長方形		無（有）	無（1条）	壁に本体付く・北辺	（水平）	
第25号住居跡	正方形	3.9×3.8		掘り方埋め土	無		壁の直下を巡る(無)		壁に本体付く・北辺	トンネル状（下向き）	3個
第26号住居跡	方形基調	3.3×2.4以上	○	掘り方埋め土	不明		無（有）		不明		
第27号住居跡	正方形	3.4×3.4		掘り方埋め土	無		北壁・西壁（有）		壁に本体付く・北辺に2つ	（上向き）・（水平）	1個
第29号住居跡	方形基調	5.1×2.4以上	○	地山・掘り方埋め土	(2個)・隅丸長方形		壁の直下を巡る(?)	2条（有）	壁に本体付く・北辺	トンネル状（下向き）	
第30号住居跡	方形基調	2.5以上×1.0以上		掘り方埋め土	不明	(2個?)	壁の直下を巡る(有)		不明		
第37号住居跡	方形基調	5.0×2.9以上		地山	(2個)・隅丸長方形		壁の直下を巡る(有)	2条（無）	壁に本体付く・東辺	（上向き）	3個
第38号住居跡	正方形	4.0×4.1		掘り方埋め土	無		全周（有）	1条（無）	?・北辺と東辺	（下向き）・（下向き）	2個
第43号住居跡	正方形	5.8×6.3		地山・掘り方埋め土	(4個)・円形	12個	ほぼ全周（有）		壁に本体付く・北辺に2つ	（下向き）・（水平）	4個
第44号住居跡	正方形	4.0×4.0		掘り方埋め土	2個・円形	7個	全周（有）		壁に本体付く・北辺	（上向き）	1個

第4表　古代住居跡一覧表

形態はすべて方形を基調としており、明確に平面形態が把握できるものはいずれも正方形を呈している。規模は一辺が6.0m前後のものもあるが、4.0～5.0mのものが多く、一定の規模にまとまる傾向がある。また、中には焼失住居が4軒あり、これらの住居の堆積土をみると床面直上に炭化材と混じるかたちで焼土や地山のブロックが認められるのが特徴である。床は掘り方埋め土もしくは地山を床面としており、主柱穴・壁柱穴が検出されたものもある。主柱穴を持つものの中にはその柱痕跡の平面形が隅丸長方形を呈するもの（第20・29・37号住居跡）があり、この住居では断面長方形の木材を柱に使っていたと考えられる。このような類例は田尻町金鋳神遺跡10号住居跡（小村田・窪田：1992）などにもみられる。周溝の保有率は高く、全周するものが多い。周溝を保有する場合、多くは壁際に沿って壁材の痕跡が認められる。なお、周溝を保有しない住居跡で壁材の痕跡が認められる場合もあるが、これは構築工程の差異によるものと考えられる。カマドは大部分が北辺に付設されており、その方向に強い斉一性が窺われる。

今回検出された住居跡についてその特徴をまとめると以上のようになる。これらのことがどのような意味を持つかについては、限られた範囲の調査であることもあり、現時点で考察を加えることは難しい。また、住居の構造を各属性ごとにみてもこの2時期の間に顕著な相違は見出せず、重複関係が認められるのは第43号住居跡と第46号住居跡のみで、その重複関係から各期内での変遷を捉えることもできない。これらのことは第Ⅰ期の土器群を8世紀後半、第Ⅱ期の土器群を9世紀初頭以降のものとして大きく捉えているものの、両グループが短い時間幅の中で変遷する可能性を示しているとも考えられる。よって、これらの住居跡が9世紀を前後する短い時間幅の中で展開していた可能性も指摘しておきたい。

第Ⅵ章　ま　と　め

1．今回の調査によって発見された遺構は、竪穴住居跡21軒、溝跡3条、土壙33基である。これらの遺構の中心は住居跡で、古墳時代と古代のものがある。

2．古墳時代の住居跡3軒は、その出土遺物からいずれも中期（南小泉式期）のものと考えられる。残存状況が悪くその構造については不明であるが、丘陵東端の頂部から緩やかに傾斜する東斜面にかけてまとまって分布しており、この部分を中心に集落が形成されていたことが窺われる。また、出土遺物の中に北海道系の遺物である黒曜石製石器が含まれていることも、北の文化との接触の在り方を考える上で注目される。

3．古代の住居跡15軒は、その出土遺物から2時期に大別される。第Ⅰ期は8世紀後半、第Ⅱ期は9世紀初頭以降のものと考えられるが、住居の構造上に顕著な変化は見出せなかった。また、これらの住居跡は調査区全体に偏りなく分布しており、調査区外への広がりも予想されることから、丘陵の東端部全体に同時期の集落が展開していた可能性がある。

4．第19号溝跡は丘陵東端の頂部と東斜面を取り囲むように「L」字状に延びており、館跡もしくは屋敷跡に伴う堀跡の可能性がある。この溝跡の堆積土からは12世紀末のものと考えられる手づくねのかわらけが出土しており、遺構の年代も同時期まで遡る可能性がある。

5．土壙の多くは遺物が出土していないものの、その形態的特徴から縄文時代の陥し穴と考えられ、周辺に縄文時代の集落の存在が予想される。

引用・参考文献

吾妻・菅原（1994）：「山王遺跡」　『宮城県文化財調査報告書』第161集

阿部義平（1994）：「森ヶ沢遺跡を巡る諸問題」　『北日本続縄文文化の実像－古代蝦夷の成立と展開に関する諸問題－』　縄文文化検討会

阿部・千葉（1980）：「台ノ山遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」　『宮城県文化財調査報告書』第62集

阿部・岩見他（1991）：「新峯崎遺跡」　『宮城県村田町文化財調査報告書』第9集

石岡憲雄（1991）：「「Tピット」について（再論）」　『埼玉考古学論集』

伊東信雄（1957）：「古代史」　『宮城県史』第1巻

伊東信雄編（1981）：「資料集Ⅴ　考古資料」　『宮城県史』第34巻

今村啓爾（1983）：「陥穴（おとし穴）」　『縄文文化の研究』2　雄山閣

岩手県水沢市教育委員会（1980）：『胆沢城跡－昭和54年度発掘調査概報－』

岩見和泰他（1994）：「藤田新田遺跡」　『宮城県文化財調査報告書』第163集

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」　『歴史』第14輯　東北史学会

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」　『考古学論叢Ⅱ』　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

加藤道男（1993）：「宮城県の土器様相」　『北日本における律令期の土器様相』

狩野正昭（1981）：「宮城館跡」　『宮城県文化財調査報告書』第79集

菊地逸夫（1991）：「伊治城跡」　『築館町文化財調査報告書』第4集

栗駒町（1963）：『栗駒町史』

小井川・手塚（1978）：「糠塚遺跡－宮城県文化財調査略報（昭和52年度分）」　『宮城県文化財調査報告書』第53集

小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」　『宮城県文化財調査報告書』第78集

小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」　『宮城県文化財調査報告書』第

83集
小井川・高橋（1977）：「宮城県対馬遺跡出土の土器」　『宮城史学』第５号
小村田・窪田（1992）：「金鋳神遺跡」　『宮城県文化財調査報告書』第150集
金野・佐藤（1973）：「栗駒町長者原遺跡発掘調査概報」　『栗原郷土研究』５
佐藤信行（1984）：「宮城県内の北海道系の遺物」　『宮城の研究』１　清文堂
佐藤信行（1994）：「東北地方南部の続縄文文化と研究史」　『北日本続縄文文化の実像－古代蝦夷の成立と展開に関する諸問題－』　縄文文化検討会
佐藤則之（1992）：「伊治城跡－第18次調査」　『築館町文化財調査報告書』第５集
佐藤　洋（1987）：「南小泉遺跡第14次発掘調査報告書」　『仙台市文化財調査報告書』第109集
柴桃正隆（1973）：『仙台領内古城・館』２
白鳥・加藤（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」　『宮城県文化財調査報告書』第35集
白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」　『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥・後藤（1985）：「名生館遺跡Ⅴ」　『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第10冊
白鳥・古川（1991）：「２土師器の編年　８東北」　『古墳時代の研究』６　雄山閣
鈴木・高橋（1990）：「名生館官衙遺跡Ⅺ」　『古川市文化財調査報告書』第10集
高倉敏明他（1981）：「山王・高崎遺跡発掘調査概報」　『多賀城市文化財調査報告書』第２集
高野芳宏（1987）：「多賀城跡第50次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1987
高橋信雄（1982）：「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比」　『北奥古代文化』第13号
高橋・高橋（1991）：「北海道の続縄文文化と東北」　『北からの視点』　日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集
田辺昭三（1966）：『陶邑古窯跡群』　平安学園考古学研究クラブ
田辺昭三（1981）：『須恵器大成』
東北学院大学考古学研究部（1972）：「鳥矢崎古墳群発掘調査概報」　『温故』７
丹羽　茂（1983）：「宮前遺跡」　『宮城県文化財調査報告書』第96集
藤沼・神宮寺（1992）：「宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心にして－」『東北歴史資料館研究紀要』第18巻
森　貢喜（1983）：「佐内屋敷遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」　『宮城県文化財調査報告書』第93集
柳沢和明（1993）：「多賀城跡第62次調査」　『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1992
吉田雅之（1990）：「花山寺跡」　『宮城県文化財調査報告書』第137集
　　（1776）：「安永風土記」　『宮城県史』第25巻

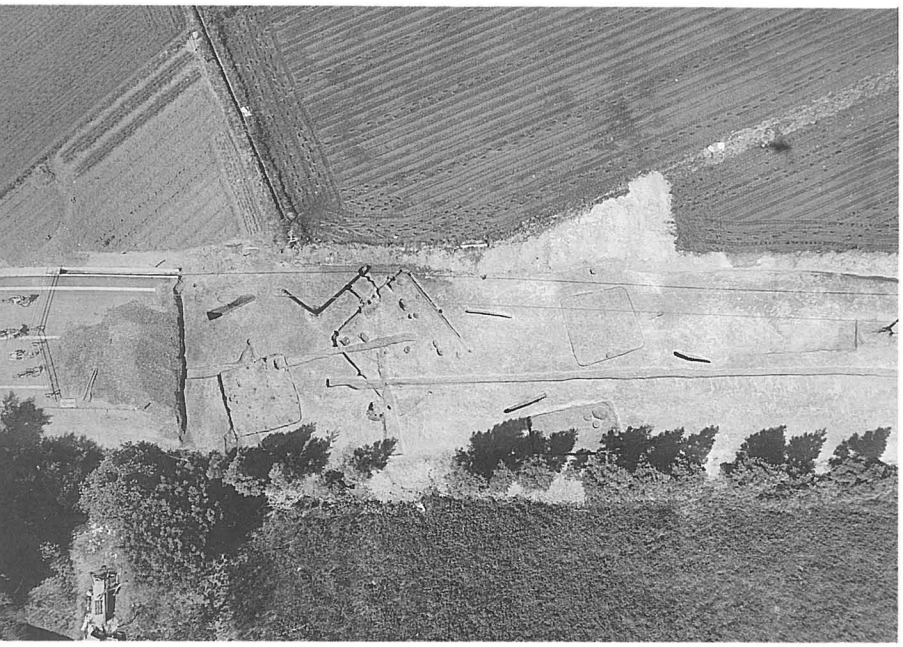
写　真　図　版

遺跡遠景
（東から）

調査区全景

図版 1

調査Ⅰ区
（西から）



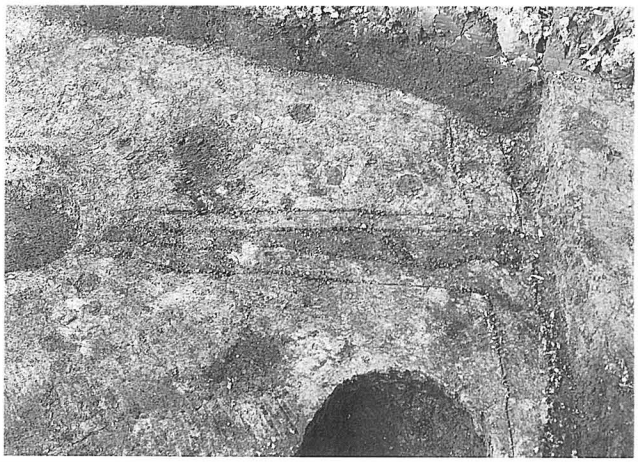
調査Ⅱ区西寄り

調査Ⅱ区中央

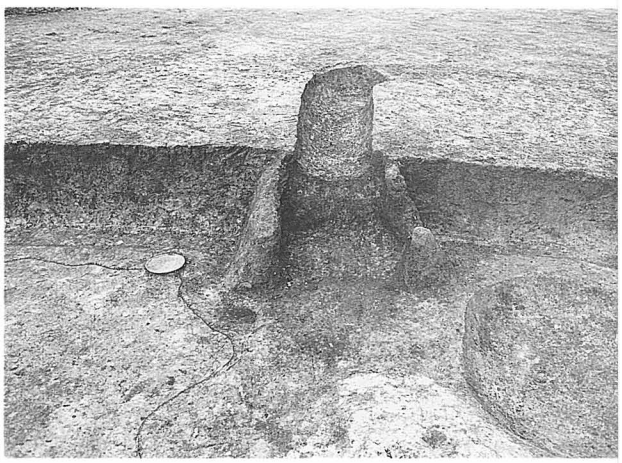
図版 2

調査II区東寄り

第１号住居跡
（南から）

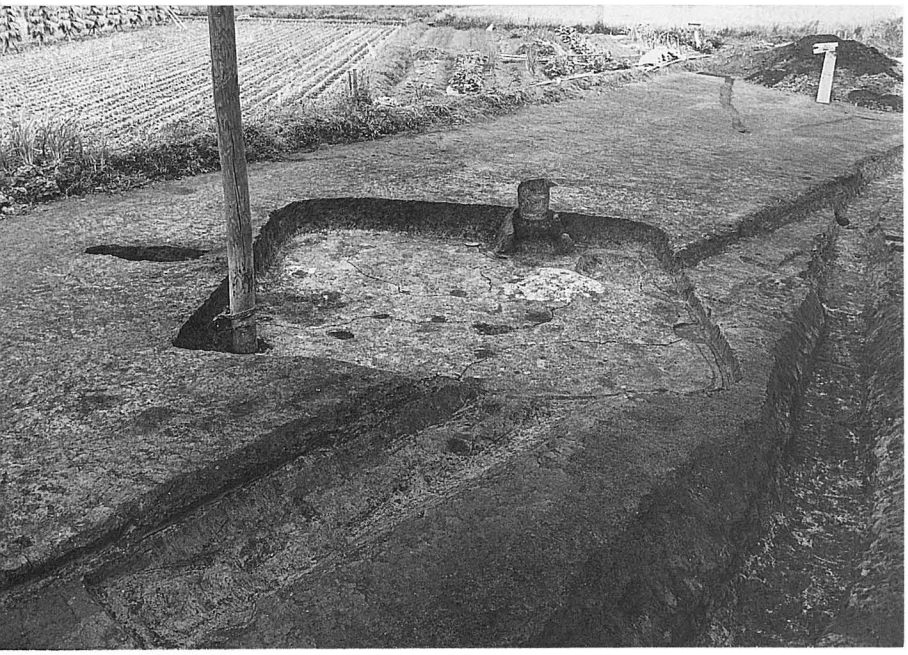


第１号住居跡周溝・Ｍ１と壁材・材の痕跡

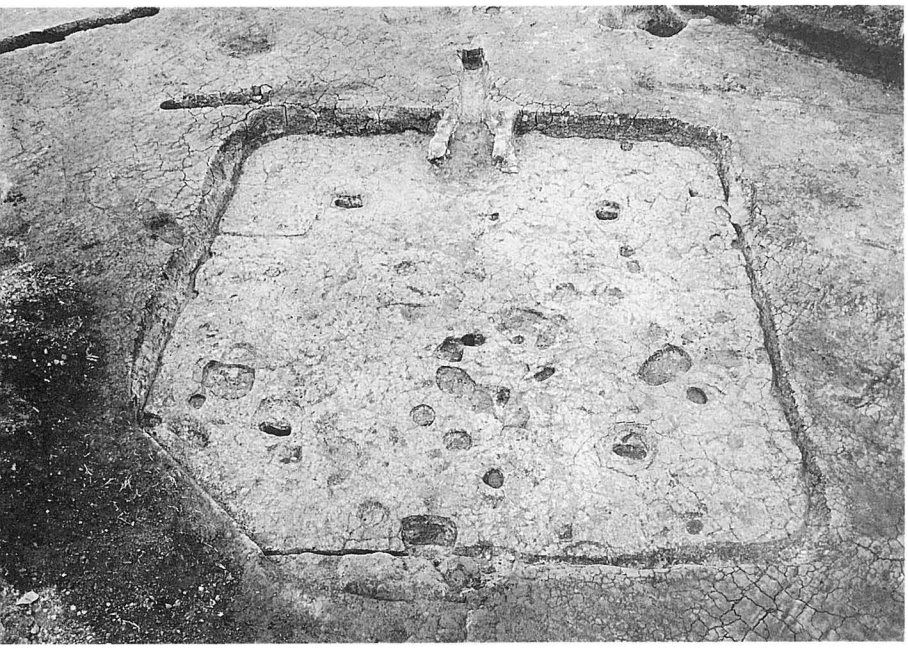


第２号住居跡カマド（新）

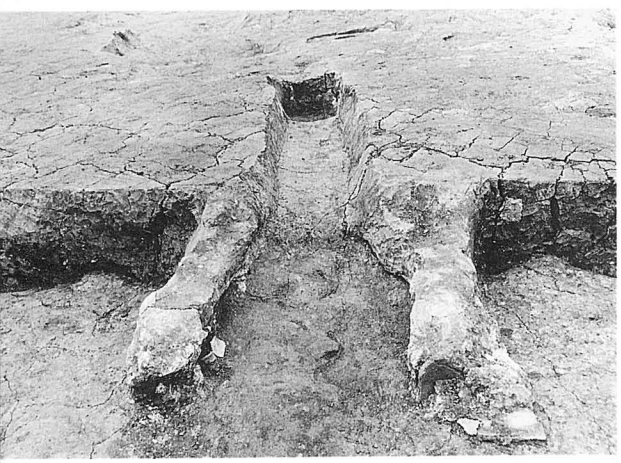
図版３



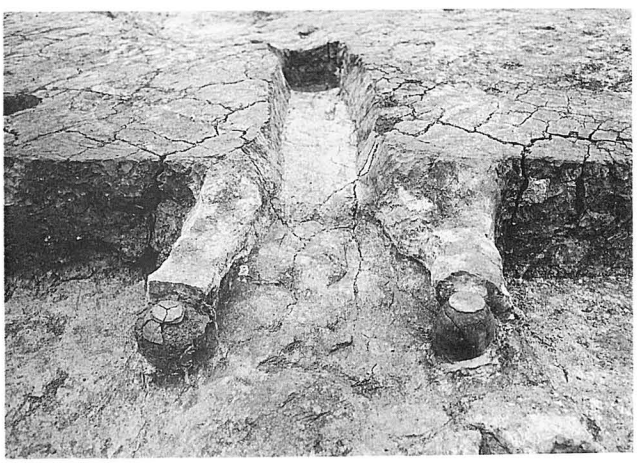
第 2 号住居跡
（西から）



第20号住居跡
（南から）

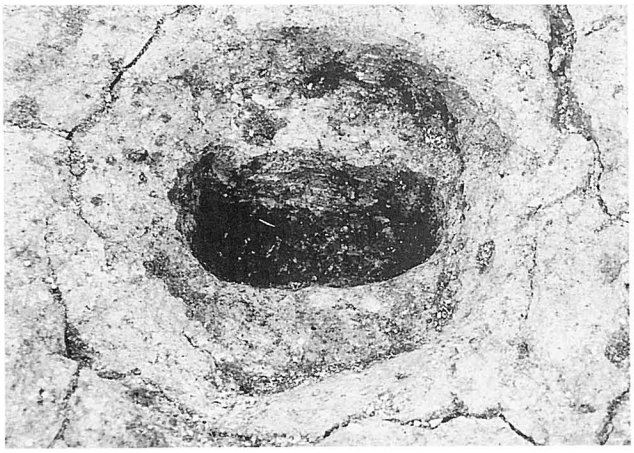


第20号住居跡カマド

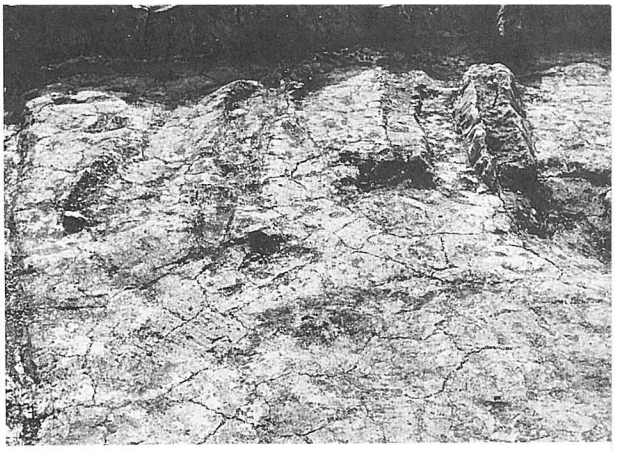


第20号住居跡カマド焚き口部に据えられた土師器甕

図版 4



第20号住居跡Ｐ 1

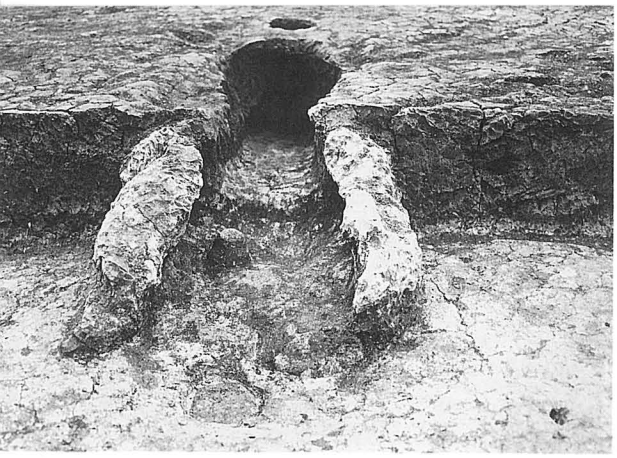


第20号住居跡床面上の炭化材（住居北西部分）

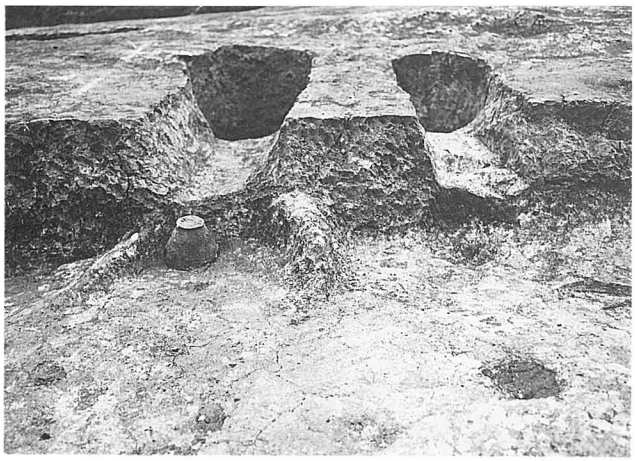
第21号住居跡Ｐ 2

第25号住居跡

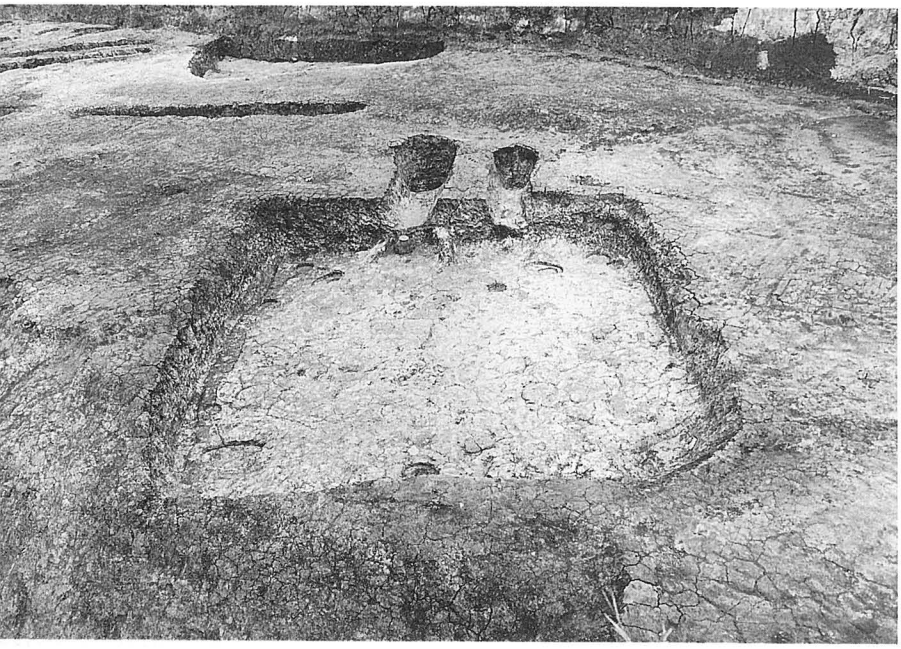
図版 5



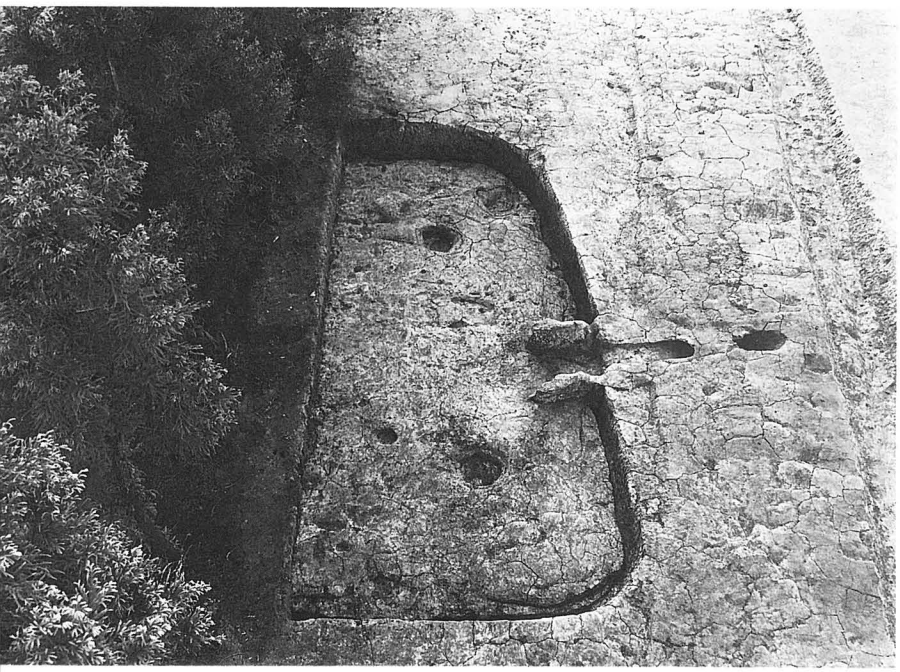
第25号住居跡カマド



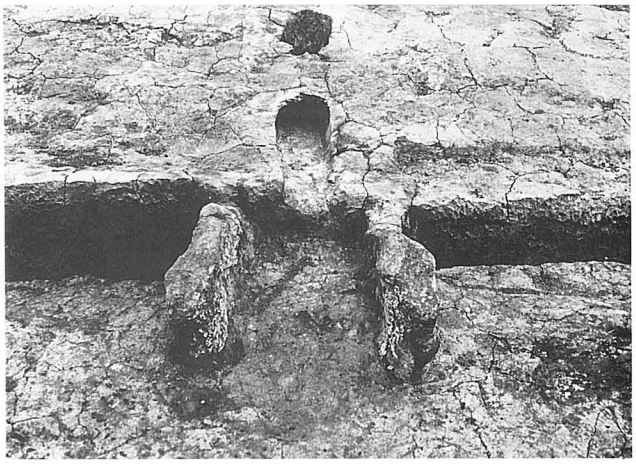
第27号住居跡カマド



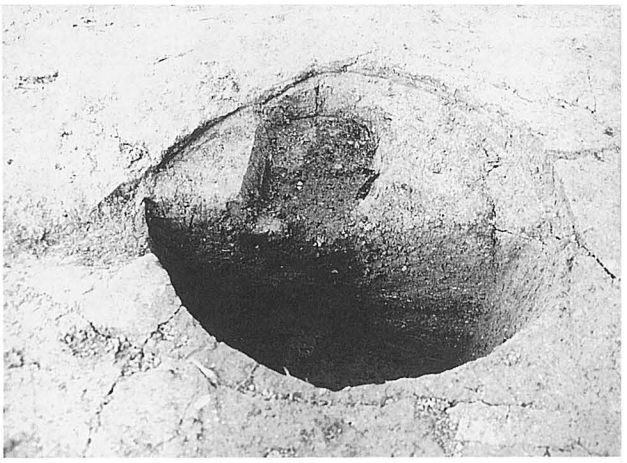
第27号住居跡
（南から）



第29号住居跡
（東から）



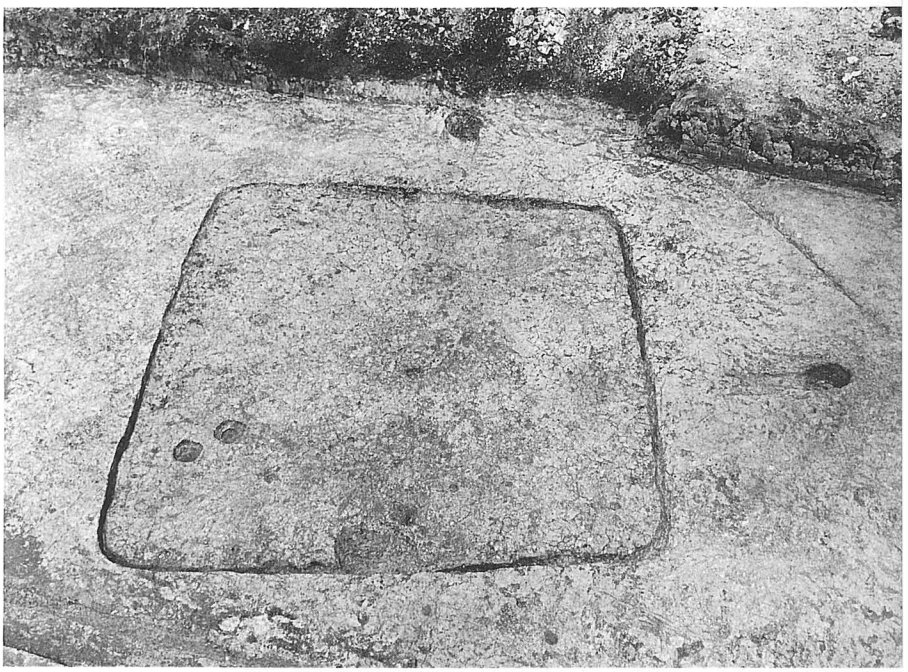
第29号住居跡カマド



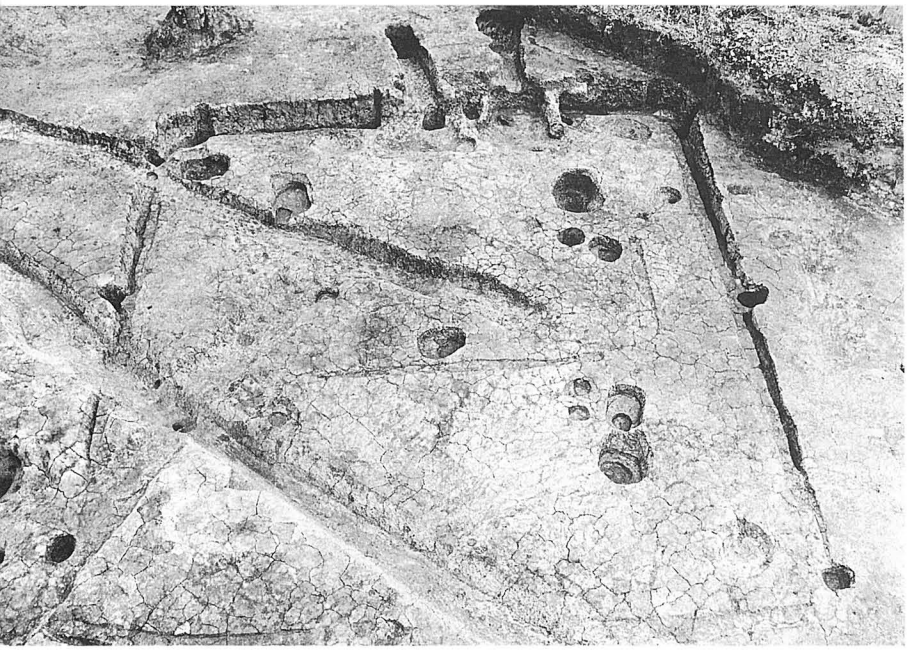
第29号住居跡Ｐ１

第37号住居跡

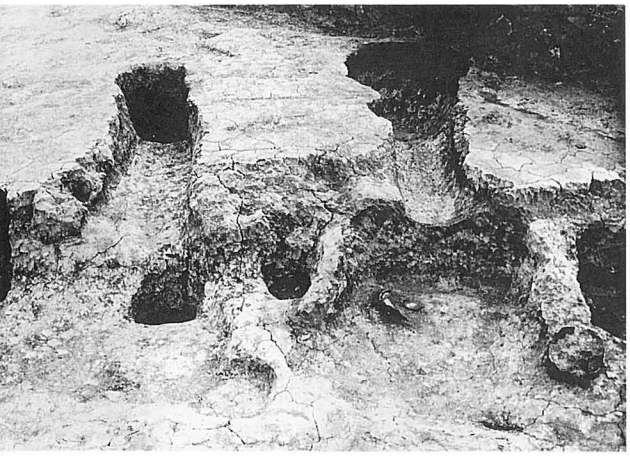
第38号住居跡



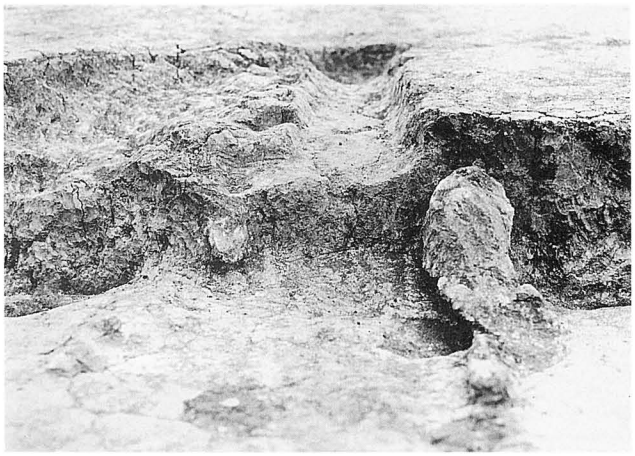
図版７



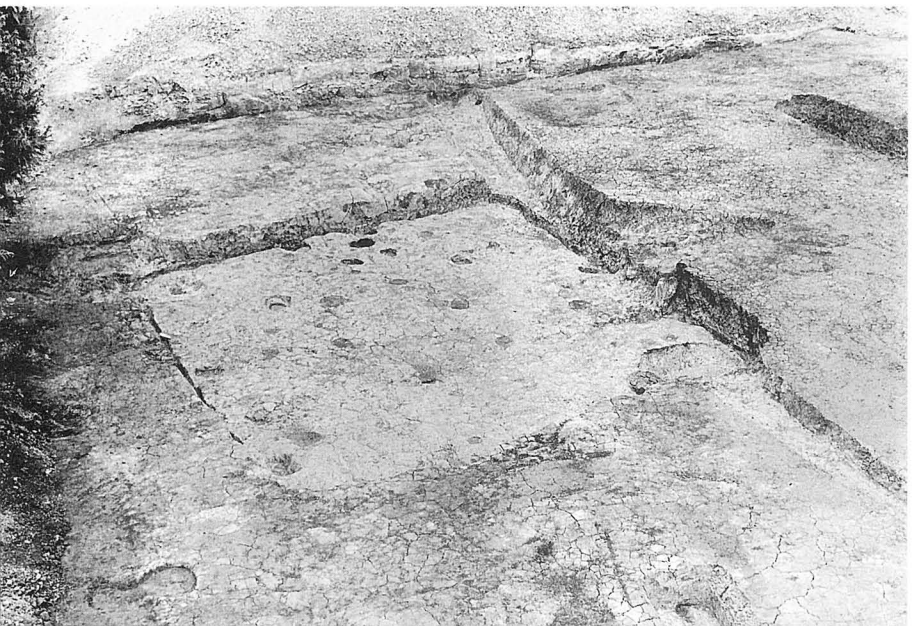
第43・46号住居跡
（南から）



第43号住居跡カマド



第44号住居跡カマド



第44号住居跡
（東から）

第47号住居跡
（掘り方埋め土除去後、西から）

第18号溝跡（東から）

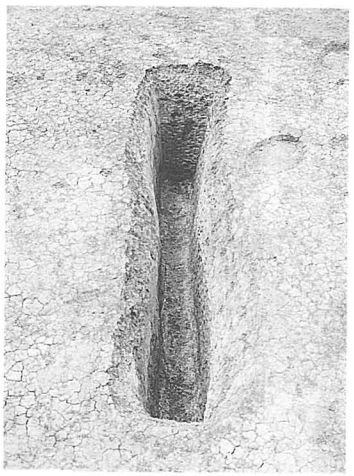
第18号溝跡（西から）

図版 9

第19号溝跡
（南から）

第19号溝跡断面
（Ｂ地点、東から）

第51号土壙（北から）

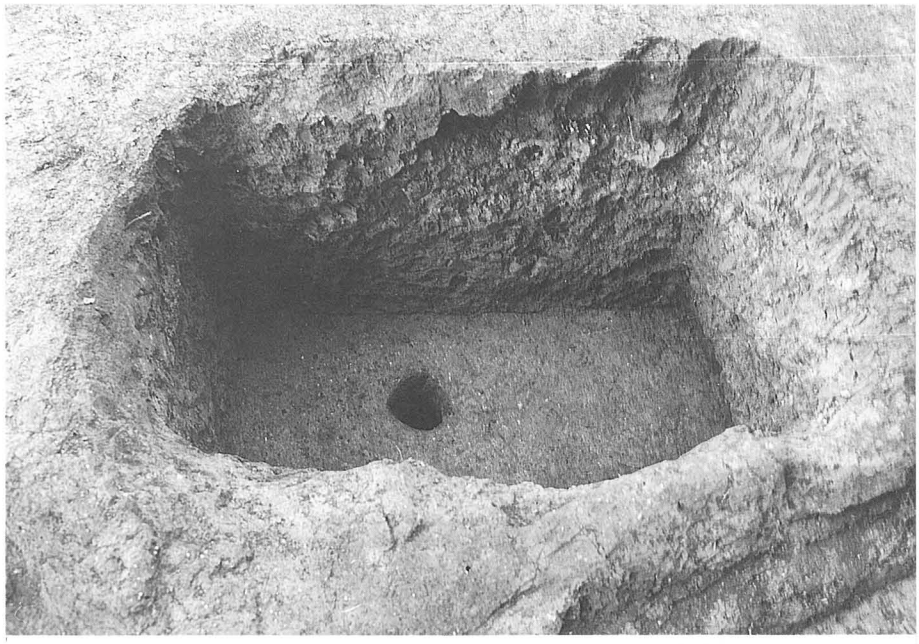


第56号土壙（東から）

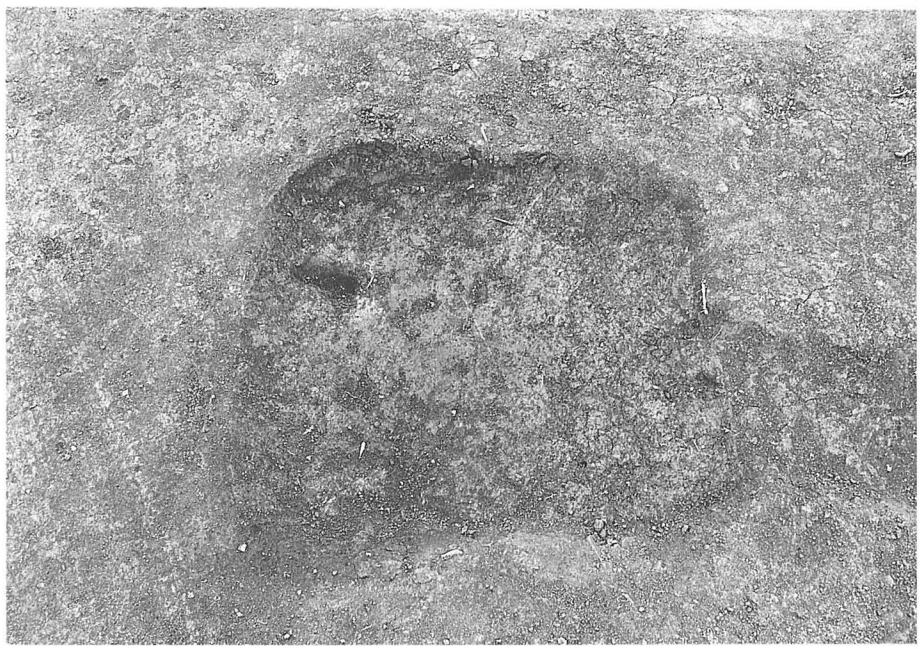
第61号土壙（東から）

図版10

第12号土壙
（南から）



第 8 号土壙
（北から）



第53号土壙
（北から）

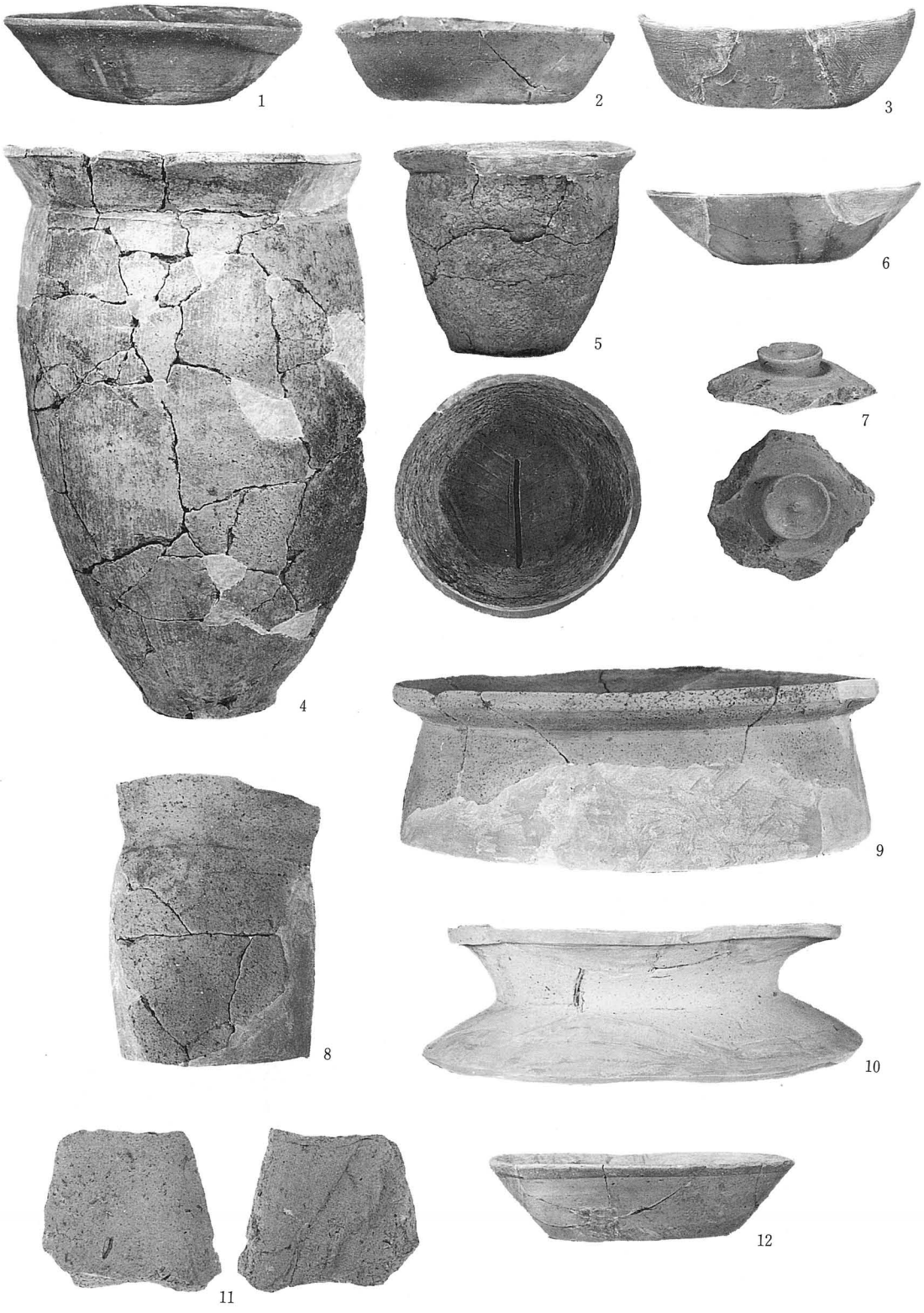
図版11

図版12　第2・4・17・21・25・26号住居跡出土遺物

1～3	2住	8・9	25住
4～6	4住	10	21住
7	17住	11	26住

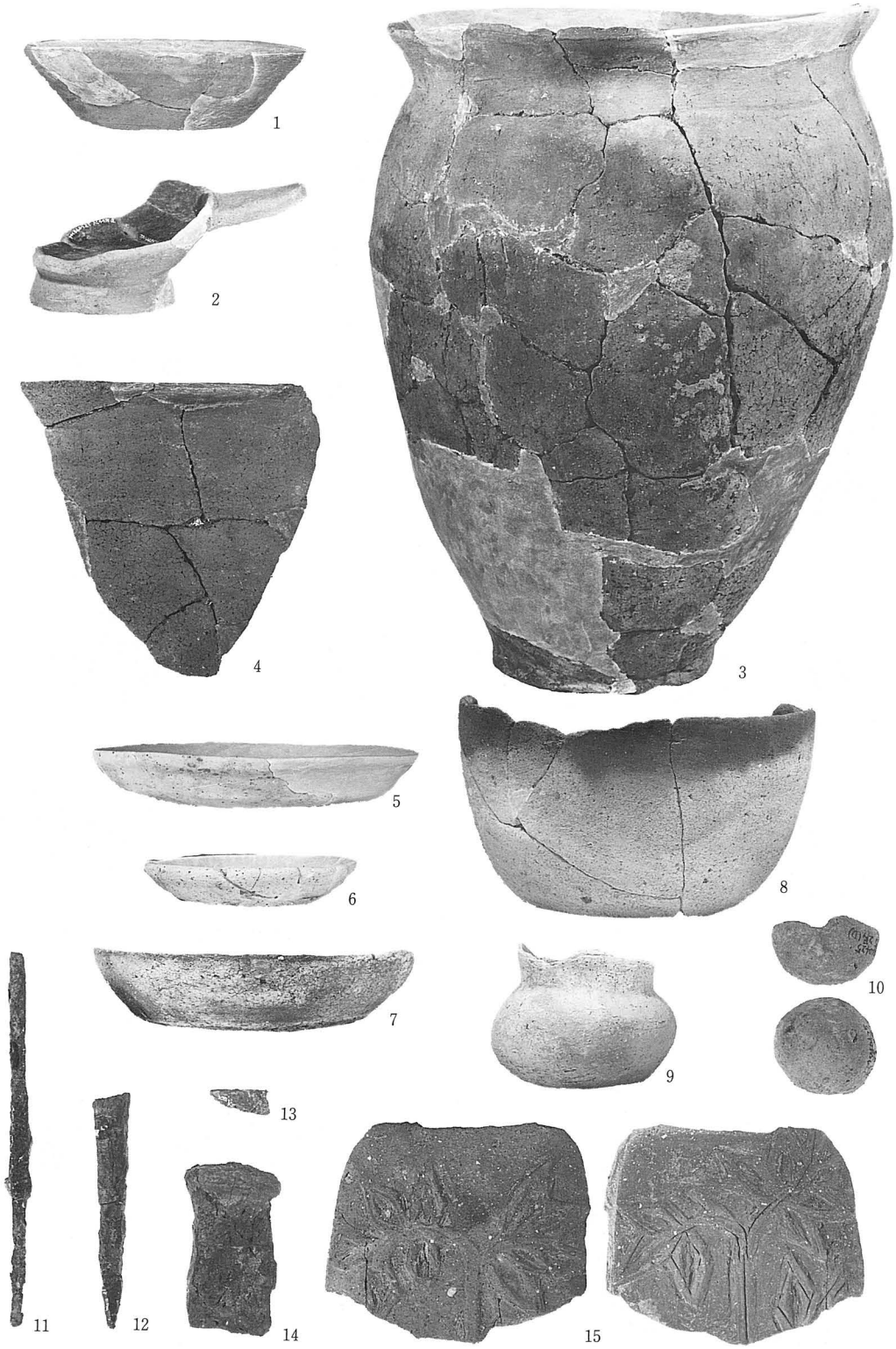
図版13　第20号住居跡出土遺物

図版14　第20・27号住居跡出土遺物　　1～6　20住
7・8　27住



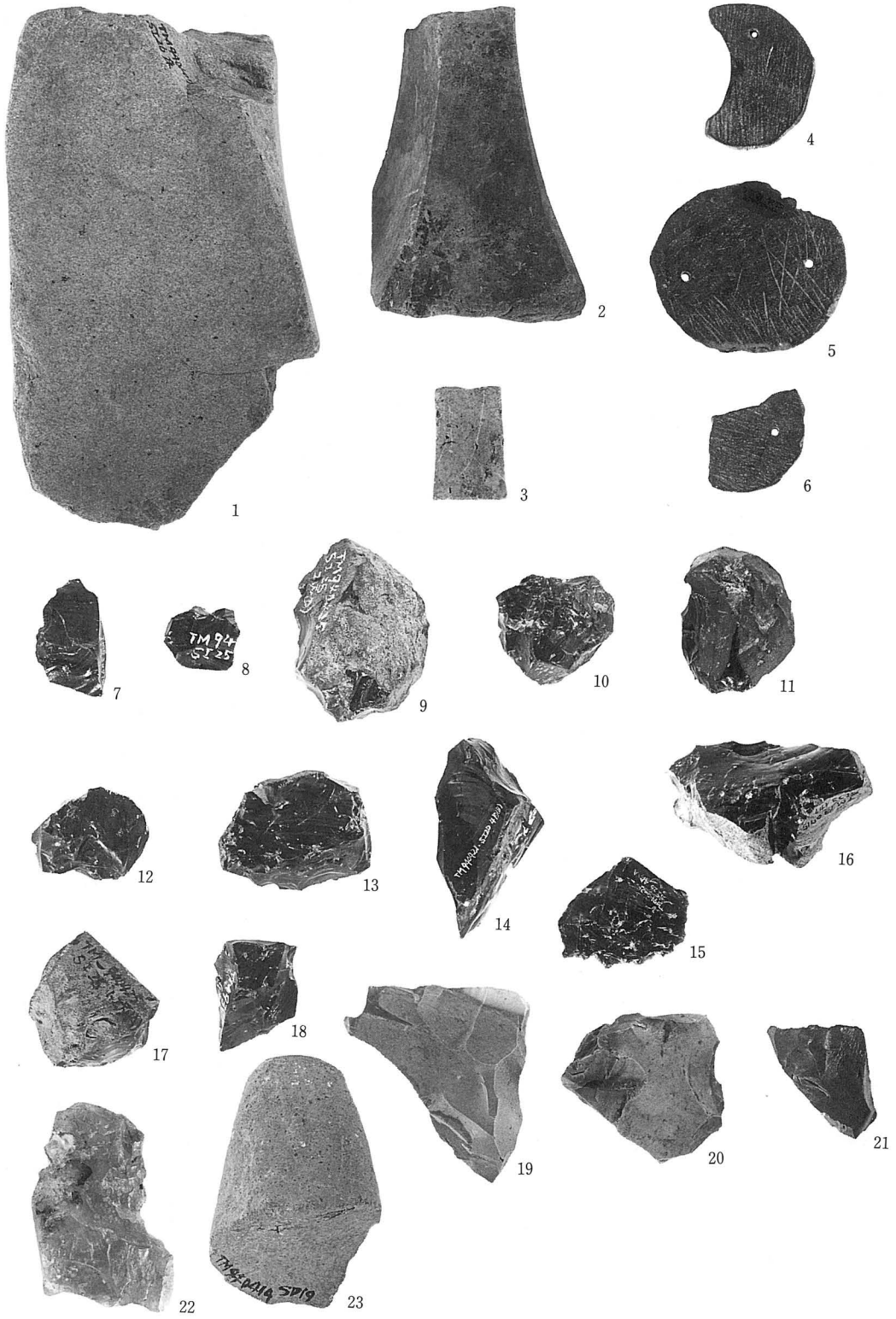
図版15　第29・37・38号住居跡出土遺物　　1～5　29住
6～11　37住
12　38住

図版16　第43号住居跡出土遺物



図版17　第２・20・38・43・44号住居跡、第19号溝跡、その他の出土遺物

1～4・13　44住　　11　2住　　15　20住
5　19溝　　12　43住
6～10　その他　14　38住



図版18　第21・24・26・29号住居跡、その他の出土遺物

1　26住　　4・5・7　24住
2　29住　　6・8～23　その他
3　21住

付　　編

例　　言

1．本書は、個人による水田改良工事に係る緊急調査の報告書である。

2．本書の執筆は佐藤信行が担当し、図版は宮城県教育庁文化財保護課が作成した。また、遺構の写真は金野正氏が撮影したものである。

3．調査成果の一部は、栗原郷土研究第五号に概報を公表しているが、本書の内容がそれに優先するものである。

4．調査後20余年を経ており、その間佐藤の転居等により、遺物の一部が紛失したり、当時の調査員の調査方法、技術面等に多々不手際が認められ、不備な報告となったことをお断りしておきたい。

5．本書をまとめるに当たっては、宮城県教育庁文化財保護課、栗駒町教育委員会にご高配にあずかった。あつく御礼申し上げる。

調　査　要　項

遺 跡 名：長者原遺跡

所 在 地：宮城県栗原郡栗駒町渡丸長者原88

調査年月：昭和48（1973）年3月26日～4月4日　延べ８日間

調査面積：約300㎡

調査主体：栗駒町教育委員会教育長　菅原一三

調査担当：宮城県教育庁文化財保護室　志間泰治

調査指導：宮城県教育庁文化財保護室　藤沼邦彦、加藤道男

調 査 員：栗原郷土研究会　金野正（築館女子高校）、佐藤信行（自営）

参 加 者：佐藤照一、秋山宗義、佐藤安弘、二階堂善滋、高橋和彦、千田吉信

調査協力：興野義一、熊谷輝雄、森谷謹吾、武川悦治、佐々木運珀、伊藤三郎
佐藤昭一（地権者）

事 務 局：栗駒町教育委員会社会教育課　後藤公佐

（職名等は調査当時）

I　調査に至る経過

昭和48年２月、栗駒町長者原地内で、個人による水田の改良工事によって遺物が散乱し、竪穴住居らしい落込の露呈しているのが発見された。

連絡を受けた宮城県教育庁文化財保護室から、藤沼邦彦技師が来跡し現地視察の結果、宮城県北部では稀有な、古墳時代集落跡である事が予測された。

視察の結果を受けて、宮城県教育庁文化財保護室、栗駒町教育委員会、栗原郷土研究会の関係者で協議の結果、現地は水田改良工事が終了し、５月の田植まで３ケ月の猶予期間しか無い事、遺構の遺存状態が極めて悪い事等から、記録保存の為の緊急調査を行う事となった。しかし、宮城県、栗駒町では年度末や専門職員不在等の理由で、調査が実施できない為、栗原郷土研究会有志で行う事となり、研究会の金野、佐藤が主として調査に従事した。

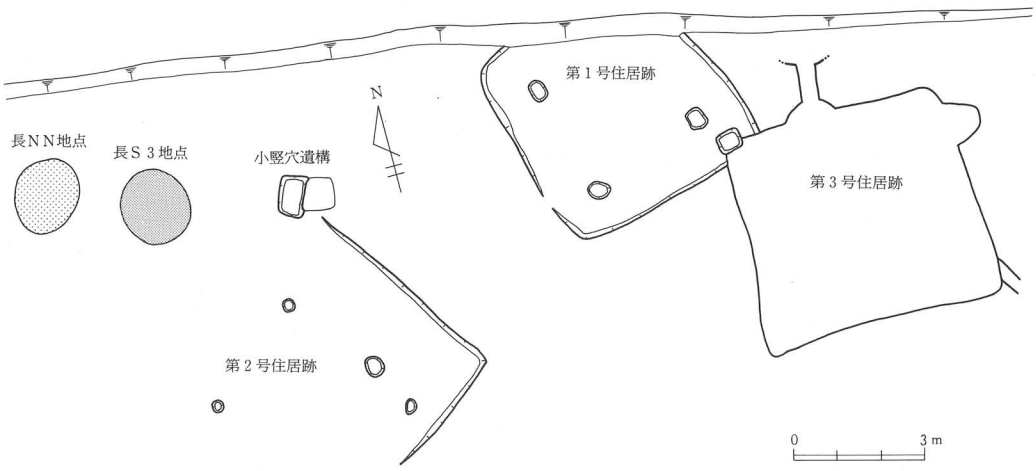
II　発見された遺構と遺物（第１図）

調査によって検出された遺構には、竪穴住居跡３、小竪穴遺構１、焼土遺構１等がある。その内、竪穴住居跡1は未精査である。

(1)竪穴住居跡

第１号住居跡（第２図）

［位置、確認面］　調査区の北側、ほぼ中央で検出された。北壁の大部分は、調査区外に延びている。



第１図　遺構配置図

［重複］　北東コーナー部分が、第３号住居跡によって切られている。

［平面形、規模］　東西5.04m、南北4.8m の隅丸方形を呈する。

［壁］　地山を壁としており、比較的急角度で立上がる。壁高は、最も残りの良い東壁で18cm程である。

［床面］　地山を床としている。全体的に、ほぼ平坦でしまっているが、南東隅の貯蔵穴部分で若干高い。床面から僅かに浮いた状態で、多量の炭化材が検出された。炭化材は、壁際から竪穴中央に向いた、比較的長いものも認められた。

［柱穴］　床面でＰ１～３の３ケのピットを検出した。規模や位置関係からみて、Ｐ１～３は、いずれも主柱穴と見られる。柱穴の規模は、Ｐ１とＰ3が直径約50cm、Ｐ２が直径約30cmの隅丸方形を呈する。深さはいずれも45～60cmあり、ともに直径12～18cmの、ほぼ円形の柱痕跡が認められる。

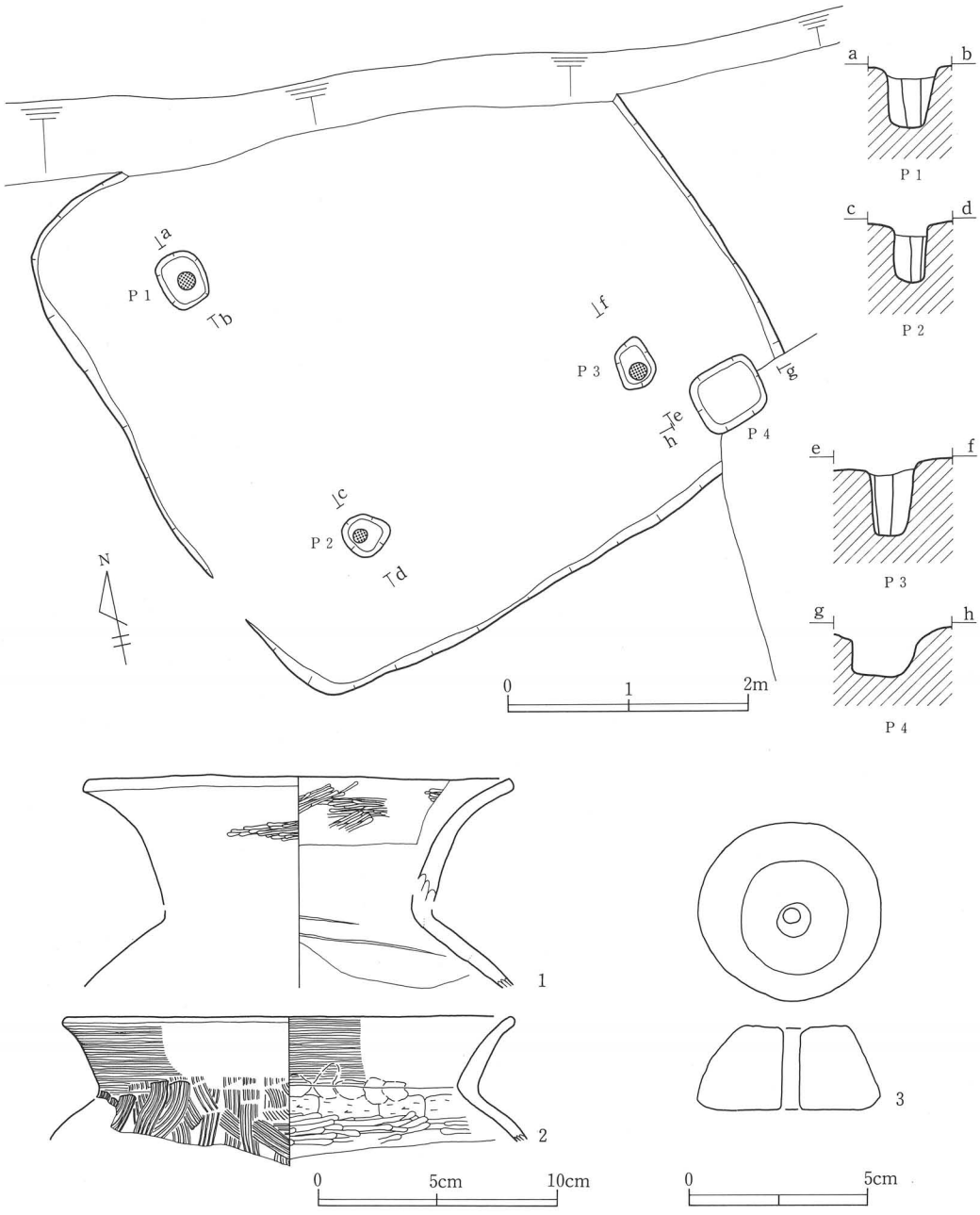
［貯蔵穴状ピット］　住居跡の南東隅で、隅丸方形のピット（Ｐ４）を確認した。長径60cm、短径52cm、深さ35cmで、壁は比較的急角度で立上がる。堆積土中から土師器片若干、ピットの南肩部に接して完形の坏（図版３－７）が出土した。

［遺物］　住居跡床面直上や、Ｐ４に接して土師器坏、壷、甕が出土した。土師器は、他の遺構のものに比して保存はよいが、出土量は少ない。他に土製紡錘車が１点出土している。図版３－７は体部中央でくびれ、口縁に向って内弯気味に外反する坏である。体部下部で脹み、丸みをもちながら底部にいたる。底部は小さく、凹んでいる。外面の器面調整は、体上部がヨコナデ、体中央部分でハケメのち荒いヘラナデ又はケズリ、体部下半はケズリ、内面はヘラナデ、底部近くはカキメ。第２図１は頸部で強く屈曲し、口縁が外反する壷である。口縁端部は角張る。器面調整は、口縁部内、外面に細い横方向のミガキが部分的に認められるが、体部等については磨滅が著しく、不明である。第２図２は、口縁が外傾し頸部で「く」の字状に屈曲し、体上部は強く脹む甕である。器面調整は、外面口縁部ヨコナデ、体部は縦位のハケメ、内面は口縁部ヨコナデ、体部はケズリ、ナデ一部ミガキ。他に図化できなかったが、器壁が薄く、丸底をなす坏下半部又は壷と思われる土器が一個体ある。外面の器面調整は、ハケメのちミガキ。

紡錘車（第２図３）は、横断面が台形状を呈し、ほぼ中心に５㎜の単方向からの穿孔がある。全体に磨滅が著しく、器面調整等は不明である。他に、微細剥離のある頁岩製剥片（図版３－21）がある。縄文時代の所産と思われる。

図化できた土師器３点の内、坏、甕は本遺跡の２km程東方に所在する伊治城跡ＳＤ－261溝（豪族居館跡）出土土器（佐藤：1992）に類似し、壷は名取市清水遺跡第Ⅳ層出土土器（丹羽：1981）に類似する。両遺跡出土土器は、ともに古墳時代前期塩釜式に比定され、

丹羽氏による塩釜式編年によれば(丹羽：1983)、その第II段階に属する。第１号住居跡出土土師器も、ほぼ同じ年代が与えられよう。



No.	器　種	層　位	調　整	口　径	底　径	器　高	残存率	図版番号
1	土師器壺	床面直上	内外面の口縁部にヘラミガキ　全面摩滅が著しい　内外面とも赤彩？	(18.0)	－	－	1／5	3－1
2	土師器甕	床面直上	外：[口]ヨコナデ　[体]ハケメ　内：[口]ヨコナデ　[体]ケズリ→ナデ・ヘラミガキ	(19.0)	－	－	1／5	3－6
No.	器　種	層　位	備　考					図版番号
5	土製紡錘車	床面直上	上端径：2.9cm　下端径：5.1cm　高さ：2.5cm　孔径：0.5cm　単方向から穿孔					3－11

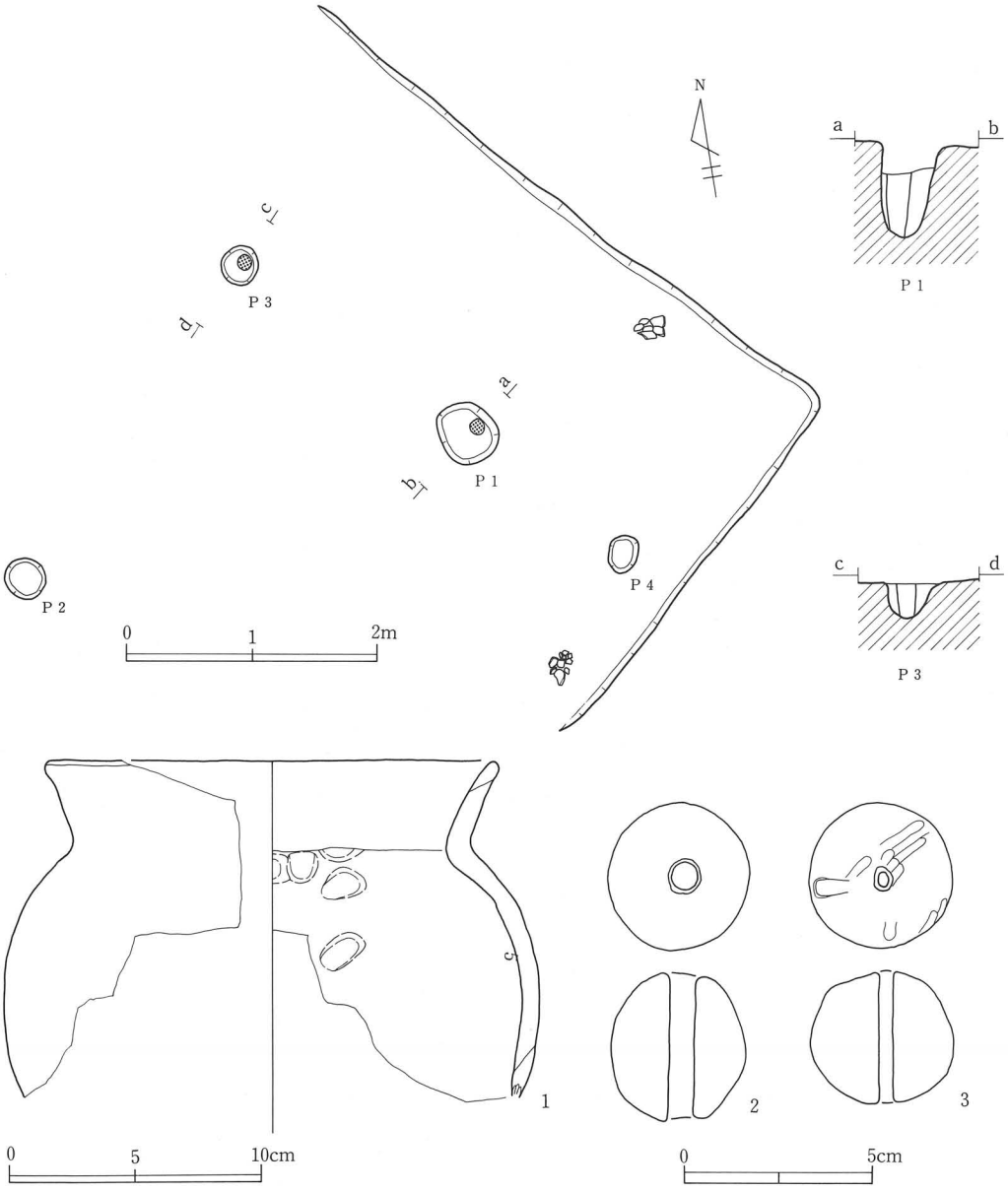
第２図　第１号住居跡および出土遺物

第２号住居跡（第３図）

［位置、確認面］　発掘区の南西隅で検出された。遺構は、削平により露呈していた。

［重複］　北西隅で小竪穴遺構と接しているが、厳密な重複関係にない。

［平面形、規模］　南、西部は削平により消滅しているが、残存部から東西約5.2m、南北



No.	器　種	層　位	調　整	口　径	底　径	器　高	残存率	図版番号
1	土師器甕	床　面	外：摩滅が著しい　内：指圧痕、ナデが部分的に認められる　摩滅	(18.4)	－	－	1／5	3－4

No.	器　種	層　位	備　考	図版番号
2	土　玉	床　面	大きさ：3.7cm×4.0cm　孔径：0.6cm	3－8
3	土　玉	床　面	ヘラミガキ　器面に凹凸あり　大きさ：3.5cm×3.8cm　孔径：0.4cm	3－9

第３図　第２号住居跡および出土遺物

3.5m以上の隅丸長方形を呈すると考えられる。。

［壁］　残存する北、東壁では、壁高14～24cmで、急角度で立上がる。

［床面］　地山を床としている。床面は、比較的平坦でしまっている。一部に貼床がなされたと見え、P1は、確認時には柱痕跡しか確認できなかった。

［柱穴］　ピットは、大小で4ケ検出された。P1は直径50cmの円形を呈し、深さ約70cmで直径20cm前後の柱痕跡が認められた。P2～4はいずれも円形で、直径30cm前後、深さ15～25cm、P3には直径20cmの柱痕跡が認められる。P1とP2～4はその規模や配置関係から見て異なり、或は別の住居跡との重複関係にあった可能性も考えられる。

［遺物］　堆積土上部から土師器、須恵器、黒曜石剝片等が、床面に接して土師器、鉄器が出土した。第3図1は口縁部が短く、外傾して立上がり、体部はそれほど脹まない甕である。全体に磨滅が著しく器面調整は不明であるが、内面に指圧痕、ナデが部分的に観察される。

土玉（第3図2）は、直径4cmで、ほぼ中央に0.6cmの貫通孔がある。マメツしている為、調整は不明である。もう1点（第3図3）は、3.5cm×3.8cmの胴の脹む球形で、中央に0.4cmの貫通孔がある。調整はミガキで器面に凹凸がある。

鉄器（紛失）は長径6～7cmの細長い板状のもので、鎌（註1）の可能性が考えられる。

第3号住居跡（第1・4図）

［位置、確認面］　E18区を中心に、直径2～3mの範囲で集中的に土師器、須恵器、土玉、鉄器等が出土した。その面を取り払った段階で確認した。調査期日等の関係で、プランを確認したのみで、精査していない。

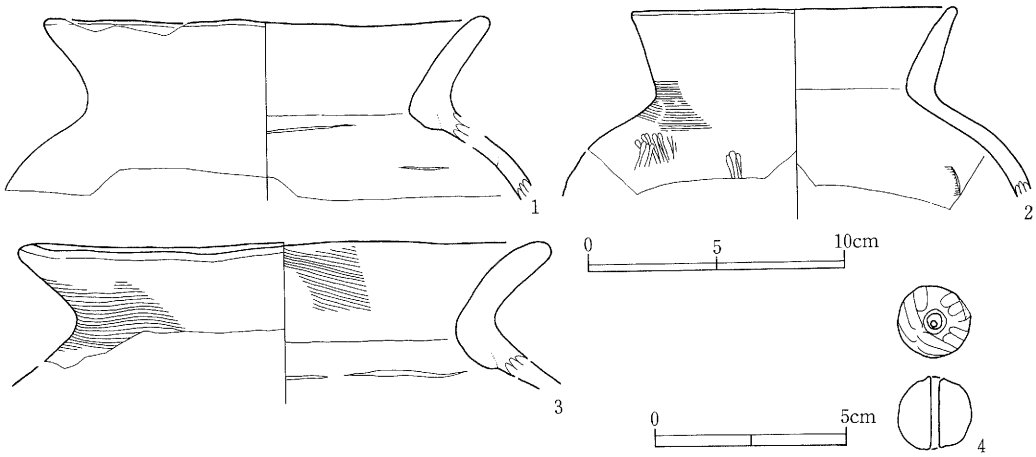
［重複］　上面の遺物群は、1点の所属不明の土器を除き、いずれも奈良末～平安時代のもので、遺物は故意に破細投棄された状況を示す。この時期よりも古い。又、北西コーナーで第1号住居跡を切っており、それよりは新しい。

［平面形、規模］　東西4.8m、南北4.5mの方形又は隅丸方形を呈する。

［カマド］　カマド本体は未確認であるが、煙道、煙出し穴の確認位置から、北壁ほぼ中央に付設された事が知られる。煙道は、壁から約40cm、外方に延びる。

［遺物］　未精査の為、遺物の出土はない。但し、確認面上部出土の遺物には、土師器の坏、甕、須恵器坏、甕や土玉、鉄刀子等がある。土師器、須恵器類は細かく破細された状態で、図化できるものはないが、全体的に見て隣接する伊治城跡出土の奈良末～平安時代のものに類似する。

土玉（第4図4）は、直径2cmで、ほぼ中央に0.2cmの貫通孔がある。全体に入念なミガキによって調整されている。



No.	器種	遺構	調整	口径	底径	器高	残存率	図版番号
1	土師器甕	小竪穴遺構	内外面の口縁部にヨコナデの痕跡　全面摩滅が著しい	19.6	－	－	1／5	3－3
2	土師器甕	長ＮＮ地点	外：[頸]ヨコナデ　[体上部]ヘラミガキ　内：ナデ	(12.8)	－	－	1／5	3－2
3	土師器甕	長ＮＮ地点	外：[口]ヨコナデ　内：[口]ヨコナデ	21.0	－	－	1／5	3－5
No.	器種	遺構	備考					図版番号
4	土玉	第3号住居跡上面	ヘラミガキ　大きさ：2.0cm×2.0cm　孔径：0.2cm					3－10

第４図　第３号住居跡・小竪穴遺構・その他の出土遺物

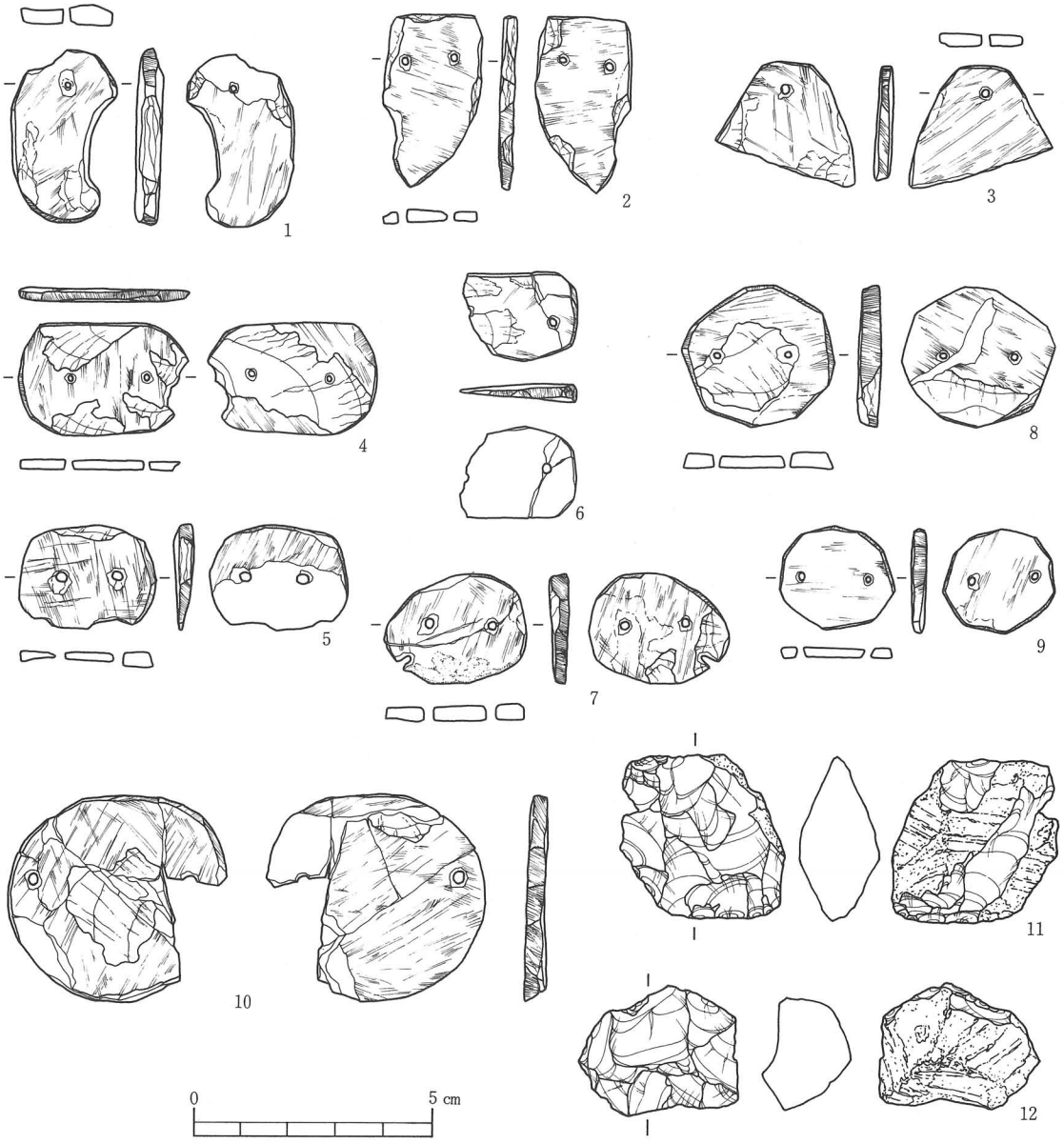
［其の他］　調査時に竪穴の南東コーナー付近で、幅3～40cm、長径1.5m 前後の深い溝が検出された。平成６年度の調査で、近接した地点からオトシ穴群が検出されたが、それと形状が近似しており、本竪穴によって切られたオトシ穴と現在考えている。

(2)小竪穴遺構（第１・４図）

第２号住居跡の北壁西端部に接して発見された。規模は、1.0×1.5m で、南側に若干張り出し部をもつ長方形を呈する。床面の西半分は、ほぼ平坦、東半分は両端から中央に向って傾斜する。床面から倒立した状態で、土師器甕口縁部1個体が出土した。甕（第４図１）は、口縁部が「く」の字状に屈曲して外傾し、体部上半は強く脹む。全体に磨滅が著しく、外、内面の一部にヨコナデの痕跡が認められる他、器面調整は不明である（註２）。

(3)其の他（第１・４・５図）

小竪穴遺構の西方約２ｍの地点で、石製模造品等が径２ｍ程の範囲から集中して出土した。長Ｓ３地点と呼ぶ。遺物の出土層位は、地山直上が多い。出土遺物には石製模造品、土玉、黒曜石石核等がある。石製模造品は、完形もしくは全形の推定できるもの11点と、破片若干がある。器種内訳は勾玉１点（第５図１）、剣形２点（第５図２・３）、有孔円板８点（内１点紛失）であるが、有孔円板には、隅丸長方形（第５図４～７）、多角形（第５図８・９）、円形（第５図10）を呈するもの等があり、いずれも長辺の対称位置に２孔を有する。石材には滑石、粘板岩があり、勾玉と有孔円板１点の他は粘板岩である。尚、未製品、原石等は出土していない。黒曜石は４点出土した。第５図11は両極石核、12は石核、



No.	器　種	遺　構	石　材	最大長	最大幅	最大厚	備　考	図版番号
1	勾　玉	長Ｓ３地点	滑　石	3.7cm	2.2cm	0.5cm		３－12
2	剣　形	長Ｓ３地点	粘板岩	3.7cm	2.0cm	0.3cm		３－13
3	剣　形	長Ｓ３地点	粘板岩	2.5cm	2.9cm	0.3cm	片側穿孔？	３－14
4	有孔円板	長Ｓ３地点	粘板岩	2.4cm	3.6cm	0.3cm	２孔（片側穿孔）	３－17
5	有孔円板	長Ｓ３地点	粘板岩	2.2cm	2.9cm	0.4cm	２孔	３－16
6	有孔円板	長Ｓ３地点	粘板岩	1.9cm	2.4cm	0.4cm	２孔	
7	有孔円板	長Ｓ３地点	粘板岩	2.3cm	3.0cm	0.4cm	２孔	３－19
8	有孔円板	長Ｓ３地点	粘板岩	3.0cm	3.2cm	0.5cm	２孔（片側穿孔）	３－18
9	有孔円板	長Ｓ３地点	滑　石	2.2cm	2.4cm	0.3cm	２孔（片側穿孔）	３－15
10	有孔円板	長Ｓ３地点	粘板岩	4.4cm	4.6cm	0.5cm	２孔	３－20
11	両極石核	長Ｓ３地点	黒曜石	3.4cm	3.5cm	1.6cm		３－23
12	石　核	長Ｓ３地点	黒曜石	3.4cm	2.7cm	2.1cm		３－24
13	剝　片	長Ｓ３地点	黒曜石	1.8cm	2.2cm	0.6cm	末端部欠損、２点接合	３－25
14	原　石	長Ｓ３地点	黒曜石	3.9cm	3.4cm	2.1cm	亜角礫	３－22
15	剝　片	第１号住居跡堆積土中	頁　岩	3.0cm	3.1cm	1.5cm	微細剝離あり	３－21

第５図　石製模造品・石器

他の2点は亜角礫の原石（図版3－22）と剝片（図版3－25）である。

長S3地点の西方約2.5mの地点で、白色粘土、焼土等が検出された。長NN地点と呼称したこの地点のほぼ中央に、倒立した甕口縁部、再加熱を受けたと見られるボロボロになった土師器片等が出土した。カマド状遺構の存在が推定されたが、調査リミットのため精査未了となった。第4図2は、口縁部が「く」の字状に外傾し、体部上半は強く脹む甕である。器面調整は外面頸部がヨコナデ、体上部に縦方向のミガキの痕跡が残る。内面は口縁部ナデ。第4図3は、頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁が外傾する甕である。体部は強く脹む。口縁部は全体的に部厚い。器面調整は口縁部内、外面ともヨコナデ。これらの甕は、その特徴が多賀城市山王遺跡3号遺構出土の甕IIb類（高倉：1981）に類似する。本類は南小泉式に含まれ、丹羽氏による南小泉式の編年では、A群土器に含れ、南小泉式の古い段階とされている（丹羽：1983）。又、小竪穴遺構出土甕（第4図1）は第4図3に近似しており、同様に古墳中期南小泉式に比定され、遺構の年代も同様の年代が与えられよう。

III 考　　察

調査によって発見された遺構・遺物に関連する２、３の事項について検討し、今次調査成果の有する意義を明らかにしておきたい。

(1)

表１は、栗原郡内に所在する古墳時代前期・中期の遺跡を列挙したものである。表１で明らかなように、遺跡の分布は郡の南部、中部の平野部、自然堤坊上、低い丘陵地帯等に片寄り、東部や西部・北部の丘陵、山間部には極端に少ない。南部地区では、高清水町東部から瀬峰町にかけての地域＝Ａブロックと、中部では築館町、志波姫町西部、栗駒町南部にかけての地域＝Ｂブロックに2極化される。Ａブロックでは前期３、中期２、重複するもの１遺跡からなる。前期の集落は、11棟が丘陵上に分布する大境山遺跡のみで、東館遺跡では方形周溝墓1基が所在する。中期の住居跡は東館遺跡で１棟検出されている他、隣接する大寺遺跡では遺物の出土状況、内容等から見て、数棟からなる集落を形成していた可能性が強い。共に、石製模造品祭祀をとりこんでいた可能性も強い。

Ｂブロックでは前期９、中期４、重複する遺跡２からなる。前期では豪族居館、複数の集落跡、複数の墓跡群（周溝墓）で構成される。中期では、前期に比較して遺跡数が半減し、遺跡の規模、内容においても格段の落差が認められる。中期の遺構としては、長者原遺跡の内容がすべてである。

古墳前期文化の北への波及は、現在岩手県盛岡市周辺まで、同中期の文化は遠く北海道にまで及んでいるが、それらは必ずしも古墳文化本来の姿ではなく、続縄文文化期の遺跡

No.	遺跡名	所在地	時期	種別	遺構等	出土遺物
1	大寺	高清水町十二神	南小泉式	包含地		土師器、北大式、黒、模
2	下折木	〃　折木	塩釜式	〃		〃　、黒
3	東館	〃　東館	塩釜式、南小泉式	集落跡、墓	住居跡１、周溝墓１	〃　、紡錘車、黒、模
4	大境山	瀬峰町大里	塩釜式	集落跡	住居跡11	〃　、〃　、〃
5	泉谷	〃	〃	散布地		〃
6	荒町	〃	南小泉式	〃		〃
7	町裏	築館町薬師	塩釜式	〃		〃
8	留場？	〃　留場	南小泉式～			円筒埴輪
9	新田	〃　玉沢	南小泉式	包含地		土師器
10	小館山	〃　宮野	〃	〃		〃
11		〃	塩釜式	墓？		〃　(底部穿孔壺)
12	伊治城	〃　城生野	塩釜式、南小泉式		土塁他	〃　、北大式、黒、模
13	〃	〃	塩釜式	居館跡		〃　、北大式
14	鹿島神社	〃　宮野	〃			〃
15	迫川河底	〃	〃			〃
16	鶴の丸	志波姫町八樟	〃	集落跡、墓	住居跡５、周溝墓８	〃　、砥石
17	宇南	〃	〃	〃	〃　１	〃
18	御駒堂	〃　堀口	〃	〃	〃　１	〃
19	祇園	一迫町真坂	南小泉式			〃
20	桜田	栗駒町尾松	塩釜式			〃
21	長者原	〃	塩釜式、南小泉式	集落跡	住居跡２、小竪穴１	〃　、鉄器、土玉、黒、模

第１表　栗原郡内の古墳時代前期・中期の遺跡　（・黒は黒曜石の略　・模は石製模造品の略）

等に於いて共存する場合も多い。本遺跡より北では、岩手県水沢市高山遺跡で発見された住居跡１棟が、古墳前期の遺構としては唯一である。中期になると、岩手県水沢市の西大畑、面塚遺跡、北上市猫谷地遺跡等で１～３棟からなる集落が形成される。又、この地域では最北の前方後円墳角塚古墳が造営されている。一方、日本海側では秋田県西目町宮崎遺跡で住居跡1棟が検出されている。宮崎遺跡では、出土土器に古墳、続縄文両文化の要素が共存する。又、集落跡ではないが、青森県天満林村森ケ沢遺跡では、続縄文文化起源の土壙墓10数基が発見されている。森ケ沢遺跡では、古墳中期と続縄文文化後期の各種遺物が墓壙内で共存した。

(2)石製模造品

本遺跡の石製模造品についてまとめると、次の通りである。

①古墳中期の居住域に密接した、狭い範囲内から集中的に出土。

②遺構、或は特別な出土状況を示さない。

③数量は、ほぼ原形の判明するもの11点、破片数個体がある。

④器種には、勾玉、剣形、有孔円板等がある。勾玉は１点、剣形は２点のみである。

⑤原石、未製品は検出されていない。

⑥石材は、滑石製２点の他は粘板岩である。

1973年度の調査によって得られた事実を６項目にまとめた。一方、1993～４年度の調査は広範囲に、しかも精度の高い調査であったにも拘らず、勾玉１点と有孔円板２点が加わったのみで、1973年度の知見に加除すべき事実はえられなかった。従って、先に掲げた６項目が、長者原遺跡の石製模造品に関する全容を、ほぼ伝えるものと考えて良いだろう。本遺跡に於ける石製模造品のあり方について、遺構出土資料を基に検討された岩見氏の論考（阿部、須田、岩見：1991）に依って、比較検討を加える。岩見氏は県内の石製模造品出土遺構が、①器種とその組合せ、②点数、③出土状況等により、大きく４分類できるとし、Ａ　住居跡、Ｂ　土壙墓、古墳、周溝墓、Ｃ　土器集積遺構・新峯崎タイプ、Ｄ　特殊なあり方を示すもの、土壙状遺構や窯跡等に夫々見られるあり方に分けられると言う。

この４分類を長者原遺跡の６項目と対比してみると、いずれの項目も岩見氏の分類からはみ出す。しかし、少なくともＢ、Ｃ、Ｄであった可能性は少ないので、Ａからもはみ出す点はあるものの、総合的にみて岩見氏の分類Ａに該当する可能性を指摘しておきたい。

第２表は、大崎、栗原地域の石製模造品出土遺跡をリストアップしたものである。大崎地域では約10遺跡からの出土が確認されている。分布は、古川市域に５遺跡が集中し、加美郡、玉造郡にも及ぶが遠田郡、志田郡内での出土例は確認されていない。遺構出土事例としては、古川市留沼遺跡で壷中から有孔円板５点が出土しており、名生館遺跡では複数

の住居跡から、斧形、剣形各1点が出土している。後者は岩見氏の分類ではAに属する。

栗原地域では、本遺跡を含めて4遺跡が確認されている。(1)で触れたA、Bブロックの地域内に限定的に分布し、古墳前、中期の集落等と密接な関連があった事をうかがわせる。

石製模造品の北へのひろがりは、遠く北海道石狩低地帯にまで及んだ事が知られる。石狩町紅葉山遺跡では、宮城県でも発見例のない刀子1点が出土しているが、その出土状況、時期等は分明でない。東北北部の青森、秋田、岩手各県では、夫々数遺跡からの出土例が報告されているけれども、青森県下田町中野平遺跡で剣形を中心に6点と一括資料が得られている以外は、いずれも1～2点の散発的出土にすぎない。更に、中野平遺跡例を含めても、その所属時期、出土状況、性格等について明確になった事例は知られていない。以上のような東北北部の状況からみて、古墳中期の石製模造品祭祀の、本来あるべき姿を推定できる事例として、現在のところ、本遺跡が北限と見なしえる。

No.	遺跡名	所在地	遺構	時期	器種・点数	備考
1	留沼	古川市留沼		引田式	有孔円板5＋α	壺の中より
2	名生館	〃 大崎名生	ＳＩ312住	南小泉式	斧形1	
3	〃	〃	ＳＩ306住		剣形1	
4	北馬場壇	〃			有孔円板1	
5	新田町	〃 宮沢新田町		塩釜式か	〃 3	古川工高
6	引田堀込	〃 引田堀米			勾玉1、鎌形1、臼玉多数	河川敷、渋谷氏蔵
7	塚ノ目	〃 塚ノ目 伊勢堂古墳南方			土製勾玉10＋α、土製管玉10＋α	
8	〃	〃 塚ノ目古墳前方部付近			〃	
9	菜切谷	加美郡中新田町菜切谷			有孔円板1	
10	一ノ関	〃 色麻町一ノ関要害			〃 4	色麻町史
11	孫沢	〃 宮崎町米泉孫沢			〃 1	
12	神道塚原	〃 岩出山町下野目			〃 1、剣形1	毛利コレクション
13	大寺	栗原郡高清水町十二神		南小泉式か	〃 4	
14	東館	〃 東館	方形周溝墓	南小泉式以後か	〃 1、剣形1	堆積土1層
15	〃	〃	表土他		〃 4	
16	伊治城	〃 築館町城生野	ＳＤ02大溝	南小泉式か	〃 1	第4層
17	長者原	〃 栗駒町尾松		〃	〃 10、剣形2、勾玉2	

第2表　大崎・栗原地域の石製模造品出土遺跡

(3)黒曜石製石器

黒曜石製石器は、今回の調査で4点出土した。内訳は石核2、原石1、剝片1である。調査前に表採によって、剝片等5～6点が得られている。又、1993～4年度の調査では5点のスクレーパーを含む12点が出土している。出土地点は、1973年の調査及び表採資料は、調査区西部の長Ｓ3地点付近に集中し、1993～4年の調査でも長Ｓ3地点に隣接する地点及び古墳中期の可能性のある住居跡周辺等からの出土が多かったという（註3）。

出土した黒曜石は、不透明で黒色と灰色等の縞状をなし、1㎜以下の白色含有物を含む等の極だった特徴を有する石材で、原産地は加美郡宮崎町湯ノ倉である事が確認されている。湯ノ倉原産の黒曜石は、旧石器時代に既に利用が開始され、縄文時代には県南部まで拡散が認められる(井上：1985)。縄文、弥生時代には主として石鏃等の限定された器種に用いられ、石器全体に占める比率は極端に低い。この黒曜石が主役となるのは古墳時代になってからで、県北部を中心に南は県南部、北は青森県にまで分布が拡大する。この時代には、

スクレーパー等の加工具にほぼ限定される。県北部では、黒曜石製石器、古墳前、中期の土師器と、しばしば続縄文時代の後北、北大式土器が共伴又は伴出する。北海道続縄文時代の後北Ｃ２、Ｄ式、北大式には、黒曜石製のラウンドスクレーパー類が、唯一、定形石器として伴う事が知られており、東北地方の古墳時代遺跡出土の黒曜石製石器は、続縄文文化の南下に伴ってもたらされた特有の遺物として理解されている。この黒曜石製石器は、一般の生活跡と思われる遺跡の他、土壙、土壙墓、古墳等からの出土例も知られており、加工具としての機能の他、祭祀や副葬等にも用いられた事が知られる。長者原遺跡では、原石、剝片を含む点から、遺跡内で製作が行われた事は明らかであるが、その目途については、単にスクレーパー類の加工具としての機能を求めたものか、石製模造品とともに、或種の祭祀に用いられたのかは不明である（註４）。

Ⅳ　ま　と　め

Ⅲ章で、古墳前、中期の遺跡、石製模造品、黒曜石製石器の３項について、主に栗原郡内についての現状を述べ、一部、東北北部の現状にも触れた。この現状をふまえて、今次調査のまとめとする。

1　遺跡は、二迫川と芋埣川に挟まれた、東西に延びる細長い丘陵上に所在する。

2　遺跡の形成時代は、大きく縄文、古墳、奈良～平安、中世の各時代に渉り、細長い丘陵上に展開するが、今回調査した古墳時代の遺構は、遺跡の東端部に集中する。

3　検出遺構は、古墳前期の住居跡１棟、古墳中期は住居跡１棟、小竪穴遺構１、カマド状遺構1で、他に時期不明の住居跡１がある。

4　出土遺物は、古墳前期では土師器(坏、甕、壷)、土製紡錘車がある。古墳中期では土師器（甕)、土玉、鉄器（鎌？）があり、石製模造品、黒曜石製石器もこの時期のものであろう。他に、奈良～平安時代の土師器、須恵器、鉄器、土玉等がある。

5　古墳前期において、築館町を中心としたＢブロックの地域が、現時点では在地首長層の出現を示唆できる最も北に位置する地域であると言えよう。

6　石製模造品は、器種構成、数量、出土状況等の諸点から見て、大崎、栗原地方では最も良好な資料である。これより北の地域でも、本遺跡の内容を上まわる例はなく、所属時期や性格の不明な場合がほとんどである。

7　黒曜石製石器等の北海道系遺物の出土は、古墳前、中期における本地域の地域的特性を示すものである。

註1　藤沼邦彦氏の御教示による。

註2　形状等から見て、遺構の重複の可能性が強いと現在考えている。

註3　宮城県教委による1993～4年度の調査内容については、三好秀樹氏より御教示をいただき、本稿で引用させていただいた。

註4　Ⅲ章を書くにあたっては、文献(8)～(10)を主に、多数の報告書を参照したが、紙数の関係で省略させていただいた。

又、岩手県の高橋信雄、高橋与右エ門、秋田県の高橋学、青森県の三浦圭介の各氏から種々、御教示をいただいた。

引用・参考文献

(1)金野・佐藤（1973）「栗駒町長者原遺跡発掘調査概報」『栗原郷土研究』5

(2)佐藤則之（1992）「第17次調査」『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第5集

(3)丹羽・小野寺・阿部（1981）『清水遺跡』宮城県文化財調査報告書第77集

(4)丹羽茂（1983）『宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集

(5)高倉敏明他（1981）『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告書第2集

(6)阿部・須田・岩見（1991）『新峯崎遺跡』宮城県村田町文化財調査報告書第9集

(7)井上真理子（1985）「大木囲貝塚出土の黒曜石製石器の原石起源について」『北奥古代文化』第16号

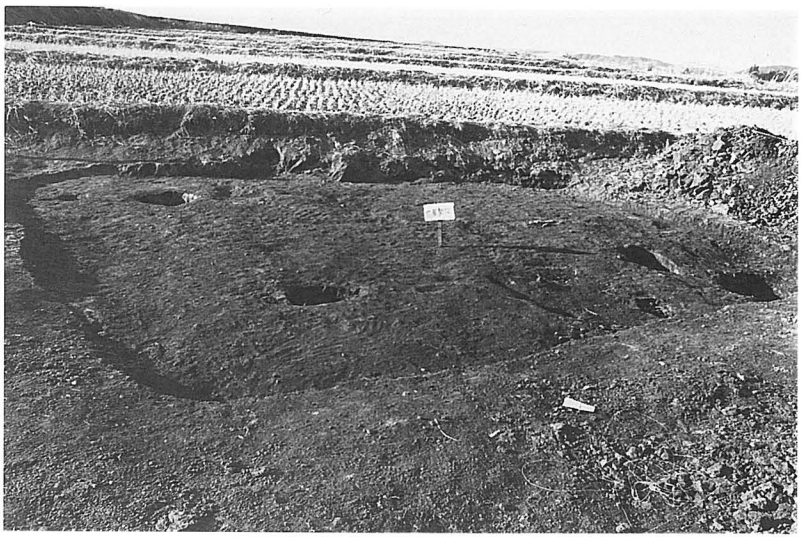
(8)縄文文化検討会（編）（1994）『北日本続縄文文化の実像』第5回縄文文化検討会シンポジウム

(9)岩手県立博物館（1982）『岩手の土器』

(10)岩手県埋蔵文化財センター（1985）『岩手の遺跡』

写　真　図　版

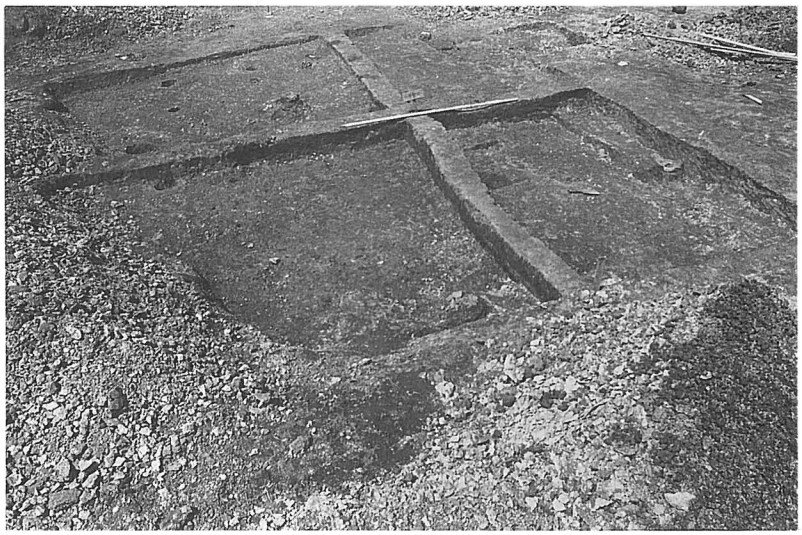
調査区（東から）



第１号住居跡（南から）

第１号住居跡貯蔵穴状ピットと土師器坏（北から）

図版１

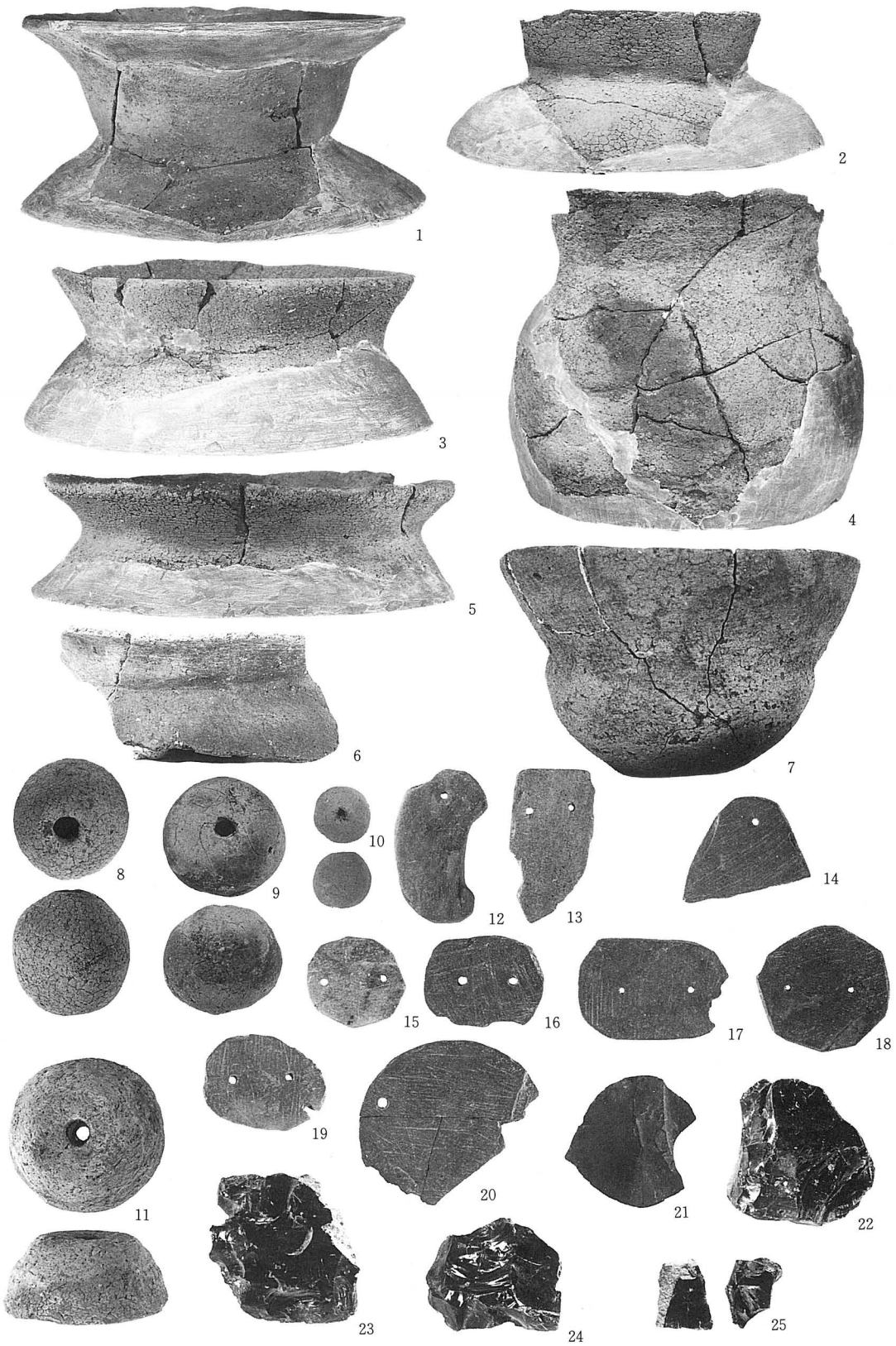


第 2 号住居跡（南から）

第 3 号住居跡（南東から）

長Ｓ 3 地点

図版 2



図版3　出土遺物

1～6　S＝⅓　8～11　S＝½
7　S＝約 7/10　12～25　S＝⅔

栗駒町文化財調査報告書第３集

長者原遺跡

平成７年３月20日印刷
平成７年３月30日発行

発　行　栗駒町教育委員会
栗原郡栗駒町岩ヶ崎六日町69
印　刷　株式会社東北プリント
仙台市青葉区立町24－24